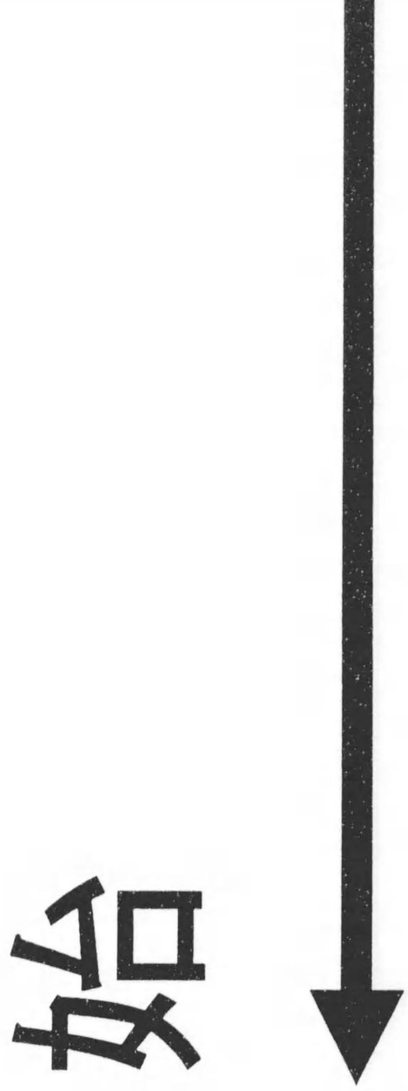
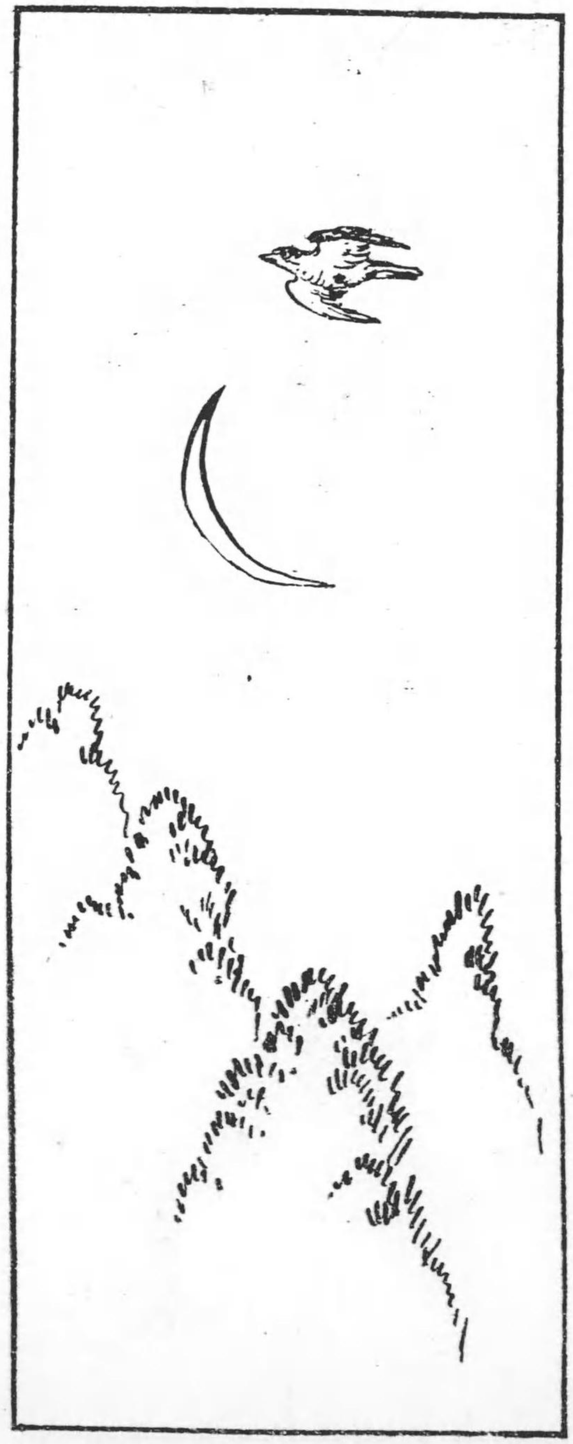
556
77



紫明彩吟



自得閑人紀行文集

紫明彩吟

大正
15. 9. 9
内交

556-77

我敷嶋の道のまとゐの中に日頃いそしまるゝ平井卯之助ぬし自得又は溟魚と號へ兼ねて繪筆にもしたしまれ常に何くれとなく公のつとめ忙しき中にいとまを得たまへは必すをちこちの名ところあるは古き物かたりの跡なとを尋ねめくりて至る所そのけしきを寫し又は歌にうたひ出したるものかきつめおかれけるか今は幾十篇と積りたりけれはこたひこれを集めて一卷となし梓にのほしおなし心のみやひの友にわかつ事となし給ひぬ草まくらわけゆく旅のしをりなす書は世にその數いとさはなるは今さらいふへくもあらねと覽るものたちこころに彩なす筆に聞くもの玉なす言の葉の光にさやけくうつし出して宛らおのれその處にあそふ思あらしむるもの此ふみの如きは少かるへしこは雲に聳ゆる高嶺波ちはるけき

海原あるはふりし昔のあこなと目にうつるものは繪にてあらはし見えぬものは言の葉にて心の底の匂を偲ひうたひ出すかゆゑに一しほさやかに又つはらにも知り得へけれは世にありふれたる旅日記のたくひなこの遠く及ふ所にあらす卯之助ぬしおのれに一言をしるしてよと請はるゝまゝにいなみかねて思ふふしを一筆かくなむ

海山の道のみならす此ふみは
言葉の花のしをりとも見ん

大正丙寅の年文月のはしめ

黑田清秀

自序

皇城の南愛宕山の艮に閑素幽栖の處士あり自得閑人と號す性鈍く器淺くして能を蓄へ藝をいるゝに堪へず天分素より薄ければ才を練り智を磨く術もなく空しく窮巷の埋木として意樹花咲くべくもあらねどいさゝか文林に果を拾ひて貧しき心病をいやす、食餘りありとしもはなけれども積年胥吏としていそしめる恩俸は饑寒を叫ぶに至らず去にし癸亥の震火に草廬やけ失せて年來の文殼ことゞく灰燼となりぬる中に纔に取り出でたる一筐數編の紀行の曾てさる雜誌に掲載せられたりしを今回取り集めて一冊とし紫明彩吟と名け之を刊行することゝはなしぬ、今少しく斯著の本質に就て語らん由來彼閑人煙霞の癖癖ありて公暇に會ふごとに瓢然出でゝ山水を探討して以て樂とし敢て季候の好否と伴侶の有無とを問はず其踏破する處概ね之を記叙し勝景眼を喜ばしむるに遭へば必之を模寫して手帖に收むる若しそれ詩興の湧起するに會しては之を國風に詠じて後日の追憶に備ふ。斯の如きもの積りて遂に冊を爲すに至れり抑繪畫は彼が少壯好むで學びし處筆致の稱すべきものなしと雖

も適意之を臨摹して人をして景の梗概を窺はしむ國歌は年ごろ喜むで口にするもの調未だ整ふに至らずと雖も其境に隨つて所感の一端を漏らし以て自ら慰み自ら樂しむ、かゝればは其記事毫も奇警人を駭かすなく珍異耳を悅ばすなく到底無味平凡の譏を免れざるべしと雖も其記述唯眞唯實些の虛構修飾を施さず竊に世間同好の參考だらんことを期せり然はあれど畢竟これ業餘の操筆好事の所產鷄肋の捨て難き類に過ぎず看者其拙陋を笑ふ事なかれ。

大正十五年七月

著者記

紫明彩吟

目次

秩父の秋色……一
嶺雲記　箱根の暮景……一一
昇仙峽遊記……一八
香山紀行　伊香保の旅……三七
孤筇漫吟　北越旅詠……五二
函嶺遊記……五九
伊豆回遊記……七一
湯河原澡泉記……九九
東奥瞥見記……一一六
外房紀遊……一四二

刀水遊航記……一六六
日光湯元の旅……一八二
嶽南遊記 駿河の旅……一九三
入鍾記 日原鍾乳洞探檢……二一二
壬戌紀行 愛知、京都、大阪、高野山、和歌の浦及播州の旅……二三二

目次終

紫明彩吟

平井自得著並畫

秩父の秋色

自得子曩に友人K君と三び山河を跋渉し寰外の勝に飽く、頃日亦秩父長瀞(ながとろ)行を約し十月三十日午前K君と上野に會し、汽車に駕し八時五分同所を發す、眼に入るもの刈殘されたる晩稻と、結束されたる桑樹のみ、唯菊花の黄白時に圃畔に點在せるあり少しく興を惹く熊ヶ谷にて車を上武線に換ふ、前方既に秩父の連山を望み、右方遙に赤城榛名諸山を觀る、十一時三十分寶登山(ほとさん)驛に着く、驛は秩父郡野上村に屬し寶登山の東麓に位す東行二町長瀞溪潭に達す、所謂長瀞は隅田河口より上流約二十三里荒川水源より下流約七里　兩岸相逼り水勢緩徐深潭を爲せる溪流六七町を指稱するものにして、江に臨み新に一旅亭を設け長瀞館と稱す、巨岩斗出岸を爲し蜿蜒起伏龍の蟠るが如く、虎の嘯くが如く、清沙其間に路を爲し、亭榭亦風致を添ふ、而して對岸は造化の神斧を以て削り成したる千仞の絶壁にして、其缺隙より滴る龍乳は好個の小瀑を爲し、翠樹其上を蔽ひ點綴せる楓櫨は未來ある

紅黄を日光に曝し、清流は湛々として紋を爲す、一言以て之を評す、曰く水は藍よりも濃く巖は雪の如く白し、余一首を得

岸のべのもみぢと色やきそふらむ
あゐをたゞふる谷のかたふち

岩石は其色淡赭又は淡黑、間々雪白の斑點あり、質堅硬稜角に富み皺皺恰も雪舟の筆意に似たり、而も水色の深紺碧なると、赫々たる日光の直射と、巖上一木一草無きとは自ら岩面をして純白の觀あらしむ、先づ上流數町の勝を探り返つて亭に憩ひ行厨を開く、K君頻りに地理其他を質す亭婢曰く鮎漁の季節最繁昌す、又曰く大宮町迄直に縣道に出づる時は約二里にして近かるべく、路を對

岸に取るときは道程半里を加ふべし、然れども眼下に溪水を觀其快云ふべからず、且下流約一町に自由渡舟あり何人も就て渡るべしと、即其方法を委曲説示す、午後一時亭を辭し渡舟場に至る、見れば兩岸より太き針金を引き、棕梠繩を懸け舟を繫ぎありて折から其舟彼岸にあり余K君と共に其繩を牽く、宛然紙鳶の緒を手繰るが如く、又地曳網を曳くに似たり、已にして舟は來りぬ、二人やをら飛移り又々綱を繰る、中流に至つて流水の壓迫を受る事甚しく渡過頗る艱む、K君稍々色を變ず余も必死の力を出し辛うじて對岸に達し、蘇生の思をなし二首を口ずさむ

つなでくりみづからやれど荒河のわたりの舟のあやふげもなし
一筋の綱をちからに山がはのあやふき瀨をもわたりつるかな

K君は後者を眞情に適せりと賛す、懸崖を攀ぢ壠圃を縫ひ行く事少許にして村道に出で、對岸の光景全く一變す、されど有體に言へば多く樹木に遮蔽せられ眺矚を縱にし得る處唯赤壁厓上數十歩に過ぎず、然も何等身を置くに佳なる場所あるなく、余の如き神經過敏なる者足顫ひ手戰き到底久しく下瞰すること能はず

行く事十數町荒川の清流遠く去り、砥の如き坦道に出づ、即縣道なり、皆野村に料亭數戸あり脂粉を施せる阿嬌の徘徊するを見る、午後四時大宮町に達す道途探勝眼に入るもの近景甚乏し、唯前方武甲三峯（みつみね）の秀峯麗山余等を招きて止まず

始め武甲山の山腹凹處の白皚々たるを觀、余曰ふ已に降雪ありしならむと、K君否定して曰ふ岩石なるべしと、進むに從て白愈光を加ふ、K君亦雪ならむ歟を疑ふ、行人に問ひて其白亞岩層なるを知りぬ

武甲の山ふもとの風のさむければみねのいはほの雪と見ゆなり
まだき降れる雪とまがへつ武甲の山ひかりさやけき谷のいはほを

大宮町には縣社秩父神社農學校警察署郵便局八十五銀行支店等あり、町形南北に長く十餘町もあらむか、今日しも天長節祝日の設とて中央數町紅白の幔幕を張り小國旗を以て飾れり。斯くて更に前進奇景を探らむか、將此處に一宿して歸途徐に沿道の勝を尋ねむか、と二人熟考未だ決せず、一亭に憩ひ三峯行馬車の發車時を質せば、初には既に發車せりと答へ、更に發着所に問ひ來りて、即刻發車すと告ぐ、而して從來質したる處と今又聽く處とを綜合し、略其一日程なるを推定し得たるを以て、進んで三峯登山を爲すに決したる時恰も馬車店頭に來る、匆々搭乘し行く事一里餘、一橋あり湯澤橋と稱す即ち荒川に架するもの、此邊山漸く深く、谷漸く幽かに、兩岸の樹林鬱乎蒼々として或は濃き或は淡き紅葉彩を爲し、流水は白布を引くが如く、景致掬すべし

惜いかな金烏西山に入り、暗雲次第に天地を包み、山容水態共に觀るによしなし、而も乘客の知人に遭ふあれば馭者即馬を控へて待つ、其情誼愛すべく其悠長驚くべし、行く〳〵同乘山中某が頃日三峯山中にて子持熊を仕止めたる氣焔談、洋服紳士の之を稱揚する、若くは醉眼氏の秩父地方富源不盡藏談等、會話頗る佳興に入る、余等傾聽爲に無聊を免るゝを得たり、既にして夜氣漸く至り冷風肌を刺す、K君惱むが如し、車を停めたる時凝視すれば馬背より出づる呼氣白濛々たり

行く駒のつくいき白く見にけり山べは秋の風さむくして
車男はくれぬと駒をむちうちぬ谷のかけぢははしりがたきに

午後六時三十分強石（こはいし）に達す里程大宮より約四里

強石は白川村に屬し三峯登山路の一寒村なり、旅舍總て三、外に怪しげなる料亭一戸を見る、余等は同乘者に勸められ二木屋に投ず、待遇厚しといふべからざれども質朴飾なく然も寢具清潔、且宿料の廉なるは尤余等書生に適せりといふべし、水聲を聽きつゝ夢寐に入る

三十一日曉起窓戸を排し前方を觀れば北斗猶峯頭に燦爛たり、右方暗黑裏より出で彎曲帶を曳くが如き白光は即鞏鞳たる荒川溪流なり、須臾にして衆星影を沒し太白獨り光を縱にし、樹稍の紅綠稍現はる、倉皇朝餉を喫し舍を出づ、亭婢余等の無雜作なる旅裝を危ぶむものゝ如し、行く事數町一瀑布の路傍に懸るを見る、是より道急坂となり突兀たる奇岩は頭上に落ち來らむかと疑はれ、脚下には溪流雪を吐き、遠く疊々たる群峯を望む、紅葉は例に依て彩を爲し趣致言ふべからず、忽然一個の隧道あり、是より路稍下降す數町にして岐路あり、右すれば信州に至るべし猶下ること十數町、始めて山麓登龍橋に達す、途に子育地藏の小堂あり

溪は荒川の水源にして是より上流を中の津川と稱す、奔流巖壁を削り激湍石床を破り、層々瀑を爲し轟々鞏々、飛流は即龍の登るが如く碧潭には鮫の潜むかと疑はる、加ふるに紅葉は茲に來つて、益其紅を深くせり、此處より道更に急峻となる清淨の瀑に至るの間、道として溪谷に沿はざるなく、溪底奔流の奇あらざるなく、岸として紅葉あらざるなく、峰として紅を染めざるなく、奇石前に竢ち怪岩後に從ひ、白雲其間に生じ朝暉今や峯頭を照す、此際の景致到底筆舌に盡すべくもあらず、余一首を得

岩ばしる瀧のはやせの浪もよし紅葉あるたに雲おこるたに

清淨瀑は登龍橋より二十一町目にあり、瀑の高さ約二丈前に茶店あり名物御山木箸等を鬻ぐ、登る事數武畸形の巨杉を道傍に見る、余等假に命名して瘤杉と云ふ、是より道愈〻險登攀頗る惱み、十歩に佇立し百歩に少憩す、登龍橋を起點として一町毎に標石を建つ、K君試に歩測對比して要領を得ず、再三に及むで遂に標示の杜撰なるを確む、聞く好事者嘗て此石を負荷し其位置を變更せしめたるなりと

二十二町以上水聲漸く絶え、唯巨樹の蔚然たるを見る、五十一町目は即山頂なり、古色蒼然たる隨神門の前なる新設の社格表には縣社三峯神社の六字金色燦然たり、神韻縹渺たる

樂音を天の一方に聞きつゝ漫坂を下ること一町下乘札あり、所謂御神犬なる狼の高麗犬に守護せられたる磴道を登れば銅製大華表立ち、表面數十歩に社殿あり、輪奐の美坐ろに神威の赫灼たるを思はしむ、左右なる水屋燈籠共に彫刻の妙を極め、就中燈籠は精巧緻密比類無しと云ふも過言にあらざらむ歟

一拜の後歩を右方に轉ず、此處に攝社祖靈社外三社末社十二、竝に近者落成せる舞殿あり木場堅川講の寄進に係る、左方には國常立神社、神饌所等あり社務所は則宿坊を兼ぬ、賽客多く茲に宿泊すと云ふ、就て神社緣起を乞へば折柄品切なりと答ふ、今日天長節臨時祭にて神女舞竝に大和舞の奉納ありと

ぞ

匆々踵を旋し前路を下る、隨身門を出で、數武、大日向及奥院道あり、奥院へは程更に三十町、道極めて險、鐵鎖に縋り登攀する處ありと云ふ、余等歸程を急ぐを以つて探究を爲さず、此地海拔四千尺有餘の高處なりと雖蟲々たる喬木の看を遮るあると附近に雲取山其他高峰峻嶺の連立せるを以て展望の佳なるものなく、余等をして失望せしめぬ

來時の苦艱なりしに似ず、歸路　飄々搖々風に駕するが如く、毫も膝馬子をして疲勞を訴へしむることなし、時に日正に亭午、山々日光の照射を受け、紅葉又一段の美を加ふ、乃前に過りたる茶亭に憩ひ、觀勝を恣にし、更に登龍橋に丹青先生を呵してむづかしげなる寫生を試む、二人勝景に戀々し低徊顧望之を久うす、已にして飢渴を感じ意を決して山靈に謝し、午下一時に垂んとする頃二木尾に皈る、途次K君句あり

山一つ脊負つて柿の木ゆがみけり

小春日や栗煮る釜の湯のけむり

余亦詠あり

鈴なりになれる柿の實しぶからむ冬近づけどとる人もなし

筏おろす谷ふかければ柚人のかげ豆よりもちさく見えつゝ

何れも實景なり、一時三十分餐を終へ例のガタ馬車に搭し行く〳〵幽溪を賞す、荒川橋にて

くれなゐの雲の上行くこゝちしぬもみぢ見おろしわたる長はし

其他、安谷橋、大橋、湯澤橋、等何れも景趣あり、影森村某小學校にて天長節祝賀餘興を催せるを見る、四時大宮町に着き、待つ事半時、再馬車に搭ず皆野村にて競馬會散會の群集に遭ふ、車行爲に遲々たり、余とK君と汽車の發車時に遲れんかを危み、屢々馭者に質す、驛既に數町の所に至り、本橋の今夏洪水に切斷せられ、假橋僅に車馬を通ずる處、一び乘客を降車せしめ且當面に來りたる荷車の通過するを待つに逢ふ、余等時を失はんことを虞れ、此處に馬車を捨てゝ疾風の如く馳走し秩父驛に達し發車時を問へば尚二十分餘を剩す、二人相顧みて苦笑し且喜ぶ、六時十五分汽笛と共に發し七時四十五分熊谷に九時五十分上野に着し祝賀行列員退散の後を追うて家に皈る

（大正二年稿）

嶺雲記

霜月初の九日、例の游意動き箱根へとものす、正午に國府津に着きて電車にのる、小田原を過ぐれば右に左に並木の松の列びて立てる、石垣山、石橋山、の同笑顔して迎へがほなる、前の年渡りつる早川尻の長橋さへ忘れがたきに、なづかしき二子山はや行てに見ゆ、一時すぎ湯本へ着く、鞏鞜たる河伯のをたけびに心の塵まづ濺がれぬ、岸に枕める亭に、晝食の箸そこ〳〵に取りをへ、宮の下の方へ出でたつ、玉の緒橋、千とせ橋、名さへ趣深し、今日しも東京なる何某新聞社の催せる强羅觀楓會てふがありて、そこゝに其案内札掲げたり、實に其つれならし色濃き紅葉を帽の額にかさし又は折枝持てる雅士、四人五人づゝ幾群となく皈る、足早にたゞいそげる、心よげに詩吟じ行く、あるは笹の葉の露の光顔ばせにほの匂へるなど樣々なり、なかにしとやかなる女君も見ゆ

横濱電燈會社のと聞く發電用水の排水路より落ちて瀑なせる、かつて白龍の瀑など名づけ興じつる、いつもながら目も覺むるばかり鮮かなり、電氣にかはりたらむ時の力の程推は

からる、谷の紅葉の今盛なるに、うら枯れたる尾花の猶人待がほなる哀なり

まねくての寒げなるかな木枯に
やつれはてたる篠のをすゝき

案内知りたる舊道登れは落葉に足の蹈所もなし、水の音遠ざかりて家毎に木をくり挽く轆轤の音きりきりと響く、思ひがけなくさわ〳〵と音するは熟柿打ち落せるなり、太平臺を過ぐれば富士屋ホテル別館の紅葉いとうるはし、盛夏の頃にひきかへ軒を並べたる宮の下の旅館、商賈、顧客ありとしも見えず、まして谷底なる堂が島思ひやらる、されど自動車の響ゝたく絶えねば山祇の夢安かるべうもなし

芦の湯への路左に見てより寂しさ一しほ添ふ、底倉なる八千代橋にたゝずみて蛇骨川見おろせば、千尋のそこよりかさなり立てる大岩小岩、枝さしあへる紅葉、常磐木、さては淙〻とひゞく水音、いづれか風情の淺かるべき、右は又景色ことなれり、早川の谷目も及ばぬ迄深く、底の流磐よりも細く、明星ケ嶽高く雲をかつぐ木賀の邊溪底ふたゝび近づき、水足もとを流れ、立てる、蹲れる、臥せる、仰げる、種々の岩をかしう、石に咽ふ浪は雪にまがひ、藍を湛ふる淵は瑠璃を欺く、黄なる、紅なる、あるは紫なる、岸の木の葉、とりどり錦さそへば松杉の翠さへぞ色改まる

谷ふかみ夕日のかげはさゝねども色よかりけり木々のもみぢば

かく詠めるやがて雲間より細う日影さす、まだ夕にてはなかりけり、と時計を見れば三時なり、來し方見かへれば宮の下の甍手もとゝかむばかりなり、鞳鞳と響き、淙々と落つる、大瀑小瀑は此處の谷あひ彼處の岩間に、おのがじゝ布を晒し糸を繰る、いひも得ず趣深けれど、境やゝ遠ければにや、尋ねとふ都人も無く、あたら里人の眼をのみぞあかしける宮城野にて聞えたる蕎麥のみせも、しかと戸ざゝれぬ、はやく冬枯けらし、此處より

飯らむは興なし神明ケ嶽を越え最乗寺へ詣で道了薩埵拜まばや、とある店前に佇める翁君に道など問へば、内室とおぼしきが今より行き給はむとや、時すでに遲きにと驚く、翁君さる事の侍るべき、道は三里あれど登りは唯一里半よ、彼の峰だに越えば後はたやすかりなむ、道は錯雜にもあらじなど敎へ給ふ、いざさらば越えてん、日暮迄には行き着きなむ、よしや道を失ふとも、よも人里へは出でなむ、と頓に思ひ極め、とく〳〵と膝栗毛に鞭あつ、程なく枝みちあり、右最乘寺と鮮明に書けるいと嬉し、あるは垣を回りあるは畑に沿ひあるは木下陰など行く、苅たる茅山と背おひたる女子、童などにあふ、道は漸々けはし、二十町許ゆきて後は茅原ばかりなり、一里も來つらむと思ふ程より九折の岨路けはしさいはむかたなし、數度憩ひ、はては流るゝ汗を拭ふ、日の傾かむも恐ろしけれど、見返しの神山、駒が嶽の高く雄々しき、そが腰をめぐれる雲のあやの面白き、はた今來つるあたりの明白に指さゝるゝ、ただに過ぎむもさすがに惜くて、帖取りひろげ、鉛筆走らせ、形ばかり寫しとり、かつは足の疲をいやす

山びめの雲の衣の寒げなり冬さりくれば雪にまがひて

かく口吟つゝまた〳〵險しきかけ路攀ぢ登る、霧深く立ち、來しかたはさらなり行くてさへ見えざれば、もはや嶺に來けるかと幾たびも思ひひがめては、七まがり又七曲はてしなきに呆れぬ

けはしさにのぼりなやみてつくいきの青からぬこそくすしかりけれ

とかくして霧はれぬ、否最早さりも立ちかねたる高みなるべし、芙蓉峯はなかば我山に隱れ左の方のみ見ゆるに、それをさへ蔽ひつる雲の怨めしさよ

麓をも峯をも雲の包めどもかくれざりけり富士の大だけ

四時四十分巔に着く、こゝも茫々たる茅原なり、下りはなだらかにて足も運びやすし枝みちあるごとにしるべの柱たてり、あはれこのしるべあらずばあらぬ方へさまよはましと嬉しきにつけても、獨こゝまで來つるがをぞましともをぞまし、十二日の月はや雲間に現れ、入相の鐘かすかに響けば、いとゞ心あわたゞし

目のまへにみてらの森は見えながらまだはるかなる鐘のおとかな

夕榮の雲にもわが目とゝまらず入あひのかねに心せかれて

日はまたく暮れぬ、又追わけあり表面に最乘寺道、右側に右狩野とかけり、さては左かと一足すゝめつつ左側見やれば、左山道とかけり、こはいかにとよく〳〵見れば木立の隙に細き道あり、こゝなりけりと木の葉に袖をすり小枝に帽子かゝれつゝくだる、暗さはくらし足は疲れぬ、洋傘つき立て〳〵行けば木の根に足をとられ幾たびも轉びなむとす、谷水の音俄に聞ゆれはもはや麓なめりと喜ばれつゝも猶きりきしなどに落ちもやせむと危ぶまる、とかくして岸にいで見れば假初ならぬ板橋あり、うまく來にけりと胸おろしつゝわたる右の方に堂一宇たてり、人ありとも見えず、道は又森かげにていよ〳〵暗したどり〳〵水の音に再胸ひやしつゝ置石やうの物ふみ越ゑ〳〵〳〵廣やかなる道に出で、すこし行けば壯嚴なる堂見ゆ、近づけば人の聲音す嬉しくて道ども問ふ、すなはち最乘寺の奥院なり拜み終り、御前の石段下り一町程ゆけば本堂なり、寺務所にて御札うく堂は廣く燈は幽かなり、種々の大きやかなる建物、廣やかなる庭、善つくし、美極めつらむ、と唯おしはかるのみ、大門を出てより石段、阪道などけはしとにはあらねど、燈の光つゆあらねばをり〳〵辷りなむとす、水屋、休所など覺ゆる、いづれも戸ざゝれ火影さらにもらず歩もたゆたはるゝを空や晴れけむ、月木の間より照る、嬉しさいはむかたなし

白雲のよそにのみ見し月影に
導かれてもかへるよはかな

かくて總門のほとりにて夕食したゝめ、松田迄車やとひ、汽車にて夜半すこし前新橋へつき宿へ歸りぬ。

（大正三年稿）

昇仙峡遊記（一）

甲寅五月下浣自得子少閑を得、甲の勝地昇仙峡を探らむとし、二十七日午後新宿停車場に至る、紅塵は例に依つて千丈萬々丈、雲の如く煙の如し

吹きすさぶ風だにうきをいとゞしく塵ひぢけあげ自動車の行く

一二食料品を整へ、刻々雜鬧する待合室の光景を目擊しつゝ、欠伸數回の後、二時三十分發汽車に駕し甲府に向ふ、車軌坦々、輾々轢轆、市坊去り林邑來り桑田迎へ麥圃送り、桂川水力電氣の送電線は或は遠く或は近く余等に追隨し凉風は斷えず衣袂に入る

穗に出でし麥生をわたる山風にみどりの波の立つがすゞしさ

多摩の清流を渡りて

さゞれゆく波はかりだに凉しきをあらしふきたつ多摩の川つら

八王子を過ぎてより展望稍改まる、淺川驛を經て高尾山の森林鬱乎窓頭を蔽ひ、小佛峠の險阪我前路を擁するを見、霎時にして第一洞道に入る、第二第三乃至第七、明又暗、夜又晝、大小長短殆ど應接に暇あらず、其最長きものを第二洞とし迪過の時間實に六分五十秒を費す、與瀨驛を過ぎ再洞道を通過する事七回、始めて左方脚下に桂川の溪水を臨む爾も溪水無情須臾に視線を去り余を失望せしむ、悶々の間復洞道を出入する事三回、甲相二州の境界標を道側に觀、更に過ぐる事一洞、即上野原驛とす、眼界頓に廣濶となる、眸を放ては甲相の連山崢嶸翠を凝し靑を集め、桂川の清波、灣流逶迤として雲樹の間に沒し近く斷崖削るが如き彼岸より伐木を投下する樵夫、汀渚に嬉遊せる村童、何れか詩材ならざらむ

山河の水の心にまかせつゝくだせはやすき筏なるらむ

桂河なみのしら玉かきちらし里のうなゐ子何あさるらむ

無心なる汽車は余が貪賞の慾望、十の一をも滿たさずして轟々馳走第二十洞に入る、洞は桂川第二發電所の直上に在り、洞を出で四方津驛に都留鐵索運輸株式會社の運輸索條を觀、更に洞道を通過する事十又二、幾回か發電用水給水渠に送迎せられ或は奇構と幽邃とを以て著れたる猿橋に一瞥を拂ひ、桂川第一發電所送水管下を過ぐれば、千古汚れざる富士の

靈雪は忽然其清姿を前面丘岳上に呈露して余が車行を勞ふが如く快言ふべからず

繁りたる桑の葉ごしにあらはれぬ
冬ながらなる富士のしら雪

岩殿山の巨岩雲霄を摩し、武田氏滅亡の昔を偲ばしむるを大月驛とす、驛は吉田口よりする富士登山者の門口なるを以て盛夏には乘降の客塲に溢ると雖今は山間の一寒驛たるを免れず、木材の搬出盛なり、薄暮初狩を過ぎて

郭公なくべき頃を夕霞
立ちこそわたれ初かりの里

笹子峠に延長一里有餘の大洞道あるは普く人の知る處なり、同乘某氏試に時間を檢す、八分三十秒を經て始めて洞外に出るを得たり、既にして夜色天地を包み窗外暗澹、爾のみならず過る處の驛郵概ね寒邨僻里何等耳目に入るなし、獨鹽山停車塲の附近燈光の燦然たるを見る、八時十五分甲府に着し旅館古名屋に投す

昇仙峽遊記　（二）

廿八日　快晴午前七時振旅して館を出づ、城濠を廻り鐵路を横ぎり北する事約五町、市街爰に盡き歩兵第四十九聯隊營舍の側を過ぎ、多少の勾配ある坦道を行く事半里許、道漸く險し氣息唵々として九折の阪路を登る、一折を終る毎に路傍の岩石に踞し淋漓たる流汗を拂拭し、嵐氣を吸ひ疲勞を醫して進めば、疎々たる松林に幽禽啼き百丈の崖底に溪水響く首を回らせば芙蓉峯高く中天に懸り來路の山野歴々指點すべく身は既に塵寰の外にあり、只怪む長袖輕羅の美姫等に擁せられ、諧語謔語狂態百出戯蝶遊燕、魑魅を驚かし山靈を怒

らしむる似非風流漢あることを、美姫は蓋若松町の尤物なるべし風流子は若尾邊に勢力ある若殿原か、借問す卿等は何を目的として何處へ行かむとはする、未央宮裏の遊を欲せば酒泉の郷歌舞の區梨園狹斜所在其處に乏しからず、然るを陽に君子を學び、幽溪を探るに托して陰に楊柳を弄び仙境を窮むるを名として專桃李を折り得々山を樂むの仁者を以て居らむとす、以て俗人に誇るを得べし高士の嗤笑を如何

登攀十數町にして一亭を得富士見の茶屋と稱す即和田峠なり後方の眺矚佳麗一段を加ふ

白雲のうへにあふぎし富士のねを松の木の間にひくく見るかな

尙登る事數武、道下降となる岐路あり左白山神社右御嶽新道と標す再秧田麥圃に沿ひ遠く本縣西南の峻嶺を望み近く花崗岩の山丘を隨所に看る、而して花崗岩の山丘は中腹以下必松樹茂生して之が彩を爲し、恰も天女の青衫を纏へるが如く白頭翁の黑衣を著けたるが如く、其面其頭宛乎雪の如くして遂に遠望の高嶺に斑點を印せる眞雪と其光を競ひ難きを唧ち貌なるも奇なり、眺望已に佳行步復曩の如く艱ならず偶ま清冽玉の如き溪水の道を遮るあれば之に架するに危橋を以てす、登上又下降稍疲憊せるとき流鶯は聲を放つて我を慰むに似たり

夏ふかみ木がくれに啼く鶯の聲いまさらに珍らしきかな

夏なれど我にはいまだ初音にて聞きすてがたきうぐひすの聲

九時一茶亭を得就て憩ふ、亭前に天滿宮の小祠あるを以て此處を天神森と呼ぶ、里程甲府より約二里半卽御嶽參詣路の粗中央に位置す、客の來つて疲脚を休むるもの前後相嗣ぐ、同二十分步を起す、未幾何ならずして轄たる水聲耳朶に響き、忽地前面に鷹巢山の峰巒を望み次で荒川の清溪脚下に現じ、造化の神筆に成れる一大山水畫幅は徐々に展開されむとす榜示ありて第一勝長潭なるを敎ふ、

巖頭數歩を下り危石に坐して瞰下す、淵を爲せる水は藍よりも青く岸に峙てる巖は珠よりも清し、貧賞多時前路に復し踴躍して進む、石逕磊落阪路崎嶇、踏む處赭岩に非ざれば白沙、攀づる處奇石に非ざれば怪岩、看る處危嶂に非ざれば嶄巖、布の如き奔流に非ざれば雪の如き激湍、而して或は疎索或は欝密、蒼々、青々、千古變らざる松柏は是等嶂巖溪湍の衣となり裳となり將氈となり、景を添へ趣を加ふ眼に映するもの已に斯の如し耳に響くもの飛瀑の鞳々に非ざれば細流の淙々加ふるに新綠の樹梢より來る清風は絶えず輕袖を吹く斯の如きもの一里有半其尤著名なるものを追次記述せむ

神人の斧を用ゐ千仞の巖嶂を割斷せる如き峭峭を猿岩とす、形象雄偉名未だ實に副はず余を以て見れば衝天岩若くは猛虎岩等稱すべきに似たり、富士岩は溪間の一巨岩其形狀其斑苔宛として富士峯を見るが如しと雖、竟に盆石的たるを免れず、畢竟此溪無數の亂石奇岩一として富士岩ならざるなし、轆轤瀑は急湍の殊に急なるもの、瀑其物は特に言ふに足らず唯四邊の光景幽絶邃絶巖怒り水吼ゆる處に無限の趣味を感得せずむはあらず

突兀雲に聳え蟲々天を摩し鬼斧神鑿怪を競ひ奇を爭へる雙巖を寒山岩拾得岩とし、猿岩の愈奇を弄するものに登龍岩あり、勝景に誘はれつゝ行く事半里程中夏の炎威漸く烈しく流汗滴々玉と爲つて落つる時恰も好し、數丈の翠翼を張り天日を遮つて行客を俟てる孤松あり、稱して傘松と云ふ根に倚つて腰を摩すれば唯に千年の翠の手に滿つるのみならず、紫山碧水悉く眼眸に入る、涼を納るゝこと少時

誰もみな此松陰にきよるらむ瀧のひびきを雨とまがへて

しばしとて暑さのがるゝ笠松のかげすずしさに立ちうかりけり

此處より數百歩にして稍廣濶坦夷なる松林に入る、歩を運ぶ毎に鬱々音あり呼むで天鼓林と云ふ、蓋地下若干にして空虛あるが爲然るなるべし

久方のそらまでおとの聞ゆるは誰がうちならす鼓なるらむ

松原に風のしらべぞきこゆなるいはほの鼓うちや鳴らさむ

是より少しく溪に遠ざかり壠畝を看る、蟾石は即田圃中に蹲踞せる一巨石名稱能く實に合せり、憾らくは渠と呼應して前後左右に佇立若くは偃臥せる幾多好石の未其稱呼を詳にせざる事を、行く事數町例に依て奇峯を對岸に看る、之を羅漢山とす絶頂に羅漢寺の古跡あ

りといふ

能泉村役場を過り行く事數百歩道再溪に沿ふ、對岸に一怪巖の兀立するあり絶壁千仞離披層裂松を髮とし雲を衣とし恰も頭顱を露はして巨人の蒼穹に立てるが如き之を覺圓峯と云ひ、前方咫尺より之を睥睨せる靈障を天狗岩とし、是等怪物の腰邊を纏ひ疎密茂生せる山麓の松林を夢の松島と云ふ、萬古以來斧鉞の之に入りし事なく千秋を經て樵人の之を伐る事なき神仙の境とは是等松林に稱すべし、然のみならず荒川の清流は絶えず松樹の翠を洗ひ溪畔の亂石は純白乳の如く清觀亦一層を加ふ

歸りこぬ水の流を夢と見て老いやしぬらむ岸かげの松

世の中の色にはつゆも染まじとや水はしら浪岩はしら岩

勝景に憧れたる眼を一轉すれば道傍に一古碑あり、是現に踏破しつゝある新道の開鑿者圓左衛　翁の像を刻し其功を頌せるなり、翁は猪狩の人拮据經營開鑿の事に從ひ爲に家産を蕩盡せしといふ、文に曰

手足胼胝山斫谷割剏闢便道廿稔志達馬走輿丁歌頌

嚚瀆今諦斯像醜面若魃魃也普濟心肖菩薩

嘉永年辛亥六月　　鶴梁學人贊

覺圓峯と天狗岩とを控し崖に倚り舍を造り客を迎ふるものを金溪ホテルとす、飛雲橋は其主人の特に雅客の爲架設せる處是を渡て覺圓峯に達するを得べし

昇仙峽遊記　（三）

飛雲橋畔より進む事數武、道右嶂巖の餘脈走つて溪に出で踞然道を扼し、中間纔に通路を開ける處、之を釣岩とす、而して崆峒外壁の大半を形成せる巨巖は一見左側なる岩塊の支持を受くるが如くにして其實兩岩の間隔四半尺を餘す、是れ其釣岩の稱ある所以なり、此處を過ぎ行く事數十歩浮石及雪虹瀑の勝あり、浮石は溪間に羅列起伏せる岩石中獨雄大を誇れる上部扁平形狀長方角に近き巨岩にして、雪虹瀑は例の奇岩に激したる急湍に過ぎずと雖、飛沫の紛亂するもの清絶麗絶霧の如く雪の如く寔に一異觀なりとす

既に浮石の上を極め雪虹の觀に飽きたる余は、今や本溪流絶勝中の絶勝たる昇仙橋上に來

れり、左視右望猛虎の如き巨岩の傍には汕の如き碧潭あり鷙鳥の如き危石の下には布の如き奔流あり、青龍に髣髴たる疊岩は白雲を吐き鼈龜に類する玄石は綠波に浮ぶ銀光燦たる屏岩の峙てるあれば翠色滴るが如き新樹必之を蔽ふ、仰げば幾丈の嶄巖我を壓して立ち足下は則巉巖起伏石逕磊珂たり、岩己に奇水己に奇懸崖絕壁綠樹青苔亦皆奇、然も此奇岸を縫ひ條竿を揮つて悠々小禽を捕獲し以て生計と爲す老翁あり、奇更に趣を加ふ、首を回らして後方を看れば兩岸の峰嶺依々として我を送る、恍惚醉へるが如く前行回歸等く忘れたる時、忽然中天より落つる銀河を前方數武に認め一氣嶙峋を踏破し了れば、轟々鞳々十有餘丈の懸崖より

三層となりて奔下する飛瀑あり、瑤々として珠簾の搖くが如く皎々として素練を曳くが如く、其下窪むで淵と爲り藍を藏し雪を散す、深きこと蛟を棲ましむべく濶きこと龍を遊ばしむべし、岸頭の綠樹は例に依て鮮麗、問はずして知る其仙娥の瀑なる事を、若夫れ四邊の狀景を詳細絮說せむ歟恐らくは禿筆却て眞趣を損はむ、昇仙峽の奇觀是に至て窮る

そゝり立つ谷の巖にふれて落つる瀧のしら浪さよくもあるかな

おのづからゆふかけたりと見ゆるかなみたらし河の末の神瀧

かへるての若葉さしたる枝ごしに見ゆるもすゞし瀧のしら浪

たぐひなき此山水を告げよ世にたへなる瀧のつゞみならして

危石を踏むで登る事數十百步兩側の巖壁相逼る處、所謂第二石門別稱通天門を過ぐれば直に瀑上の溪畔に出で點々の人家を隴畝の間に看る、之を猪狩邑とす、光景頓に變じ山勢平夷水流緩徐、復奇岩奔湍の妙なく道も亦崎嶇峻險の艱なし

時に日正に亭午、蒸々たる暑熱と急迫なる飢渴とを忍ひ行く事數十町漸く宮本村に達す、村は即金櫻神社の祠畔に在り我貴山白山等の勝地を有す

餐を松田亭に取り且憩ふ、飢渇余に等しき紳士學生等陸續來り投ず、中に夫妻の洋客あり亭前に麕集せる兒童等を顧盼しつゝ、妻君は箸を取り此地名物の蕎麥を味ひ夫君は自家携帶の麵麭を嚙み、喋々歡語間々指導者と幼稚なる邦語を話し得意の情眉宇に溢る

山のかひはる〳〵來つるかひありとるみほこるらむよそのみやびを

仙昇峽遊記

（四）

午後一時半亭を出づ、笠木八間餘と稱する大華表を潛り疊々數百級の石階を登り第二華表を過ぎ神橋を渡り復磴道を登れば巍然たる樓門の樹間に隆起するを看る、『金櫻神社安政四年六月齊昭謹書』と題せる金字の扁額は莊重にして古色あり、木刻の隨身之を守る、更に磴道を登る事十數步、拜殿本社中之宮社務所鼓樓神輿庫竝に現下修理中なる神樂殿等棟を列ね甍を並ぶ、建築宏壯雕鏤精緻神威炳焉たり、攝社若干及休所等散在し四圍五圍の巨檜は亭々天を衝き午下尙日光を見ず境内陰森たり、社前數步に玉垣を廻らせる一株の櫻樹あり所謂神木金櫻是なり、但古樹は數年前枯死して朽幹の纔に存せる傍に新樹を植栽したるもの威靈未備はらるざは是非もなし、社記に依れば本社を里宮と稱し大己貴命外三柱を祭る本宮金峯山へは程更に七里道最嶮なりといふ、社に賽し步を旋し黑門を出で歸路を舊下道に取る阪路緩漫登行甚易し、往時は巨櫻老杉到所道を蔽ひ依て櫻大門杉大門等の稱ありしと聞けど、今は唯雜樹の茂生せるを看る、十餘町にして平坦の地を得、嶺頭猶雪を殘せる白根山一帶の高峰を坤位に望む是より徐々下降となる、行く事數十町左傍に一宇の廢祠あり八王子祠とす、羅漢山咫尺に峙ち眺望佳なり、此處より覺圓峯の頂點に達する路あり といふ、下る事數十步道稍險、皚白雪の如き花崗岩上を過ぎ雄大なる奇岩を左方に看る、形狀に依て名けたるものに鮟掛岩兜岩あり、一嘯響應して三吼する三聲岩あり。

寂々無人の逕を下降する事約二里、榜示に依て左折し行く事數町吉澤村に達し甲府市水道引入口を見る水道は去々歲新に成る處引入口は余が朝來探勝せる荒河の下流にして、石壁峭立兩岸相逼り潭を爲せる彼岸卽市に接せる岸脚に閘門を設け淸流を吸引す、閘の上邊に

『萬年甘露』の四字を刻す、河水流入の狀一見何等堰堤等の河流を阻止するなく全く自然の勢を利用したるものゝ如く、水量も亦總河水の四乂は五の一にも達せさるが如し、嗚呼荒河汝は啻に雅人騷客を欣ばしむるのみならず甲府幾萬の民は汝が不斷の甘露を渴仰讃嘆せりと知れ。

石材は村の特産なるべし、挽臼を造る家數戸を看る、此處より南する事三町許、櫻橋を渡り袂を荒河と別ち淨水池に沿ひ水道鐵管埋設の爲め開通せりと聞く田間の坦路を行く事半里餘、偶驟雨の沛然として至るに逢ひ之を路傍の亭に避く、亭主附近の勝地及其由來變遷等を語る事詳なり、既にして雨歇む、五時行を起し大宮村湯村に達したる時再雨師の脅す處となり走つて旅舍富士の屋に投ず、樓前田圃潤け富嶽の淸姿を賞するに佳し富士の屋の號空しからず、舍に溫泉あり柳の湯と稱し旅亭の傍錢湯を營む、設備の整否は言はずもあれ、されど微溫水の如く槽中に在るに堪へず火力を用ゐ沸熱せしめたる別槽に入り纔に浴を了るを得たるには尠からず失望せり、此地他に鷹の湯あり共に皮膚病創傷等に効驗ありと聞けど如何にや、此處より昇仙峽の初頭天神森迄新道を開設し車馬を通じ探勝に便せしめむとするの議有志者間に盛なりといふ。

午後八時疲憊せる雙脚を褥上に横へ次で夢寐に入る

昇仙峽遊記

（五）

二十九日快晴　早起帖を披きて富峯を圖し、午前七時舍を出で南する事數町、練兵場を左側に見、厄除地藏尊を過ぎ相川橋を渡り甲府市に入り昨來りし處を逆行し、甲府城天主臺趾なる舞鶴公園に上る、榻に倚て望めば全市街歷々指點すべく遠近四方の峯巒悉く雙眸に入る八が嶽仙丈嶽等例に依て嶺頭雪を看る

妹がかふかひ子のまゆをいづる日も雪いただけり甲斐のむら山

熏赫たる暑熱は切に旅亭の休を思はしむ、卽園を下り錦町に出で再昨宿したる旅館古名屋に入る、婢等茫然余を迎ふ蓋午前八九時の交に投宿するが如き好事者は甚珍なるべければ

なり斯くて一碗の珈琲に昨來の勞を醫し、日記の債を償ひ、寫生帖の揮筆設色に將新紙の警見等に午前を鎖す、每室空寂無人、唯厨房に器皿を整頓し衣服を洗濯する僕婢の唄ひ且話する聲喧々噪々『まだ十時だよお』『日が永いねえ』『食べて見やんしやう』等、餘蘊なき訛音の發揮は尠からず孤客の感興を惹さぬ、要するに旅館の午前は僕婢等の氣散じ的活動時たり

晝餐後無聊壁に懸れる紫野寧馨氏の偶成『半生萍跡幾波瀾、笑付黃粱一夢安、途雨忽愁晴忽喜人情無不是非觀』の飜案を試む

よるべなき身をもなげかじ萍のうきをつねなる此世と思へば

晴るゝかと見るまにそゝぐ村雨の空さだめなき人のこゝろか

午後三時車を驅て附近を一巡す、機山信玄の城趾は北の方三十町相川村に在り、要害山の南西麓に位し南に甲府市を瞰下し得る形勝の地なり、三面空壕を圍らし其內側欝乎たる列樹は自然の屏障を爲す、但廣袤は纔に町餘に過ぎず日淸及日露戰役記念碑は共に好位置に在り『武田法性宮天明某年古府中日影村中』と背面に刻せる一小石祠は草深き丘上にあり、古を弔ふ鷓鴣は無く唯幼童の遊戲に耽るを見る

いにしへを知らぬうなゐの嬉しげに遊ぶ日影のもりのすゞしさ

機山永眠の地は茲より數町を隔てたる圃間にあり、域內淸洒石柵繞らす事二重、巨石の表面に『法性寺大僧正機山信玄之墓』裏面に『享保四年松平氏源忠位』と鐫す、風伯を憑て懷古の賦を誦する幾株の老松其傍にあり

いにしへの風こそわたれおくつぎをおほへる松の梢ならして

古の事かたらむとほと出でゝ人まねくらむ畑の大麥

禪刹萬年山大泉寺は茲より南數町にあり信玄手栽の白狐梅及慧林寺禊八枚の內と銘打てる同人筆秋野鹿の圖並に筆者不詳國寶信虎肖像外數點の珍什を藏す市の中心を柳町通とす、大廈巨屋軒を列ぬ、佳麗漆の如き黑壁は峽中の商民が如何に富裕なるかを語れり、縣內隨一の豪家若尾氏及之に亞ぐ巨頭矢島氏の店頭を過ぐる時、車夫は轅を控へ吾物顏に彼等の資產を擧示誇說するも可笑し

太田町公園は市の南端に在り、時宗一蓮寺に隣し境內廣く心字形を爲せる池邊には風流な

る亭榭の設あり、池中河骨の花今し黄金の光を放つ、稲積神社招魂社及割烹望仙閣等好位置を占む

其他市の東方十數町に有名なる酒折宮及古刹善光寺等あるも晩暉赫々依然たる暑熱に探尋の勇氣も失せ、午後六時三十分旅舍に歸る

三十日快晴　午前六時五分發汽車に乗じ歸路に就く途に猿橋に下車し東する事七町町の盡頭に著名の猿橋を觀、餐を驛前の桂川館に取り再汽車に投じ午後六時四十六分新宿に著し家に歸る

（終）

香山紀行（一）

同じ廳に事とり一つ釜の湯味はへるどち、八人一宿の旅思ひ立ち、月々其財用つみそめしより、はや九個月を經にけり、其間にゆくりなく廳の主改まりつれど、去りしぬし猶此企を棄てず、來れる主はた之れを贊け給ひ、いよゝ氣色添はりけるが、浪華の事絶えず吳竹のふし繁く、今年公暇賜び得ざりしも多かりしものから、大方人の海に山に遁るゝ暑中をさへあたら過しつ、あはれ袂吹く風爽けく道芝の露ふみこゝちよき此頃こそは、とあながちに語らひ彼是思ひはかり取定めつる、日は十月十七日打向ふ地は上毛伊香保なりけり此日I氏を先頭としY君を最終に閑人第三著をしめ、午前七時上野停車場に集る、昨日なからの好晴はいかに遊士の魂を動かしけむ、あるは日光あるは鹽原あるはそこ、と一團を爲せる一隊となれる、あるは三人五人、はた一人々々、入り來る客引きもきらず、雜閙日頃に十倍せるうちに、九人からく一車に乗り得たるは嬉しき極みなりき、同二十分車は靜にめぐり初めぬ、窓外の光景は例の如く車内の混雜は想像も及ばず、M氏とF氏とは遂に

赤羽まで佇みゐつる、わびしともわびし。

ゆたかにもみのれる小田のはてに見ゆきりをかつげる富士のしば山

朝霧のおほふとすれどふじの峯はそれと姿のあらはれにけり

打見たる心ばかりなり、大宮驛にては會計M君茶菓と辨當の買入にいそしまる、大方は新紙に目を曝し會話に耽るめり、車は刻々に進み、稻穗の黄やうやう失せて綠色褪せたる桑園之に代る、まゝ金鈴の枝につらなれるは熟柿なりけらし。

生垣のまゆみはいまだ染めなくに色にいでゝも柿のみのれる

熊谷驛よと云ふ聲に、誰も彼も爭ひて去りぬれば車室には唯吾徒のみぞ殘りける、秩父探勝者の夥しからむもしるく、はた同じ心の士も多かめりとうなづかる、身を寛げ物食ひ茶啜りつゝ、外面を見やれば秩父の連山近く左に從ひ毛の諸峯はや右に待てり。

さして行く榛名やいづら秋ぎりのかゝれるをちに山こゝら見ゆ

朝霧の晴れゆくまゝに一つ見え二つそはりぬ毛野のむら山

埼玉のE氏詳に此あたりの地理風俗を語れば信陽のN氏精く桑葉の良否を說く、とばかりありて赤城山さだかに見え神流川脚下を流る。

行く方にあらぬ赤城の山をまづ見てたのしみぬ霧のあなたに

目に觸るゝものみなをかし上つ毛は山くしき國河きよき國

十一時高崎に著き電車に移る、混雜は汽車のそれにも增し速力は纔に人車を凌ぐ、市街を走る事半里ばかり、田畝を過ぎ桑圃を行く、道は些少づゝ上りなり、いくばくの村邑にか送り迎へられけむ覺えをらず、右を見れば赤城山咫尺に峙ち左を顧れば榛名山窓に逼る行くてに重疊せる群嶽を拔く事百歩なる峻嶺あり、其が絶頂のやゝ右の方より濛々たる白氣を噴き出すを見ては、初遊の客も何といふ山かとは問はざらむかし。

峯高み人こそあふけ淺間山煙は空に立ちもたゝずも

香山紀行（二）

電車は間なく進み二つ嶽相馬山はた榛名富士の嶺などあり〳〵指ざゝる、正午少しすぎ澁川に著き、町の中程より左へ曲る、此處は越後への要路とかや町なみよし、今日しも市

日と覺しく露店道に列なれり知らず一日の利潤そもいくそばくぞ、町をはづれてより勾配頓に加はり車の進む事おそし、松原杉林あるは切通したるかたそば、など右に折れ左に廻り登り行けどはや山腹なればにや眼路狹くさしたる眺望もなし、二時過伊香保へ著き、車を下りて去る旅館のこものと語りつゝ行く、彼曰ふ今頃は閑散季なれど今日はからず何がし銀行員大學生など旅舍を占めけり、と一同顏見合せつゝ某館をとふに果して滿員なり、室は侍れど浴衣の用意を缺けりと洵に術なげなり、和服著たるはともあれ洋裝なるもあればと他をあさる、千登世館とかやいへるも亦浴客充ち溢れたり、やう〳〵福田樓といふに投じぬ、さながら飢ゑたる者の王膳に逢ひつらむが如し、裝を解き吾も〳〵と湯ぶねにひたる、余は獨帖を提げ館を出でぬ遊客の往來織るが如し、歩を南に移し數十級の石階を登り縣社伊香保神社を拜む、こゝは町の南の端にて地最高く家々の瓦甍あしもとに瞰下さるなべて此町の有樣北より南へ一戸は一戸より高く甲の軒は乙の礎と竝び丙の棟は丁の庇を仰げり、急阪をなせる四五町許の道路に隙間なく築きなしたる石段はいたく吾等を驚かしぬ、社殿に沿ひすこし行き榛名道へ出で猿澤橋湯川橋など渡る、山のたゝずまひ谷の風情よのつねならずところ〳〵紅葉せる樹梢も見ゆ。

いで湯わく伊香保の山の山深くきつるかひある初紅葉かな

挽物細工など響ぐ店そこゝにあり、家は嶮崖に建てたり床下の室を工場に充てたりと覺しく轆轤の音漏れ聞ゆ、黄金の瀧屏風岩など記したる札も見えたり、湯元は本道を左へ二町ばかり谷せまり幽邃の境なり、石を疊み造りなしたる目標ばかりの湯槽に杓を備へあるは誰も飲み試みよとなるべし、但しこは纔少分を漏出せしめたるものにして湧泉のすべては伏管もて湯戸へ導かるべければ噴出の狀など見うべくもなし、歸るさ後れて來りたるO氏等五人と谷に下りかの黄金の瀧と屏風岩とを見る、地は雅なれど瀧はわざと造れるにて趣なし河鹿に聞えたる處なりといふ、家づとにとて繪葉書玩具など購ふものとり〴〵なり。

腹すかしての晩餐はうまかりき、上戸は又舌皷打ちつゝ盃とる斗酒たやすく傾けゝむ、食後はのどやかに語らひ果ては遊戯に暇なかりき、圍碁に耽るもの將棋を戰はすもの智慧の板の思案に苦心するもの曲獨樂を廻すもの達摩の臺拔きを試むるもの、あるは知友へ出

さむとて端書認むるもの孰れか塵事を忘れざらむ、中にも唯一人の酒豪M氏酡顔最得意なりき、N氏は俳士を以て許され素秋と號す余が書帖の揮筆ほゞ了れるを見、二句を示す。

湯の池に魚飼ふ宿のうそ寒し

何の岩何の瀧それに紅葉かな

此地の風景眼前に浮べり、余も口ずさむ。

湯の元を訪ひぬ露踏み巖ふみ

谷に響き山をどよもす絃歌はそもいづこの高樓ならむ、綺筵遽に開かれて律呂宮商の需急はしく、紅燈忽に挑げられて螓首蛾眉の召頻りなりければ、素より多からぬ此地の妓を驅り盡くして遠く前橋よりも聘せりといふ、美酒千斛を置き佳人座に滿つらむさま想ひやらる、Y氏が傭へる二十歳ばかりの女按摩は何くれと口輕に語る、曰く內湯あるは右側にて當樓と岸塚越千明等五戸左側また千登世木暮等五戸に限り其他は共同槽なり、曰く一流旅舍にて都人士などの團體客を專占すとて二流以下のそれに不平あり、曰く按摩の始めて他より來るもの道路の石段に躓き傷を負ひ恐れて歸るもの多ければ加入金とり置き足どめとなせどそれすら捨てゝ去るものあり、と余等はふたゝび出でゝ散步しぬ、戰捷祈念祭行ふとて所々に燎たけり、螺螺の壺燒賣りゐたるをかしと見ぬ、歸りて又I氏と烏鷺を戰はし夜もいたく更けて枕定めつれど頓には夢路に入りがたくて。

高どのゝ琴のねやみて谷水の秋ふけゝりと語る夜半かな

十八日　誰も彼も未明に起き出で榛名山見に打立たむと勇む、折しも雨はら〳〵と降り程なく歇む、洗漱そこ〳〵にすまし例の神社に詣てぬ、旅店のいらかに續きて近きあたりの山ほの見えそむれば、祠官が擊つ鼓の聲蹇々耳もとに響き下司いでゝ廣前を帚き淸む、境內見ありくに

皇女のけふ御手植の若松に千代さかえます色そ見えける　基祥

と刻みたる碑あり、たふとき由來もあるべし聞きもらしつ、他に芭蕉翁の猿蓑の句彫りたるもありき、左の山の方半町ばかり行きてかへる、空に虹の見えたるいさゝか氣遣はるゝを

空にまでのぼれとならしあけがたの雲まにかゝる虹のかけはし

など口號みて慰めぬ、朝餉終りかはる〳〵空のけしき窺へど晴れなむとして晴れず、山登らんはいかゞとたゆたふもあり、いざとくとくと裝整ふるもあり、案じ煩ひ宿の男して天氣占はするにさしたる事侍らじと云ふ、乃男一人傭ひ雨傘ども負はせ七時十五分といふに出で立つ、但しY氏とE氏とは澡泉好ましとて殘りとゞまる、一つには己に見知れゝばなるべし昨探りし湯元道左に見つゝ何とかやいふ橋打渡り、つゞら折の岨を登る、一曲ごとに道はけはしさを增せど谷の紅葉又うるはしさを加ふるに、歩みの艱ましさを忘れて佳景たゞへぬもなし、帽のひさしの上に高き山の見えけるを二嶽よと敎へられて。

ひとつのみ見ゆるはあやな二嶽ならびはなれぬ山ときけるに

半里あまりや來りけむ、左右松林にて道やゝなだらかなり、柿の實賣りゐつる少年見つけ一個を購ひ價の不廉なるを詰れば山すでに高し價も高からざらめやはと空嘯く、素秋君吟あり。

湖へまだ一里の茶屋の木の實かな

閑人も

木ざはしの吸ひ付く咽喉の渴きかな

程なく峠にかゝる二嶽は左まぢかに峙てり、道たひらかに爪先下りになる、伊香保町と室田村との境標見ゆ、御花畑ときける此あたりなるべし四方里餘と覺しき廣野に隙なき茅生の紅葉うるはしくも珍らかなり。

色に出でゝ其葉も人を招くなり秋たけにける野べのをすゝき

香山紀行（三）

一たび日光を仰ぎつるかひもなく小雨しとゝ降りきぬ、後にさきに續ける探勝者の手拭風呂敷などかぶり、一つ傘さしあひ、あるはひた濡れにぬれ行く樣をかしくも又いさましし。

村時雨木々のもみぢをよきて降れ我衣にはよしかゝるとも

又

茅すゝき野菊も雨に泣かむとす

と素秋氏に言ひかくれば。

雨に痛むなよ〳〵薄あはれなり

とあはせぬ、さまでならぬ雨にも道のいそがれて、いつともなく七人離れ〳〵になり素秋君先を驅くれば余も續きて行く、するす岩といふ奇巖左七八町ばかりに聳ゆ、山を相馬山といひ彼の山を越ゆれば高崎へ僅二里餘なれど道いと險しく鐵鎖に縋る處さへありとぞ直き事髪の如しなどいふべき一筋道一里許きにけむ、湖前に見え山左に迫る、秋君しきりに吟あり。

桐油着て行くや湖見に紅葉見に

あるは常磐木あるは紅葉木の陰半里ばかりゆき湖の岸近くいで、聞きおきし湖畔亭に入りつるは九時十分過なりき、折から室も緣も人もて埋もれ足踏みいれむ方だになし、とまれ此處へと婢のすゝむるまゝに會釋して背面の緣に割りいる、湖面はさらなり對岸の山々眺望えも言はれず。余が壽帖はたちまち一ひらを汚されぬ、先其あらましをいはゞ、周り一里ときく湖は圓かなる鏡をひらに置きたらむが如く名高き伊香保富士は眞の富士に露違はず、其むかし鬼神の憾を遺せりといひ傳ふる一畚山は彼の寶永山にも譬へつべく形の端正莊嚴今更くだ〳〵しく說かむもをこならむかし。

雪は無くて秋のさまなり伊香保富士

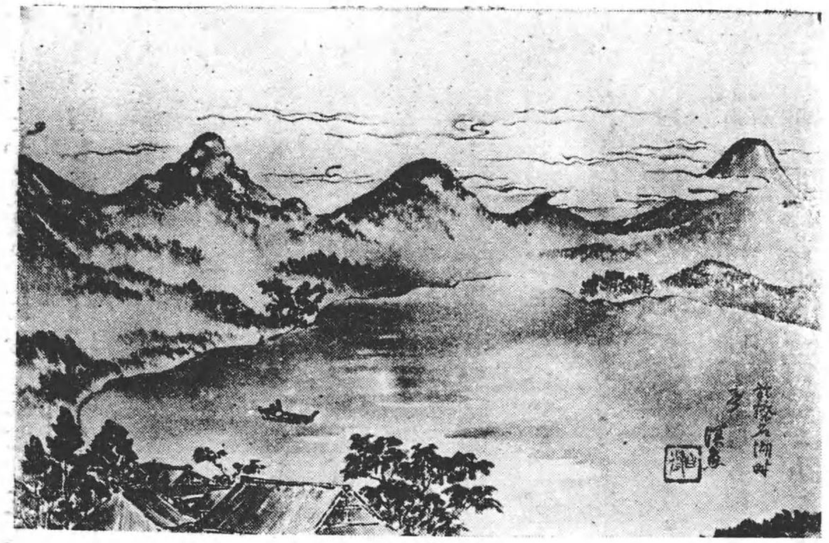
烏帽子嶽鬢櫛嶽其左に連なる、共に形にちなみ、ことにつぎ〳〵しき名なれど、實には鬢櫛嶽大に過ぎ少しなづかしげ乏しきにや。

もみぢ葉の赤地に塗れる鬢櫛の山のいはほや蒔繪なるらむ

硯嶽又其左に峙てり硯岩ともいふ、さる形の巖頂に立てり峻峭頗奇なり。

筆を投じたゞ嘆賞す硯岩

掃部嶽又其左に聳え其麓ひらけて亭の庭につ



づけり、とかくする程におくれたる五人も入り來つるを、庭にまもり居し素秋氏早くも見つけぬ、室も定まりぬればおのも〳〵座を占め茶など啜りつゝ、半時あまり佳景いひはやし、さて榛名神社へと向ふ、外套脱ぎ草鞋穿つなどさわげるもあるを、すかさず畫餐あつらへおくは例のM君なり、登り二町ばかりにて鳥居あり、大きやかなる石燈籠一基立ち兩側に茶亭あり、はや天神峠に來つるなり、山々谷々の紅葉いよ〳〵麗し、顧れば湖眼の下に見え景又一しほ加はる、左の方百歩ばかりの高みに見はらしの設あり眺望いかばかりならむ、行きても見まほしけれど小雨またくやまねば。

山上の冷氣身にしむ秋の雨

と秋氏が吟を殘して彼方へいそぐ、下り阪けはしけれどなか〳〵に身もかろく足の進みとし、されど歸りの思ひやらるゝよなど呟かる、同じやうなる九折の阪道馳せくだれば、いつともなく聞えそめたる谷の流やう〳〵近づき、はては岸に出でぬ、磊砢たる石どもふみ越え繁りあへる喬木の陰行きすぐればやがて神境なり、堅くさしたる裏門右に見柵にそひ溪水の波左に踏みつゝ一町ばかり行き、右に段を登れば崖に構へ建てたる廣やかなる茶屋あり、なほ右へ歩み數十級の磴道登りつくせば又第二第三と同じやうにあり、神門三つ社務所神樂殿などそこ此處にあり、彫鏤の巧丹青の妙目もあやなるを雙龍門とし、そが傍に天を衝いて立てる巨巖を瓊矛岩といふ。

霧の雨の滴うけむぬほこ岩

いさゝか雨を佗びつる心なり、拜殿國祖殿などまぢかにあり、本社祭神少彦名神にています、輪奐の美はさることながら岩を切り谷を開き纔に地を占めけむもしるく宮居處せく苦しげなるがくやし、聞きわたりつる御姿岩は本社を抱きつらむがごと後に聳え形の奇しく嚴かなるさへあるに老木の杉枝さしかはし眼を遮り、いとゞ幽けく神々し、拜を了り踵をかへし彼の茶屋の前よぎり石の玉垣づたひ行く、右は削れるが如き巖立ち列び喬杉空を蔽へり、神橋三重塔後鳥羽天皇御宣廳碑などつぎ〳〵に見もて行く、なべて此かたり岩の形をかしく珍らかなれど一々に名など擧げむはこちたく煩はしければ漏しぬ、なほ行かば御禊橋隨神門鞍掛岩など看るべきもの少からずと聞けど、雨やゝ降りそはりかつは人々とかけ離れむが憂きものから、歩をかへし茶亭にY氏見つけ入りて憩ふ、人々もつぎ〳〵に來

る、O氏とS氏はものゝ山來など細やかに尋ねけりとて最おそくきぬ、名物の力餅くひしばしやすむ、すけるどち口吟示しあふ。

　　生園

舉めながら紅葉の道を神詣り

　　素秋

霧深き杉の谷間の旅路かな

谷に添ふ一路滿山の紅葉かな

　　閑人

御宣碑に苔青き宮の紅葉かな

　　生園

紅葉白水眼も草臥るゝ山路かな

天神嶺

峰崖小逕曲幾回　嶺上展望雲際開　秋色滿山眼外美　冷風清爽弄衣來

榛名神社

谷深山靜島聲微　古木蒼然蔽境園　伏拜祠前仰後背　靈岩萬代護神威

生園詩客はS氏なり、みち〳〵作れりとて多くしめす、歌俳句も一二にはあらざりしが記し漏しつ。

をりふしの暦もちゐぬ山人はもみぢの色に秋やしるらむ　　閑人

こは暦楓とかいふ楓のことに色こきをめづらしく思ひてなり、空の氣色みて出てたつ、險しき登りなればあまたゝび佇み憩ふ、さきに見ざりつるつゞら岩は谷の向ひ木むらの上に推さば倒れむと思はるゝまで危げに立てり、峠の茶屋に例の女ども休めとすゝむる聲かまびすし、正午少しまへ湖畔亭に歸りぬ。

峠より望む湖畔の紅葉かな　　素秋

山駕籠に屈まる人や谷紅葉　　閑人

途にての吟なり又ひるげの箸とりつゝ。

山雨霽れぬ鯉の羹すする間に

一時頃亭を辭しぬ、相馬山程なくみえけるを

するす岩見るもなづかしする〳〵と山めぐりしてかへるひるすぎ

おなし廣野にて秋氏

雲すべる萱原あたり馬と人

伊香保へ著きしは二時を半すぎてなり、雨に逢ひいかに惱み給ひけむ、と殘りゐつる二人まづ問ふさまでにもあらざりしと答へかたみに打笑み湯槽にと急ぐ、湯瀧に打たれて疲勞頓にいえぬ、四時電車に乘る、途に物聞山物聞橋など心とまる方多かりし、前橋へ歸るうたひめと覺しき三人おくれて我車にのり、苦しげに立ちゐつゝなほ、さがなく物言ひ打ゑらげる、痛ましきよりもつらにくゝ興さめぬ。

いづこをも遊び處と思ふらむさへづりなれし小がら山雀

十時に上野へつく、みち〳〵の事くだ〳〵しければ省く（終）（大正三年稿）

孤笻漫吟

若干冊の簿書を生命とし、一本の鐵筆を武器とし、星を戴き月を踏み、一脚の破椅子に五尺の瘦軀をまかする境涯にしあれど、昭代の餘澤博く遍くて、一週の公暇は優に塵外の勝地を探るに足り、十金の餘財は略百里の行糧を支ふるに苦しまず、今年も大方の銷暑に傚ひ、七月中旬上野の森頭猶陰闇なる頃、雲間の殘月と車窓の曉風とに送られ鐵路北越へと向ひぬ、そは下越三條町にいさゝか緣故あればなり。

長野迄は曾て一たび過ぎりしものからさしたる刺戟もなし、但妙義の山容はいつもながら奇しく碓氷の洞道に煤煙の苦なきは嬉し、柏原を過ぎて先大規模なる雪覆に冬季積雪の如何に深き歟を思ひ、赤倉の浴舍に妙高の山氣に觸れ、高田の市街を散歩して雪地建築の特質たる所謂「ガンギ」なる庇を睹、春日山に不識庵の盛時を偲び、鉢崎柿崎の邊恰も吾人の觀勝を惜むが如き障屏を目擊して、海風の吹送する沙塵のいかに夥しきかに驚き、新潟にては長虹に等しき萬代橋と天を摩せる井樓式電柱と、はた其地勢一帶の砂丘に遮斷せられて市街と日本海と殆と關せざるが如きに呆れぬ、さて三條に滯留の間、五十嵐川を遡りて八木の奇景を賞で、五十嵐神社に千年の古杉を尋ねなどす、かくて瑞雲橋を後に三條を辭し、彌彦神社に詣し、當年祝融の跡尙荒凉たるを見、一里の嶮路を登攀して山頂の雲霧に數日の疲勞を癒しぬ、憾むらくは海氣濛々遂に佐渡の翠螺を認めざりしことを、更に羊腸たる樵路を下り西性寺を過ぎり野積の沙濱に汐なれ遊ぶ海士が子と語り、寺泊を右に見つゝ渡部、地藏堂などすぎぬ、大川津の分水工事壯大愕くの外なし。

若それ沿道いたる處石油坑の目標たる樓井の林立せると、油槽車の間斷なき運轉と、沼澤田に排水器を備へたると、市邑を行商する婦女の風俗の異樣なるなど、今更いはずもがな其他一々禿筆に盡すべくもあらず、所々にての漫吟後日の追懷にもと爰に記しおくことしかり。

上野にて汽車に乘りて

夜をのこすもりの下風かよひきて袂すゞしき汽車の窓なか

碓氷嶺近づける頃

山のかひ風をおこしてゆく汽車は照る日ざかりも凉しかりけり

谷河のきりきしづたひ走りゆく汽車の窓こそすゞしかりけれ

長野あたりにて

里人の早苗植ゑむとあせる見ゆかわける小田に水をそゝぎて

水ひきにをたのますらをつとむなりつづく日でりに稻やかれむと

赤倉の旅舍にて

老をかこつ鶯のねにまぎれけり山ほとゝぎす雲になけども

郭公ひと聲だにも嬉しきを惜みげもなくあまたゝび鳴く

春日山林泉寺にて

古寺の人なき庭にたゝずめば語りがほにも松風のふく

おなじ所に面影の池、その傍に霜臺謙信の禪室不識庵の跡、少しく登りて謙信の墳墓、ほかに堀氏榊原氏等の墳墓あり。

影うつすますらをもなし面影の池に蛙のなく音のみして

古塚の塵うち拂ひいにしへをとぶらひをれば松かぜぞ吹く

夏草のしげりかくせる古づかを敎へがほにもうぐひすのなく

山の頂矢倉の跡に老松立てり直江津の海近く見ゆ

ますらをの跡なづかしみ松陰を立ちよりとへば風ぞこたふる

鉾とりて君がうたひし山はいづら浪おだやかに海はれわたる

春日山神社に詣でゝ

音なへど神の宮もり聲もなし木をきる斧の響のみして

排水器を

水をほすうつはのありて川つらの浮田のなへもおひしげりつゝ

ある夕

小田になく蛙の聲を聞きながら涼しき月を窓にこそ見れ

三條にてある日市立ちけるが、畫すぎの暑さにや堪へかねけむ、さながら

假睡せる商人おほく見えければ。

あきものはうらむけしきにつらねおきて心よげにも主のねぶれる

賣つかれ市にねぶれるあき人はいくらのくぼさ夢に見るらむ

すてたるも拾はぬみよとあき人の心ゆるして市にいぬらむ

宿舍より見わたしの田に人のはたらくを

おりたちて田草とる子やいかならむ水わきかへり稻しをれたる

風かよふたも木のもとにすげ笠のひもをも解かず田子のいねたる

折にふれて涙をよめる

嬉しさの過ぎて言葉もいでかぬる心見するは涙なりけり

我袖のなみ〳〵ならずしめりたるうれしなみだのこゝらこぼれて

人々に旗亭に招かれて

おもふどちくつろぎて酌む酒まどゐむしあつけれど酔こゝちょし

いとゞなほあけやすき夜のかこたれぬ樂しき圓ゐするにつけても

うま酒はたしまじとても盃にこもれる心くまざらめやは

おなし時

共にわが咽ばむもうしなつかしみ來つらむ籔蚊やらふ烟に

五十嵐神社の社頭に巨杉二本立てるを

植ゑにけむ其世はるかに偲ばれぬ七かゝへある神の宮すぎ

神の手におほしたてけむ人の世のもとも見えぬ二もと大杉

五十嵐川の上流八木といふ處にて

つな手くりわたる山河なみ清しいさ子も玉と見えまがふまで
ちりの世の事忘ればや山がはのきよき瀬のおとに心すまして

人々に別をつぐるとき

かりそめのわかれと思へどなげかれぬ旅のゆかたの袖しぼるまで

彌彦山にて

むすべとて音たてぬめり夏くさのした流れゆく谷のまし水
雲きりにつゝまれてゆく峯なれば夏としもなく寒けかりけり

野積邑なる西性寺に名高き弘智法印の乾軀あり、法印の辭世、岩坂のあるじは誰そと人とはゞ墨繪にかきし松風のおと、といふ歌を額に掛けたり

のりの道いまも聞かむと岩坂のむなしき宿を風のとふらむ
ときおきし法のこゝろはむなしきを何處に木々のなりひゞくらむ

おなじ所にて

塵もなき岩井の水にうつし見てわがみにくさも忘れつるかな

信濃河分水工事を見て

山を切り河床つくりみちびきて水をすなほになす世うれしも

宿にかへりて誰かれに消息しける末に

彌彦の嶺にわかれし白雲のかげいつまでも目に殘りつゝ
つらかりき眞心こめてひきとむる袖ふりはなちかへるわかれは

（大正元年稿）

函嶺遊記（上）

山水秀麗にして温泉湧出し兼て交通の便備はり一瞬帝京より飛行し得べき仙境を數ふるに、西に箱根、熱海あり北に日光及伊香保あり皆得易からざる勝地なりと雖も其尤備はれるを求めむか遂に箱根を推さざるを得ず、乃ち同人と函嶺澡泉を企劃し七月二十四日午後一時半を期し中央停車場に會す一行總て十有五人、長髯の超耳順氏より紅顏の未成年君に至る迄皆單衣輕裝、齎す處一節若くは一傘但某々二氏のみ小嚢を携ふ二時列車は進行を起

しぬ過半空席なりし車室は新橋にて粗ぼ客を滿たし品川以後稍喧騒に苦みぬ。

雜談數時幾驛郵に送迎せられ山丘田圃を貫き若くは松林を馳走したる列車は、馬入の大江と雨降の峻巔とを眼前に展開し更に白雲重疊せる天邊に富嶽の清姿を拉し來り、遊客をして睡魔を容るゝの餘地なからしむ、四時五十分國府津に著く、肩山相壓し臀海相迫する電車内に蒸殺されむとする事少時、小田原に抵りて稍雜鬧を減じ一時に滿たずして湯本に達す炎陽既く峯に沒し山風徐に衣袂を吹く、早河の溪流は轟轟岩に激し藍を染め雪を吐く但歩々浮揚する路面の紅塵黄埃猶帝都の大道に髣髴たるぞ遺憾なる。

塔の澤を過ぎ舊道を徑して大平臺に出づ山百合の芳香馥郁たる蜩の聲の暮近げなる、はた老鶯の假言がましき何れは詩人俳士の品題なるべし。

蜩にいそぐとすれど百合の香の清きに心とまりぬるかな

宮の下には宮内省御用邸及富士屋奈良屋等宏壯の旅館あり商估軒を列べ小市街を爲せるは普く人の知る處なり、骨董の廛舗佳麗目を惹く、七時底倉に抵り蔦屋に投じ爭ひて浴室に赴く。

渴を訴へたる一行が浴後競ひ喫む幾杯の茶に狼狽せる婢を促して方圓の器を搬び來らしめ早くも某々氏間に烏鷺戰は開かれぬ。

數剋を調理に移し一行の胃腸を眞空ならしめたる晩餐は本來の佳肴鮮膾味一層を加へぬ、痛飲三斗圓月の前山に傾くを意とせざる上戸の數氏を措きて端書を認むる勵精家あり戰を再開する烏公鷺君欄に倚り若くは室に横はり清冷なる嵐氣を呼吸遨嘯せる學仙氏等あり、余は某々氏と出でゝ散策を試む前巒後岳相逼り夜月陰多し、水聲の淙々を隨處に聽きつゝ木賀を過ぐ白鷺瀑の水光鮮かに新築せる龜屋の樓第分明なり宮城野に抵らむとせ

しが修繕中の阪路危險なりしかば歩を回しぬ。

道邊に馬車を駐め傍の牀几に快眠せる馬丁あり、山紫水明の區寰を領略して自適滿足高枕安臥せる彼等の多幸思ふべし、蔦屋の門を過り宮の下に緩歩し既に來れる他の數氏と相呼應して堂が島に下る磴道六町許降り盡して一旅亭を得、大和屋と稱す白糸、調二瀑を觀むとし暗澹辨ずべからざるを以て空しく歸る、途に郭公を聽きて

ほとゝぎす遠音ほのかに聞ゆなり瀑のひゞきの近き谷べに

再浴して凉臺に話し夜半寢に就く。

函嶺遊記（中）

翌快晴　早朝某氏と近勝を探らむとし八千代橋を渡り蛇骨河に沿ひ旅亭仙石屋の店頭を過ぐ、路盡くる處瀑あり太閤瀑と云ふ更に崎嶇たる細逕を下降する事一町許にして溪底に達す、奔湍巖に激せる彼岸絶壁下に石を劃し圓を形れるあり標して太閤風呂と云ふ、惜いかな圓將に土砂に埋もれむとす、眼を轉ずれば清波躍つて岩門に入り深谿茂樹の間に八千代橋高く天に懸り其上方遙に明星嶽を望む、景奇絶境幽絶、耳に響くもの唯水聲の轟轟のみ鈴聚一揮手冊を塗抹して歸る。

午前七時四十五分一行齊く館を辭す先づ大涌谷を踏破し蘆の湖を横斷せむとす、駒が嶽の北麓に往かむとする老爺を得て導となす、蔦屋の主人が經營せる屋背の高山園を徑し行く事數百歩、園は蛇骨河の西岸に位し幾層丘と多少の平地とを有し眺矚に富む對岸の蛇骨瀑は峭立せる巉岩と共に遊人の觀賞を竢てり花卉芳草の研を競へるは云ふ迄もなし、園を出で隴畝を過ぎり行く事數町點々人家ある處之を二の平とす、茶亭頻に客を呼べり小涌谷に通ずる坦路を横ぎり行く事五町許老爺と別る、路漸く險歩々喘氣を加ふ、登る事十町湫陋なる一旅亭を見る早雲館と記す即ち上强羅なり阪路蜿蜒紆行曲歩又十餘町山勢一變す、前面咫尺に冠嶽の奇峯を幻出し其右方仙石原を隔てゝ金時山の峻嶺を觀る左看すれば神山の怪嶂巍然雲表に聳え他の峥嶸を壓して獨其高を擅にす回視すれば宮城野の平野は樹間に隱顯し神明嶽は依稀として余等を送るに似たり、踏む處已に山腹看る處從て壯且快なりと雖も炎陽燥赫さらぬだに流汗淋漓たる一行は脚悲更に熱艱を加へ鞠行緩々或は樹下に踞し

或は丘隈に佇立し山風の涼を納れ幾度か神氣の蘇息を圖る、中に某々氏の健歩疾驅するあり隊伍忽ち亂れ前驅後殿相距る事啻に百歩のみならず、數町にして岐路あり榜して曰右上の湯左大涌谷と乃左して進む、幾干もなく青草全く絶え燒岩磊磊灰石磧々已にして硫臭鼻官を襲ひ一望皓々たる豁壑を前方に展出す、喘氣を忍び行く事又數町圓滑禿顱に等しく素白雪に似たる幾丘腹を攀づる事更に數百歩巖巖色彩を變じ斷崖谿牀岩塊石片悉く淡赭若くは薄黄を帶ぶ、硫氣の噴出して白煙を揚ぐる處異臭強烈鼻を蔽うて避けしめ

其凝結して硫黄華と成り附著せる處岩石尤鮮黄而して涌泉の沸騰する處轟々として地底鳴り其溢れて注入する處澗水も亦熱す。

煙吐く谷には青き草もなし湯のわきたぎる音凄くして

谿は即大涌谷にして昔時大地獄と稱せり泉源の上部覆蓋を設け恰も屋の如きあり其側面一紙を貼して曰、是より四町に峠の茶屋ありと、渴を凌ぎ勇を鼓して磊塊を攀ぢ亭に達す時に九時四十五分、先著の某々氏と相對して碧眼紫髯の二客あり得意滿面暑熱の苦痛を叫びつゝ麥酒を快飲せり後續の諸氏次いで來る冷風征衣を拂ひ汗珠頓に去る、忽地前面阪頂に進み來れる數騎士あり各馬を舍て余等の來りし谿路に下る峻嶮騎乘を許さざるを以てなり、茗を啜り憩ふ事半晌許復行を起す路少しく平坦なり、西南即湖水に面せる邊曾て許多の噴氣と沸泉と甚しかりしが今は全く之を見ず赭岩黄土のみ依然たりき蓋移動休活は地熱の性なるべし、群岳の上に仰觀すべき芙蓉峯は堆綿の如き雲裡に沒しけむ其方向をだに窺はしめざれば稍失望して此小原頭を過ぎ勾配次第に急なる樹林に入りぬ。

函嶺遊記（下）

下降數町長尾嶺の翠嶂前に開け一端纔に現れたる紺碧の湖面を脚下に瞰、快哉を連呼しぬ十二町にして姥子に抵る、唯一の浴舍秀明館は新築の屋樓將に成らむとす此地も亦富嶽の眺望佳なるの處なれども嶽神吝むで示さず館の庭を過ぎり猶降る事十二町十一時湖畔の孤亭に達す即湖尻なり、亭前小流あり就て洗面舍漱す寒冽冰の如し喫茶一碗裝を整へて俟てる電機自動艇二隻に分乘す、艇南風を截つて駛走す碧漣取次に裂け搖々百千の銀波を起し左峭右峯刻々容を改む間に風を孕める帆舟あり一段の畫趣を添ふ、衣襟清爽塵炎全く絶え山影も涼しく水光も涼しく雲燿も亦涼し。

ひでり雲みづうみ深くうつれども秋にもましてすゞしかりけり

而も斯仙境を占め滴翠波に涵る清汀に輕舟を繫ぎ嬌面を水鏡に映し靜に綸を垂るゝ美姫ありて傍に風流好翁の亦釣を弄べるあり水伯をして妬視羨望せしむるに至つては寧咄々怪事ならずや、艇は頻に快走しぬ一瞬又一瞬塔が島の離宮分明に拜觀し得られ駒が嶽近づき

二子山現る午時箱根驛に著し旅館石内に投ず、樓を水上に構へ水泳を練習せるは避暑外客の兒童等なり中に妙齡の娘子を混ず風習の然らしむる處欣々嬉々毫も羞恥の態なし。

石内氏は往昔諸侯の交代參勤の途次其宿館たりしもの所謂本陣なり、當時通關の便宜を得たる侯伯の謝辭賞詞等幾通の尺牘を屏風に貼せるあり試に讀過す差出人加州、佐竹、水戸吟味役、牧野備前守内、信州善光寺大本願上人兼帶所江戸青山善光寺役人、宛名石内太郎左衛門等なり。

維新後亦名流の投宿多かりしが如し黑田長成侯の『湖光岳色』佐野常民伯の『波映玉芙蓉』及長岡護美子の「此夕湖邊倚古松飄然駕鶴到芙蓉天風吹破遊仙夢月上函山第一峰』等の數句は能く斯館の眺矚を說盡せりと云ふべし又福羽美靜氏の詠あり、やまの色水のみどりもとりゞにたのしきかげはある世なりけり。

偶ま前山の後方搖翳たる白雲の上に富嶽の屏顏を看る宛も纔に覆面を脱したる美人の如し離披たる皺皺間の雪線數條皎として殊に光あり倉皇是を畫帖に收むれば白雲從て復包被し去りぬ、湖產の鮒の味噌膾に空腹を醫し午後二時館を出づ驛は想ひしよりも落莫たり關

址を過ぐる時一瞥を孤松に拂ふ、亭々たる巨杉の下に佇立する事少時離宮の門庭を拜し湖畔に出づ汀際草萊の間に石佛數體或は直立し或は倒壞せる處所謂賽の河原なり途に羽生屋松澤等の旅亭あり幾干もなく元箱根に出づ民口稍繁し三町にして箱根神社に達す地境幽邃老樹欝葱鳥語雲に消え蟬聲林に響き囂塵全く斷ゆ

蟬しぐれ袂うるほすこゝちして涼しかりけり神のひろまへ

村媼野婦の道頭の滋草を刈れるあり近日祭禮を行ふ準備なりと聽く、有名なる巨釜外數點の什寶あり社務にて保管す仔細に觀覽する時間なきを以て訪はざりき。

道を權現坂に取り湯本に向ふ路石滑かにして歩危く暑熱爍くが如くして衣袂復沾ふ、蘆の湯に通ずる新道の迂回交叉せるを看神門の殘礎を踏み街道に出で復蘆の湯に達する舊道の左に岐るゝを看る登行總て八町左右山逼り地勢局蹙たる處即阪頂なり、平坦數武始めて下降となる、路復峻嶮、石滑々草萋々或者は脱履徒跣し或者は失脚顚倒しぬ獨草鞋を穿ちたるは得意なりき、軋々轎を舁げ許邪聲を爲し背後より來りて、我等を超ゆる者あり轎の一には洋婦の嬰兒を抱けるを乘せ他の一には其婢らしきが乘れり一轎四夫疾き事飛ぶが如く須臾に影を失ふ轎夫等の趨捷驚くべし、城不見坂の左に兀立せる巨岩を太閤の變改石と稱ふ是は豊太閤小田原攻圍の時此石に登りしも城を見る能はずして軍議を變じ攻進の道を他に取りしよりの名なりと聞く、道稍平坦なる處茶亭あり笈が平と云ふ就て憩ふ、行客の爲茗を煮醴を沸かす柴の煙の幾世幾年朝となく晝となく低迷しけむも著く緣も柱も黝然黯然たり余は端なく『千早振宇治の橋もりなれをしぞあはれとは思ふ年の經ぬれば』の歌を思ひぬ。

亭の前面道を隔てゝ明治天皇御遷幸御休憩所跡あり柵を圍らし清淨にせり、此地箱根へ三十町畑へ二十町湯本へ一里二十八町にして背に文庫山を負ひ前に二子山の一なる表二子を仰ぐ青々たる叢茅裡に點在する岩塊今し軒頭に墜ち來らむかと危ぶまる、亭の婦が喋々說き去る附近の名所談に耳を傾けつゝ甘酒一碗を啜り復行を起しぬ。

小田原の海濱淡く山間に現はるゝ處を猿滑阪と稱し力餅を鬻げる茶亭の邊を樫の木臺と呼び其處の急阪を樫の木阪と云ふ先行せる某氏亭にありて曰く待つ事久しと畑の宿は去年火災に遭ひ家居概ね新築に係り全く昔時の俤を止めず只挽物細工の轆轤の響と溝水の淙々

たるとは今尙舊の如し、此處より蘆の湯へ通ずる道あり疊々たる石磴如何に登攀の艱まし きかを思はしむ、座頭轉ばしを過ぎ須雲川に架せる某橋を渡り登上少許復女轉ばしと稱す る急阪を下れば左に初花の瀑を經て湯本に出づる間道あり小田原水力電氣會社の送水路な るを以て呼びて鐵管道と稱し村民商旅皆是を行かざる無きを以て本道は却つて靑草滋蔓道 にして道に非ざるの狀あり、余等も亦此間道に入る徑屈曲あれども坦々土壤爽塏頗る歩行 に佳なり行く事十町許樹木陰森たる阪路に出で下る事數十歩忽然道左に瀑布を看る、懸泉 數條高さ二丈餘紛々たる雪花巖洞に舞ひ飛沫霏々として衣袖を濕ほす初花の瀧是なり榻に 倚り茶を喫む、冷風肌に逼り久しく止まるべからず賣茶の婦が敎に聽き數歩を逆行し磴を 登り忍の瀧を看る、美姫初花が水行を爲せしと傳ふるもの是なり虛亭を領して觀賞に耽る 時正に五時、瀑は雌雄二條に別る初花の瀧と同巧異曲なるに似たり他に女夫の瀧木蔭の瀧 等ありと聞く、磴を下り又徑を進む行々須雲の部落と街道と右方に現れ須雲川帶の如く流 る。

已にして徑の岐するに會ふ地形を稽へ右に取り急阪を下る、一歩又一歩急愈急前人と後人と頭足相接す一氣に下降し盡し磊砢たる石磧を過ぎ機器運轉の轟々を聞きつゝ水力發電所の構内を過ぎ須雲川の淸波に沿ひ玉簾の瀧の傍を過ぎ六時湯本に達し今宵歸京する某々氏を電車に送り自餘の五氏と塔の澤に抵り福住樓に宿し澡浴幾回朝來の疲勞を醫し翌拂曉歸路に就きぬ（終）（大正四年稿）

伊豆回遊記（一）

飽くまで膨らませたる大形の信玄袋持てる、靑籠片手に風呂敷包提げたる、支那鞄手にせる、柳行李負へる、あるは幾枚かの毛布束ね合せて尨大なる苞造れる、學生、娘子、は た商人若くは避寒の客等榻に倚れる佇立せる一方には、差して混雜せぬ賣捌口に甲は熱海 乙は伊東丙は下田丁は某地と一々鄕貫氏名を告げ、思ひ〳〵の乘船券購へるは、大正甲寅 の年光去り竭して纔に三日を剩せる十二月二十八日初夜八時を半過たらむ頃の、靈岸島な る東京灣汽船會社乘船所の光景なりき。閑人も其一客として伊豆沿岸航路に搭乘しぬ、船 名は保全丸、噸數百八十一、若干の貨物と約九十の旅客とを載せ、九時十五分錨を拔きぬ

室を同うせる頭顱六個先づ牀座に腐心し、座已に定まれば華胥の鄉に急ぎ、敢て話題を供する者無く談柄を給する者なく、然なきだに暗澹たる船房は自ら太靜太寂の境地を現出しぬ。而も平穩無比なる海波は身の船中に在るを忘れしめぬ、識らず機器運轉の震動に年華の迫るを嘆ずる士幾人かある、唯嚴冬將軍の暴威を振ひ孤客を虐ぐるありと雖も、賴に老水夫が用意の毛布に沍寒の苦痛を免かれ、うつら〳〵夢路に入りぬ。

夜半正子稍動搖を感ず、相模灘に出でしなるべし、身を欹てゝ窓外を看る、山島の眼に映ずるなく皎々たる明月獨海潮を照す。

二十九日　未明冥に吼ゆる汽笛に我夢は破られぬ、と見れば船は已に熱海に入れり、然れど天地黑黯々市街と想像せらるゝ邊に燈火の燦然たる以外、何物をも看ず。

良久しく荷役に從ひ若干の客をも吐出し、我室亦二人を失ひぬ、既にして時辰七時を報じ夜の幕全く撤せられ、美なる海光麗なる山色眼前に展開し來りし時、船は再行進を起しぬ余は洗面含漱型の如く了りて身を砭する奇寒を忍び、舷頭に立ちて水陸の風景を貪賞しぬ恰も欄に倚れる一船員あり能く〳〵話し能く語る。曰く都人士の伊東に遊ぶ者年に多く紳縉の別莊を營むもの相次ぎ地價も漸く昂騰し、一歩拾五金を稱するに至れり。曰く當方面優良なる客船を航行せしむるも、所期の乘客なく收支全からざるを以て止むを得ず貨客兩途の船舶を用うる爲荷役に多くの時間を費し乘客の迷惑察するに餘りあれど、案外苦情もなし曰く今年初頭半島西岸に起りたる愛鷹丸覆沒の如き慘事は例外中の例外にして、全體に於て汽船の事故は汽車のそれに比し少數なるに關はらず、舟行を喜ばざる人士多く、航路の振はざるは遺憾なり云々。兎角吾佛の尊きは人情の常ならむかし。

八時網代に著く、灣内浪穩かにして帆船の碇泊せるもの多し、少時して艀を得陸に上る此地熱海迄陸路二里にして遠く、戸數七百餘を算すと聞けど概ね漁家甍戸にして店舗の壯なるもの無く街衢の看るべきものなし、あやしの旅亭を物色し得、他に有りやと問へば某處に佳良なるもの在りと敎ふ、從て行くに二戸あり、先のと甲乙なき矮陋の屋舍なれど、其一戸に就き朝餉を取り裝を整へて伊東へと向ひぬ。北行數町淸水屋旅舍の店前を左折してより阪路俄に險し、或は松林に沿ひ或は枯林を徑し、行く事半里餘、一木の眼を遮るなき高原に出づ、變衰せる芝草に覆はれたる山丘は宛然黃氈を敷きたるが如く、點在せる稚

松は之が彩文に異らず、顧れば相の眞鶴が崎は瑠璃一碧の海上に優秀なる眉を曳き、其額の邊、雲煙模糊の間に屹立する峻峯を雨降山とす、此處則網代峠なり、一歩一顧、初島の翠黛は去來する白帆と共に新景を添ふ。

伊豆回遊記（二）

迂回曲折寒林枯草の間を下降する事約一里、耳聾せる村翁、あるは獵銃手にせる壯者に遭ふ、『きやうかくいんにつてう上人御誕生の靈地てうせん寺』と鐫せる標石を見。九時四十五分宇佐見を過ぐ、戸數半百を超えざるが如くなるも郵便局巡査駐在所等備はれり、清冽なる河流、自然木の架橋、突兀たる岬丘、はた石磯を嚙む怒濤、一として佳景ならざるはなし、此處より伊東迄坦路一里白波崖際を洗ひ碧落大虛に通ず、風光明媚なる川奈岬は可憐小兒の如くなる手石島と共に前に竢ち初島の翠螺は浪に從つて後に送る、八幡祠及新建の忠魂碑を見、十一時伊東に入る。

眠れる巨鯨にも比すべきは沙濱に横はれる幾隻の船舶なり、艙口甲板等を新にせるはたと雖も海口に手石島在るを以て灣内風波無く熱海に較し港の價値數等上位にあり唯交通の利彼に若かざる爲彼の繁華に及ばざるは勿論なるも亦好個の一市街たるを失はず、此地又温泉に富む玖須美、松原、猪戸、各區を通じ湯戸約四十暖香園伊東館翻屋等尤著る、余は餐を伊東館に取り兼て一浴を試み昨來の疲勞を醫しぬ、亭婢荐りに地の勝を語り、伊東祐親の墳墓玖須美祠内の樟樹及鹽吹岩等を說く、又十二景あり、五山曇鐘　瓶山朝日　鎌田炊煙　松川遺遙　松原歸帆　横磯群鷗　手石宿鵜　初島漁火　等なり、午後二時館を辭し玖須美神社に詣す社は玖須美區の西端閑間に在り一に葛見と書す、祠傍陰暗たる邊に土人の靈異と稱する巨樟あり、祠前數歩なる入道阪を登り高原に出で一茅屋の庭を過り蓋傘の如き孤松下に伊東祐親の古墳を弔ふ、滿目蕭條悲風來つて枯草に泣く、當年武衛と語らひけむ美姫の跡や抑いづら。

うすかりし契わびけむ古の人なぐさめよ岡の松風

入道阪と相對せる丘腹なる梵宮の壁には伊東氏の紋章なる『庵に木瓜』を染出せるを看

る、由緒ある寺院なるべし遂に探尋せざりし、至憾々々

道を下田街道に取り峻阪を超え行く事六七町、稍平坦なる處岐路あり老松一株蔚乎天を蔽ふ左すれば川奈に達すべし、道左の茶亭に緣起書めける物を展出せり墨色鮮かなれど閲讀せずして過ぎぬ、前途程遠く客心匆忙たればなり、戀の甘酒茶屋とて世に知られたる處なりといふ。

あはれしる人や酌むらむいにしへの
跡なづかしき戀の甘酒

全く行人なき峻阪を上下し萬畑道の榜標を右側に見る、彼處は近年開拓せる田

野なりと聞く、二十町許や來りけむ右方に僅々民戸十數の吉田部落を看、又々險路を登る小室村と對島村との界標を看、尚行く事半里餘足漸く疲勞せし時寒風に鳴れる死茅枯茨蓬蓬肩を沒する高原に出づ。

伊豆回遊記（三）

眼を放てば左方渺漫たる海洋には大島利島新島等濃淡裝を改めて再我を待ち右顧すれば恰も巨人の禿頭の如き矢筈山は屹然余を睥睨し其後邊暮雲の既く嶺頭に靉靆たる奇峭は蓋天城の主峯なるべし、余が壽帖は爰に幾度か衣兜を出入去來しぬ、斯くて松林の周圍を燒ける野火を何の爲かと問ひて山無き國の客よと嗤はれ道側の盤石に蛇龍の根を占めたる喬松の名を質して樹下に地藏尊座すれば地藏松よと敎へられぬ。

恐ろしき野火ふせがむと山人はかねて林のめぐり燒くなり
み佛のすくひを松の陰ならむこゞしき阪路歩みつかれて

四時八幡野に着く半農半樵の民戸二三十村役場小學校明治三十七八年戰役忠魂碑及某氏

の記念碑等あり、地勢山腹なるを以て北より南へ急下降の道路は崎嶇峻嶮不規則なる磴道を爲す、房の一隅に秋刀魚干せる名許りの旅舍に勞軀を託し前後投宿せる二商客と火爐を擁して語り所謂旅商人氣質なる物を味ひぬ、彼等が利を說き益を話せる後當州は氣候温暖和煦最も玄冬の行旅に適し彼の亙寒酷烈屢々意氣を阻喪せしむる甲信地方と同日に談ずべからずと附加せる數言は善く吾を首肯せしめぬ、斯くて松籟の微吹に類し佳人の秘奏に似たる幽音、低調の瀾語を聽きつゝ初更に先ち夢を結ぶ。

十二月三十日快晴　午前八時商客の一人と共に旅舍を發す、商客氏は舌切雀の貪婆が荷へる底の行李を負へり但護謨風船の玩具を容れたるものにてさしたる重量ならずと云ふ余も小嚢を肩にせり相追隨して行くに余は輙もすれば後れむとす、河津三郎祐泰の墳墓河津と股野の相撲の舊跡及股野五郎が眞田與市に投じたる石塊を存せりと云ふ石投山等此附近なりと聞く、下降數町再九折の阪路を登る登り盡せば谿間海現れ繪畫の如き赤澤の漁村崖底に開き天樂に等しき濤聲耳朶に響く、下降又登攀嶺頭に虛亭を領して少時休憩し且眺矚に耽る、昨來過りし處歷々眸裡に入る山丘溪谷はた樹林一望平野の如し然も地の瘠は遂に

蔽ふべからず、麥壠なく菜圃なく黃赭色褪せる枯草原に非ざれば黑黯參差たる雜樹林にして炊煙の低迷するなく屋舍の指點すべきなし、唯詩趣は豊富にして畫題亦無限なり富戸、川奈の岬端屈曲斗出礁岩出沒白波銀を磨き蒼海に點々たる漁舟は晴空の星よりも淸く、其間不斷の漁撈を去來運搬する發動機船は潑々の爆聲を放て濤聲の轟々に唱和す、而して煙霞模糊の際に獨其淸姿を誇れるを例の大島とす識らず渠の弟妹たる他の諸島今那邊にか去れる。

一降又一登阪路の崎嶇は已に足に熟し

ぬ、寒流涸盡して石牀裸々たる谿谷を對島村と城東村との境界とす、此處に炭竈を守りて世外に超然たるは白髮翁ならずして却て屈强の壯者なりき。

山を負ひ海に枕める十戸の邑を大川とし清瀨に架せる板橋を大川橋と稱す水車を儆ひて挽材の業を營めり三島宮と額打ちたるは鎭守祠なるべし、木材と割栗石とを產し又古來樒を出すことは女子の生業なりと云ふ、川に沿ひて田畝あり數戸の茅屋を看る、歸鄕兵士歡迎の爲造れる綠葉の凱旋門及木材を墨塗したる擬砲車を珍しと看ぬ、濤聲の轟々は一層を加ふ。

伊豆回遊記（四）

道又下降、降り盡して海に傍ひ片瀨を過ぐ地の山麓なると波濤の岸に逼ると木材を產すると凡て大川に同じ、只磊磈たる石逕は轉た征客をして行路難を賦せしめぬ、然も海風に虐げられつゝ能く這裡に生を保てる老松の瘦姿雅に富めり。

根ざしをば何に固めて石濱の石間に松のおひさかゆらむ

再海に背き幾回か峻險を越え白田部落を經更に羊腸たる阪路を登り阪頂に一茶亭を得牛乳を啜り佳景を賞す、地を上野原と云ふ巨傘の如き怪松は此處にも在り斯く隨處喬松を見る何等か理由無かるべからず蓋一里塚ならむ又櫻樹兩三株栽られて道側に列れり、憾らくは花雲天を覆ふ春陽の候ならざる事を、爾後道概して下降或は疎林に接し或は幽篁に連る依然崎嶇險惡なりと雖其崎嶇險惡從前に比し稍減却せるに似たり、午に垂むとして道右の丘上に燈臺を看る。

午後一時稻取に著き行商君と別れ旅館藤屋に空腹を醫しぬ、地は伊東に亞ぐ殷賑の海市にして民戸壹千を算し漁家商舗軒を列ね甍を竝ぶ港灣亦佳良現に大型汽船二隻繫泊せるを看る、擧村元氣旺盛孜々役々一意產業に勵み石花菜の產出と森林の經營とを以て著れたる模範村なり、小學校舍鎭守祠宇等雄築宏壯なり又水道を全區に布設せり、唯地勢山丘に凭り狹隘傾斜故に道路の如き一高一低殆ど平坦の個所なし然も其高低ある路面に悉く敷石を施せる亦思めたりと云ふべし、斯の如く居民生業に專なるを以て熱海伊東に觀るが如き旗亭割烹はた紳士の別業等を缺き闔區閙々擾々紛然利に趨り臭を追ひ錙を積み銖を蓄へ毫も悠

楊の風なく到底閑居謫仙の境ならざるは今更絮説する迄もなし、聞く毎年七八月の交石花菜の採收に從ふ年少女子一日多きは約貳圓少きも五拾錢の賃銀を得且儉素俗を爲せるを以て朞年ならずして嫁資を贏し兼て家計を補ふと、而も一たび帝都の風物に接せざれば遂に良緣を求め難き古來の慣習あるを以て妙齡必上京し或は知己に寄寓し或は僮婢となり稍脂粉に親み華奢に傚ふと雖も歸りて天と爲る所を得家庭の人となるや再採藻に從ひ身を波浪の掀飜に委し又都風の何たるを知らざるが如しと、習俗己に斯の如きを以て富裕比なく各種の商賈來て利を得ざる無しと云ふ。

午後二時藤屋を辭す阪路例の如し、行く事幾何ならず數叟の畝畦を隔てゝ滉漾たる海面に大小幾個翠螺の浮泛せるを看る、最先の神津島は今宵の宿泊地點たる下河津の突端に連り他の數者の爲導たるが如く最後の大島は軀幹偉大の好爺が溫顏兒孫に對するに似極小の鵜羽根島は帶圓三角形の利島に倚り恰も慈母に縋れる嬰兒の如く細長庖刀の如きを新島とし新島と神津島との中間一線を曳き危く浪波の呑了する處たらむとするを式根島とす、而して新島の左端嶺頭煙靄の間更に一抹の微翠を施せるを三宅島とし各其姿態の秀と蒼翠の麗とを恣にして行客をして佇立顧眄の遑なからしむ只訝る式根の島影出沒常なき事を、仔細に注視して始めて吾が立脚地の高低に從ひ隱顯差あるを知りぬ則高處に在りては善く看取し得るも低處に到れば忽ち其影を失ふ、騁望幾回行路の嶮も全く遺忘せむとす、行く事約一里道側に二碑を得且讀み且憩ふ。

夢さむる六十一とせや秋の風　　龜潮

風成りに散果るなり春の花

蓋二ながら辭世なるべし後者は『の』字より以下埋沒し了せり終末の『花』字は余の假に塡充せる處に係る。

伊豆回遊記（五）

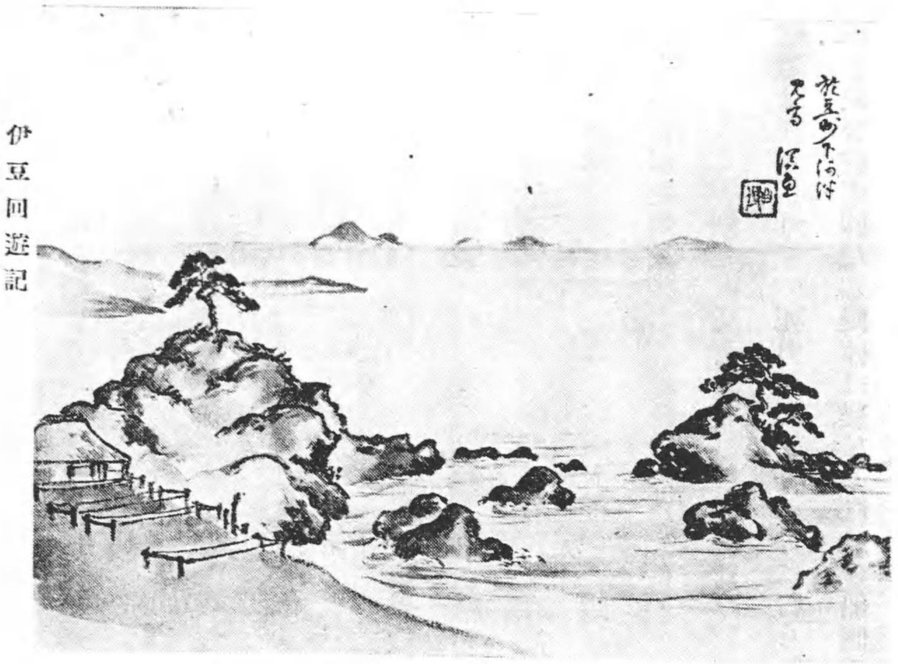
幾干も無く見高に入る下河津に屬する海村にして又良灣を有す戸數四五十、怪岩幾個虎踞牛臥潮風に嘯き波浪に號ひ港の一角に據る、漁歌に長じ謠謠に老いけむ孤松は相對せる二大岩頭に蟠龍翔鳳の姿態を示し長へに海若の振盪する璃瑠の淨鏡は片端幾破碎して不斷

の雪華を岩脚に散せば利島新島等の島山亦遙に策應して其美觀を輔け宛乎名手の盆景に向ふが如し、隨所に目擊せし烏賊魚は此處にも亦晞干せり又耕牛を飼養せるをも看ぬ。

此處より上河津に通ずる良道あり優に車馬を馳驅せしむべし、余は路を海岸に取り四時下河津濱に達す地の繁華稍取に及ばざる事遠きも略市街の體を備へぬ河津川其中央を貫流し鐵橋型の長橋を架して濱橋と題せり西行數町帝室林野管理局出張所の門を過ぎ旅舍まげ屋に投ず舍は谷津區に在り天嶺館と稱し溫泉あり他に湯戸二ありと云ふ、設備は未だ都人士を滿足せしむる程度に達せず然れど近鄕の富翁閑爺はた野夫村娘若くは修學旅行の健兒等浴客館に滿てり、余は電燈影暗き小室に寢す三更山風飄颯孤客の夢爲に驚く。

谷水の音は聞えぬ宿にても雨かと風のおどろかれぬる

三十一日陰南風稍强し、八時館を出で昨來りし處を逆行し再帝室林野管理局前を過ぎ道を海岸に取る。恰も木炭を滿載して岸を離れたる解舟の洶湧たる波濤に窘められ將に沙洲へ膠著せむとし舟子の死力を出して前方に行らむとするあり、余は是を看て手に汗を握る然れど彼等が巧妙なる操棹は難なく汽船の船側に達しぬ、潮光波影に憧れつゝ阪路を攀づ



れば大島は今朝も積水渺漫の間に依然秀麗の翠眉を現して余が願望を竢つに似たり、登行數町全く海を失ふ、男女往來する者三々又五々漁翁にも非ず樵夫にも非ず又尋常農村の婦郎にも非ずはた都雅風騷の閑客にも非ず、是に於てか土風に就き疑惑の雲胸裡に湧起せざるを得ず、頂點を極めて後岐路に迷ひ其白濱に達する捷徑なるを知り行く事數町、忽然谿間に天を衝て立てる數個の煙筒と幽境を凡化せる幾棟の木造工舍と縱橫敷設せる軌條とを看、轟轟たる機器の運轉と鏘々たる碎礦の音響とを聽くに及むで始めて先に遭

遇せし男女の何たるかを會得しぬ、此處即金礦採掘の事に從へる大松鑛山なり。

再び羊腸の山逕を上下し本道に出で麹坂と稱する急阪を降る事半里餘繩地部落に出で又嶮峻を登る、嶺頂新に礦石運搬路を開鑿し軌條を布く土砂の堆積は遂に余が行かむとする舊道を埋沒せるを以て止むなく勾配緩徐なる新道に入る、坦々たる良道行歩に佳なりと雖も迂餘甚しく幾十百歩同一の山腹を彷徨するが如し疾行十數町徑路を得て急轉直下復舊道に入り幾何もなく白濱に達す、地は丘上に位置せる漁村にして又採藻に著る青松蓊鬱たる岬角を包むに皚白雪の如き砂濱を以てす白濱の名空からずと云ふべし、小山岬爪木島其右を限り遠望近景共に奇なり、嶮峻爰に竭き稍廣潤なる漫阪を登る十時を過ぎて一亭に蜜柑を嚙み少時休憩す、亭の媼と隣家の婆と店頭に話し頻に歳末の多忙を喋々す而も婆氏容易に去らむともせず冗語の交換に餘念なし。

伊豆回遊記（六）

再び行を起し一登一降進む事約一里、始めて乘合馬車の疾驅し來るに遭ふ、削り成せる道左の崖際に先づ其一端を現し歩々増大する市街の瓦甍を觀望しつゝ、行く事尚十町許、阪路下り盡し稻生澤河に架せる一橋を渡り、軒頭檐前松竹相接し迎年の用意全く整へる下田町へ入りしは正に亭午なり、下田は洲の南端に位し東西五町南北十二町戸數一千有餘人口五千を超ゆ、郡役所區裁判所警察署郵便局郡立學校劇場神社及若干の寺院等あり商業殷盛洲内屈指の都會とす、港口西南に向ふ、灣の廣袤東西九町南北二十三町潮深く能く大船巨舶を繫泊せしむ、但港の一隅に造船所ある以外大厦巨屋の眼を驚かすものあるなく、醜陋なる商估と、如何はしき旗亭割烹と、軒を列ね鋪を竝べ、往來徘徊する者脂粉を施せる妖婦若くは船夫漁徒の類其大部を占む、觀じ來れば下田も尚漁村の稍發達せるものに過ぎざるなり。

此地が安政年間、相の浦賀と共に始めて泰西文明の曙光を享けし地なるは普く人の知る處にして、彼の米使と最初の條約を締結せる了仙寺及濱崎村柿崎なる吉田松蔭の遺跡等永く誇とするに足れり。

勝景としては外岸に峭立せる岩礁を稱すべく、其他石廊崎手石等ありと雖も二里若くは

三里の遠きに在るを以て探討の時間きを遺憾とす。

街衢を縱横一瞥して後、餐を久津輪館に取り午後二時復發す、町の北端に抵り乘合馬車に駕し上河津に向ふ、馳行數町山上にペルリ提督が記念の刻文を止めたる黐樹ありと云ふ下田富士を車の後簷に看、田圃を貫き走る事里餘、稲生澤村立野を過ぐ此處より數町にして蓮臺寺温泉に達すと聞く、更に稲生澤河に沿ひ進む事若干、俄に山雲四方を蔽ひ風を孕める幔幕の缺隙より霏々たる細雨面を掠め須臾にして歇む、爾後一霽一雨馭者と乘客と一喜一憂の間に幾分勾配を加へ來る坦道を走る事復二里、谷漸く逼り道稍險ならむとする處之を北之澤とす時に午後三時を過る事十五分なり、此處より以北を天城越と稱し通常馬車の終點と爲す、強ひて傭へば尙行り得べしと雖嶮路として多額の賃銀を要求せらるるのみならず同乘車皆無なるを以て健脚者は悉く徒歩すと云ふ、北行數武稲生澤川に架せる北之澤橋の橋畔より河に沿ひて左折し舊道に入り復嶮峻を攀づ、山畦丘圃の間に點々人家を見行く事數町、密雲再び起り山雨幾滴衣袂を打つ、喘氣を忍びて急歩十數町、山漸く深く里落全く竭き鳥聲人語共に絶え、喬林幽谿唯雨公の蹂躪に委す、小鍋峠に抵りし時雨益々烈し、佇立多時淋漓たる流汗を拭ふ。

しぐれの雨うけつゝかけ路よぢ行けばひたひに汗の玉ほとばしる

よぢ登る谷のかけぢのさかしさに年のくれゆく事も忘れつ

偶邂逅せる一客に前程を問ひ、小鍋温泉地既に近しと敎へられ且降路の容易なるを思ひ殘勇を皷し行を起す、一夫纔に過ぎ得べき山逕は濁流滾々木履を漂はし、轟々樹梢を磨し來る谷風は我が孤傘を奪はむとする事三度、屢樹下に避く、絨繖を滲透し來る雨滴に外套は更なり手も足もひたし濡れて四時二十分小鍋部落に達し、惟一の旅館にして且温泉場なる二階屋に投じぬ、館は溪流に枕み對岸別に小館を建つ地は上河津村に屬せり、曲亭馬琴此地を過ぎ『小鍋坂大鍋坂の水おともまだ程遠し湯が島の道』と詠じ古來著名の温泉なれども夏季は知らず現下低温にして到底稱揚すべき價値を見ず。

伊豆回遊記（七）

雨聲溪聲交々聽ゆる樓の一室に火爐を擁し無聊に苦み知友への賀狀二三を認めぬ。

晩景に至つて雨歇む、漣洒たりし余が客衣も案外容易く晞干せり、こは主婦の深切に依れり主婦は不惑を出入する年齒と見ゆ言語動作質なれども野ならず一人の婢をも傭はず少娘をして客に接せしむ畢竟旅亭は主婦の餘業にして主人は別に生業を有すればなり、晩餐の膳に副へられたる手製の蕎麥香味豐なりしかど醬汁の腥臭には閉口しぬ、餐後宿帳を一瞥す曰く九日二人十日四人十四日十五日各一人十六日十七日各六人二十日二十一日各一人二十三日二人而して投宿者は殆ど行商人と遊獵客とに限れり、六時を過ぎし頃雲全く霽れ清朗たる夜月窓に照る。

谷水のおとなほ雨にまがへどもさしくる月の影さやかなり

谷水の音か雨かのうたがひも晴れわたりたるこの月夜かな

斯くて過去四十有餘年の生涯を通じ何等曲折なく變化無かりし余は又も平凡なる今年を電燈光薄く溪水音高き閑室に送りぬ。

元旦未明起て浴室に赴けば浴池は既に里爺村夫に占領せられて一浴は愚か含漱を爲さむ餘地もなし、竟夜喧々囂々雜談放歌せるを聞き或は隣佑相會して徹宵逸遊する習慣なるかを疑ひしが爰に至つて始めて浴室の終夜開放しありしを知り亭前に溪水を汲むで洗面を了る。

あたらしき年の光ぞうかびける流も清き谷のしみづに

いで湯わく宿はかけひも氷らねばさながら結ぶ年のわか水

山村の新歳椒酒無く羹餅無し依然たる菜汁に口腹を充たし午前七時館を發す、溪橋霜白く竹宇茅屋炊煙未だ昇らず、蛇行數百步にして本道に出づ道は山腹を截つて造り坦々砥の如し右直に峰巒に連り左斷續せる軒簷の間に谿壑を瞰下す、函車を挽きて走る壯漢の後に從ひ行く事十町許路左に岐れ標柱を建つ文字模糊辨ずべからず、人に問ひ其舊道にして捷徑なるを知り則ち之を取る崎嶇峻嶮は毫も恐るゝに足らざるを以てなり、行く事數町山邑再び竭き深谿左に潤き谿底遙に碧水を看る更に行く事若干崖邊新に宏屋を構へ長管來つて之に連る是を河津水力電氣株式會社の發電所とす、榜標あり曰く、距下田本社送電線路四里十六町三十九間、と路漸く險を加ふ枯草地を被ひて徑僅に尋ぬべく舊苔の青を保てる石面に年を迎へたる新霜は未だ樵人の鞋泥に塗れず、谷に棲む幽禽の遽に余が跫音に答ふる

あれど喬林欝乎たる處陰凄の氣人に逼り屢路を失したるかと疑ふ唯電柱の導を爲すあり孤心依て安し、既にして電柱を失ひ危惧煩悶左視右顧はた急歩し疾行すれば溪水脚下に鳴り鞏鞳我を鼓舞す或は銀白或は紺碧布を曳き糸を垂れ藍を湛へ玉を轉ばす、天城山御獵場の榜示ありし邊より草莽芟除せられて道頓に廣し須臾にして巨杉亭々天空を看ざる深林に入り行く事數町路岐れて二となる、急湍道を遮り板橋苔滑かなるを左とす記して曰く荻の入に通ずと、樹林に問し幅員稍狹少なるものを右とす所謂鍋失徑路なり、二者孰れを擇ばむかに困惑し慮を費す事多時竊に判ずらく右は本道に近く左は之に反せむと、今朝出立に際し二階家の主婦が半途必隧道に出づべきを反覆説示せしを想起し其隧道を通過するの利便なるを思ひ意を決して右に向ふ、森林欝茂して晝尚暗く寂々たる阪路十數折を攀ぢ人語聞ゆるなき挽材場を左方に見九時本道に出づ。

伊豆回遊記（八）

坦路例の如し朝來陰雲頭を壓し全く陽光を視ざるを以て雨雪の襲來を虞れ行歩最力めぬ

村しぐれ今かそゝぐと山の端の雲のたちゐのきづかはれつゝ

鍋失橋及大杉橋を渡る、凝霜路を掩ひ奇寒肌に迫り重襲の客衣尚薄きを覺ゆ、知るべし已に海拔幾千尺の高地に在る事を、唯夫れ苦辛登攀歩む時は即ち熱汗額を沾し憩へば忽ち寒毛悚立す、阪路の側面より巖に傍ひて深谿に奔下する瀑布を二階の瀧と稱す曲折段階あるを以てなり、佇立觀望に耽り瓦礫數首を得。

雪とちり霰とみだれ寒けさのかぎり見せけり瀧の白浪

瀑上の一橋を寒天橋と名く橋側數歩に孤屋あり戸牖密に鎖し闃として人なし、紆餘縈回進む事里餘『是より地獄谷まで馬車徐行靜岡縣』と記せるを看幾干もなく隧道の南口に達す時に十時前五分なり、孤亭に茗を啜り行厨を開きて少喫し且道途の所感を記す。

越えすぐる人もなくして足引の山路しづけく年立ちにけり

枯生たつ鳥の羽音もさむげなり霜に氷れる朝かげの道

山たかみつねゐるものを雨雪をさそふ雲かと思ひけるかな

十時三十分行を起し隧道に入る洞長さ四町許中央は蓋加茂田方の郡界にして兼て本洲中

部の分水界たり、即ち南口は前者に属する上河津村梨本にして北口は後者なる上狩野村湯が島なり洞を出で右側に旗亭あり屋舍新に擴築中に屬す、此處にも御獵場の榜示あり以後下降極めて易々、徑路ありと知れども道を失はむ事を懼れて入らず、天城橋水生寺橋等を過ぐ所在の岩石青苔鮮々殆ど石面を看ず。

石垣のいしも綠に苔おひぬ雲霧はれぬ谷のそばみち
荻の入にて舊道と合す榜して曰舊道峠迄十八町と大川端橋出水橋等を過ぐ、懸崖の下細溪の間地を劃し畦を限り清泉を湛へ石磈岩片磊砢たる邊點々不斷の綠を示せるを此地特有の山葵田とす、路傍の細流にも亦野生のそれを看る。

足引の片山かげのわさび田は冬枯もなき綠なるかな

問く山葵は湧水滴々たる邊に種育せるを上品とし野生の如きは苦味口にすべくもあらずと杉本橋を過ぎ始めて獵銃携へたる壯士の混ぜる一群の行客に遭ふ到所林道あり標して明ならしむ、全山皇室の御料なるを以て林政完備嶂頭丘隈欝乎蒼々植栽せるもの皆杉柏等の常綠樹なるが如し、下降已に二里許屢々徑路を過り十一時茅野部落に達し狩野川の水流と人家とを看路少しく不良となり或は凸凹或は泥濘或は崖壁の崩壞して土壤の堆積せるに艱みぬ。

午時湯が島に達す此地溫泉に富み落合樓世古樓等の湯戸を有す一亭に憩ひ復行厨を開き殘餉を喫し了る、亭婦頻りに溫泉の神効あるを說き且元湯たる世古樓を薦めて止まず、恰も好し陰欝雪を降らさむかに見えし天空は麗日面を射るの好晴となる山上の八寒地獄はや過去の夢にして今現に和暖快適の樂地に在り遊意動かざるを得ず。

伊豆回遊記（九）

亭を辭し直に急阪を下る事百餘歩水躍り波舞へる狩野河には簡易なる釣橋を架す橋は條鐵を以て釣留せり、歩々動搖一上一下舟裏波濤を行くが如し危橋渡り了り落合樓の門を過ぎり西行約四町、溪流屈回欝樹岸を蔽ひ氣味幽邃なる邊新架の木橋に列りて又釣橋を看る橋渡らずして行く事七八歩、崖に倚り流に枕める幾棟の屋樓を物色し得、世古樓是なり就て澡浴を試み浴後樓に憩ふ樓は結構湫陋未だ遠遊の都人を懌ばしむるに足らざれども溪水の清岸壁の奇畫題豐富詩料饒多、惜むらくは地の僻なるが爲風雅探勝の士殆ど皆無なる事を、遮莫乙卯の新光は既に洽く斯の僻陬を被ひぬ、山魈木魅を伴侶として歳を送り年を迎へたる余は茶を侑むる婢の盛裝に先驚かれ、次て高飲亂酌手鳴り絃響く隣室の豪興に錦衣玉帶往來絡繹たる都門の光景を想像せざるを得ざりき客は勿論土地の青年なり、對岸又樓あれども無人空寂狐狸の棲處に異ならず。

憩ふ事半晌餘、午後二時樓を謝し路を北に取り數町にして狩野河を渡る此處にも温泉あ

り旅館を湯本樓と云ふ訪はずして過ぎ田圃を逕して吉奈に向ふ、或時は道を岐路に問ひ專ら廣きを行けと敎へられ其所謂廣き道なるものゝ殆ど畔道と同じきに呆れ、或時は小流の獨木橋に手脚顫戰冷汗背を濕しぬ。

本道に出でゝ禰宜澤橋を渡る嵯峨澤橋の畔亦温泉あり但湯戸は唯一のみ此橋を渡りて狩野河の左岸に出づ從來河を左に望みしが是に至つて位置を轉ず、幾干もなく左折し復間道を行く事數町三時吉奈に達し旅館東府屋に投す東府屋一に芳名館と稱す邸地廣濶吉奈河を挾むで建てる客館幾棟瓦光壁影相映し宏壯雄大兼て又風流清洒、掬水亭東亭南邸等皆離亭別屋の號なり室凡て七十五温泉亦大湯内湯等ありて館内數所に浴池を設く河には橋廊ありて以て連絡を通ず中庭の亭を澄心と名く別に倶樂部及運動場等を備へ浴客をして無聊徒然の嘆無からしむ、經營寔に力めたりと云ふべし設備已に此の如し前に說ける世古樓に比して一層更朔の瑞氣溢れ屠蘇の芳香漲れるは云ふ迄もなし但例年に較べ浴客尠しと聞く。

一浴後出でゞ散歩し庭後の丘を攀づ、老樹枝を屈めて古葉道を蔽ひ心地忽ち幽靜を感ず居館の全景を瞰下しつゝ降り附近を徜徉漫歩しぬ、鴛鴦三五悠々溪水に泛び婢等の東奔西

走に關らざる自稱閑人の却て閑ならざる比に非ず。

此地元旅舍四戸ありしも湯本屋外一戸を東府屋に收め現今他に酒屋なるもの一戸を殘せるのみ、而して東府屋の經營上述の如く臻れりと雖も幾多深山幽谷の觀に飽ける余が眼眸には這個掌大の一區寰何等奇趣を感得せざるぞ是非もなき、夕飯後手冊に戯書す

鶯の湯の香したひて來鳴くなり酒屋につゞく東府屋の庭

二日快晴　風餐雨宿幾晝夜既に豫定の日子を銷し盡して歸心矢の如き余は今朝館主が特に調味せる雜煮を急喫し倉皇膝馬に鞭ち門が原、月が瀬、田澤中島、樋澤橋、青羽根、本立野、瓜生野等を過ぎ大仁に達す、程三里有半船原温泉旭瀧修善寺温泉等皆其附近なるは普く人の知る處なり、大仁にては水晶山の下なる狩野河の架橋の曾て渡過の際堅牢無比ならむと見しが近年の洪水に全然流失したる其の跡に形ばかりの假橋を設けぬ、町の繁昌と停車場に待てる馬車の夥しきは往年に倍せり。

十一時五十分汽車に搭し芙蓉峯の清姿を車窓に惜み假睡幾時黄昏家に歸る。（終）

湯河原澡泉記（一）

年末歳首の禮を缺き一年の計をも定めず悠々山野に起臥せりと聞かば人は閑人の餘りに閑なるに愕かん、若くは富貴の子を學び流行の跡を追ふ輕薄兒と嗤はん、然れども二六時中簿書と刀筆とに親み、春夏秋冬電車の去來するが如く輪轉機の回轉するが如き、乾燥生活に疲憊せる余は偶々與へられたる自由の光陰を漫然蝸廬に徒消するに忍びず、顏亞聖のそれにもまして餘裕なき靈棗の全然竭くるをも意とせず、大正二年十二月三十日未明裝を整へ湯河原澡泉の旅途に上り其午前六時二十分新橋發汽車に搭じぬ、品川に至るの間曉雲紫に變じ紅に化し遺憾なく色彩美を示しぬ。

油繪を見るこゝちしぬ海しろくあけはなれゆくしのゝめの空

八時三十五分國府津に著き例の電車に乘じ九時十五分小田原にて更に豆相輕便鐵道に轉乘す、車體は小く乘客は多し車内の窮屈云はむ方なし、早川を渡り石垣、石橋諸山の山麓を廻り左方に汪洋たる滄海を觀、時々崖下に波濤の聲を聞けど觀光など思ひもよらず。

乘る人の足の立ともあらぬまで汽車のこみあふ年のくれかな

歳末多忙の子なるべし貨物を山積せる車を阪路に曳き惱めるを見る。

かちにても行きうき阪路おも荷つみのぼる車のすぎがたの世や

或時は待避線に入り或時は汽罐の用水を補充し、屢ば乘客をして白駒奔過の嘆を發せしめたる我輕便汽車は十一時を過る事三十分にして吉濱に著きぬ、吉濱は僅かに港津を爲し人家百にも滿たざるべき海驛にして湯河原停留場即門川迄距離尙十五六町あれど明媚なる海濱の風光に飽かむため、余は玆に車を辭し强風に弄ばれ怒濤に脅かされつゝ單身徒行し ぬ門川より右折して始めて湯河原道に入る用水に沿ひ一箇二箇道傍の水車を數へつゝ爪先登の坦道を行く事十數町鄕社八幡祠前に出づ、祠は宮下に在り門前に銀杏の巨樹を見る梢頭天を摩し枝端屋を蔽ひ形狀の雅趣なるのみならず、淸流の絕えず其根幹を洗へる又奇を以て評し得べし、此處より猶進むこと二十餘町左右の山丘漸く近づき地窄まり俄に谿流の鞳鞳を聽き次いて高樓相櫛比するを看、問はずして其湯河原温泉なることを知りぬ、地は神奈川縣足柄下郡土肥村に屬する一部落にして南方直に伊豆に接し、北西南及南東の三面は近く山丘を負ひ、遠く箱根連峯なる南潮山、鞍掛山、日金山及伊豆山等に圍繞せられ、獨東方田圃開け平坦なる一路門川海濱に通じ藤木河は部落の中央を貫流す、湯戸は天野屋を巨擘とし、富士屋等之に亞ぎ豐富なる涌泉を浴室に湛ふる者總て十三戸、其の他球戲場大弓場寫眞館貨本店及び日用雜貨店等備らざるなく地勢光景豆の修善寺を縮少したるが如し。

午後一時湯屋旅館に投ず館は別に敷島館と稱せり、館員曰く例年歳末より一月十日頃迄を最繁昌期と爲すも本年は何故にや甚閑散にて、各戸滿員を告げ止を得ず日々客を謝したる昨年の景氣とは雲泥の相違なりと、又曰く此地二十年來嘗て無き寒氣なりしが一兩日來稍緩めりと。

一浴後非時に午餐を喫し新聞紙及携へ來れる朗詠集を閲讀し暮に及ぶ、溪流の水聲絕えず耳朶に響く風稍烈し。

靜にもすむと思ふを谷水のおとかしましき山のやどかな

溪畔は好むで自ら宿せし處、斯の如きことは假にも言はれざるべきに、と自ら自己を笑

ふもをかし。

西きたを山のかこめる此里は冬としもなし風はすさめど

微雨降り程なく霽る、晩餐後附近を散歩し町の入口なる落合橋を渡り阪路を辿り行く事約二町榜標に由り其日金道なるを知り歩を回し落合橋に近づけば崖下の水邊に幾度も火光明滅す、何事かと見やれば老壯三人忙しげに藁を揃へ束に作り居るなり、彼等の刻苦思ふべし。

よるもなほ藁仕事をぞいそしめるそのわら屑の焚火あかりに

六時半旅舍に歸る、七時過得意客と覺しき一組案内に連れ隣室に入り來り、二時何分小田原を發車すべき輕便汽車風雨に妨げられ一回休止せる爲意外に遲著せりなど語れば、主婦の頻に犒ひつつ風は此處の名物に候など挨拶するが聞え頓に賑はし、午後十時寢に就く水聲風聲共に高し。

山風をわびつつ聞けば岩はしるたきのひゞきもそれにかよひぬ

三更夜警の擊柝を聽きて

谷水のひゞきのほかに夜まはりの木のおとをさへ聞く寢ざめかな

（二）

三十一日曉起戸を排して天空を望めば夜來の風雲名殘なく晴れ、星斗燦爛たり驚喜一首を口吟む。

草枕おきいでて見る曉の星かげばかり嬉しきはなし

今日、十國峠の奇景を探らむとし、先館員に里程等を質し、午前八時輕裝館を出で昨夜散策せる落合橋を過ぎ阪路を上る、一町毎に簡單なる里程標あり、一町復一町次第に急峻となる、岐路には悉く指導標ありて孤行危からず、道は雜木林に蔽はれ或は溪谷に沿ふ、亂石を踏過し溪を渡る事數度、水聲右に響き、又左に聞ゆ、三十一町にして水聲に別れ尙登る事數百歩、扁平の石面に湯河原見付より三十六町、大正二年十二月廿三日實地測量湯ケ原岩本と墨書せり。

風漸く寒く路傍次第に凍雪を見る、行李を岩角に卸し流汗を拂拭せる一青年に遭ひ、余も少しく疲勞せるを以て傍に佇立し語を交へ且共に進む、青年は富士郡の人、小田原地方

に勞働して若干の成果を收め、越年の爲鄕里へ歸省するなりと、數町にして靑年と別れ、日金山般若院に達す、本尊地藏菩薩と卽く、佛日光薄きにや堂も庫裡も甍破れ扉朽ち、參詣の人ありとも見えず、滿庭の霜を掃ふ嵐の音凄し、一拜直に左方阪路を上り、七八町にして山頂平原に達す、碑あり左の文を刻す。

伊豆國加茂郡日金山頂所觀望者十國五島

自子至卯相模國武藏國安房國上總國下總國

自辰至申其國所隷五箇島及遠江國

自酉至亥駿河國信濃國甲斐國

天明三年八月東都林居士諸島出雲光英源淸候

等應熱海里長渡邊房秉需建之

爰には加茂郡とあれど郡境界變更の爲今は田方郡に屬せり、已に十國峠に來れり、當面卽西北方を望めば函嶺崢嶸として高を競ひ峻を爭ひ、西方芙蓉帝座に咫尺せむとし、點々たる白雪は能くこの老死火山を美化し了りぬ、眼を右方に轉せば、淼漫たる相模灘は指呼に來り、遠く水天彷彿の際に房總半島の斗出せるを睹、中央に大島及其右方に半圓に近き三角形の一島、竝に煙波渺茫の間に又一島を望む、地圖を開展するに前者は利島にして、後者は新島なるが如く、脚下海濱の左端より大島に向へる一指頭を眞鶴か崎とし、而して陸地と大島との中間に浮泛せる小島は、是なむ鎌倉右大臣が『箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆ』と詠じたる初島とす、更に視線を右方に轉ぜしめよ、天城山を中心とせる伊豆の諸峯は參差相連亘し山勢窮る處則、駿河灣の翠碧を湛へ、千本松原田子の浦等、一々指點すべく遠く遠江の御前崎を望むべし、乞ふ旣に山海の勝景に飽ける眼眸を尙少しく右方に移せ、千古汚れざる富士の靈峯は中空に屹立し、十洲の英巒雄岳を脚下に臣從せしめ、渺々際なき太平洋を遙に睥睨し、四顧淸澄六合朗曠たる冱寒の天猶一朶の白雲冠頭に靉靆たるを見む、釋宗演師が二子山にて賦せる『羊腸一路上崔嵬如波亂山望渺哉關八州連脚跟裂太平洋接睫眉間』の一絕は假りて以て此際に誦すべし、若夫れ余が探勝慾の希求に從はむか終日佇立尙且及ばざるを畏る、然も寒風凛冽肌を透し骨を刺し、到底觀望を久うすべくもあらず、咄嗟二首を得。

せまげにも思ほゆるかな目のまへに指さゝれぬる四方のうみくが
さむき風ふきわたらずはいつまでもながめてをらむをはしき海山

心裡再游を期し、匆々途を箱根に取る、寒風頻に吹き手凝り足凍えむとす、幸に道は下降にして勾配緩なり、急歩十數町漸く山腹に達し風伯の追及を免れ、始めて日光の恵に浴す、否新に之を感得しぬ、時に午前十一時洋傘を杖とし憩ふこと少時、再行を起す。

天傳ふ日はてらせども日金山篠ふきわたるあらし寒けし
あはれ一難綫に去て一難又來る、山頂に達してより四邊樹林なく疊岩なく、滿目蕭條篠にあらざれば茅壺も日光を遮蔽するものなきに拘はらず寒風の吹過する處、霜雪凝結して巖の如く、履屐の觸るゝ毎に鏗々の音を發せしが、今や太陽の送熱は凍雪を融解し泥濘歩すべからず、然れども凛烈なる酷寒は往年八甲田山に幾百の貔貅が悶死せしが如き慘劇に遭遇するなきを保せざるを以て、竊に危惧なきを得ず、脚を沒す泥濘、苦は則苦なりと雖寧意を安むずべきのみと、且慰め行く事半里程、再白雪の皚々たるを睹、時に磊珂たる氷塊を履み、更に復泥濘に艱む時辰正午に垂むとする頃、道側に一榜示あり、For Atami と記し、書く處の指頭我來路を指し、下方に十國峠迄一里と記せり、思へらく箱根驛又遠からざるべしと、行を續くる事半里餘主待ちがほに駄馬の枯草を嚙めるを見る。

はなたれて駒はひとりぞあそびけるこよみありとも見えぬ深山に

又壯漢の馬と共に憩へるに遭ひ道程を問ふ、彼無雜作に幾何もなしと答ふ、再問して仍約二里程を剩し且前途大半登攀なりとの答を得、余は當初十國峠通過後の道路を下降ならむと想像したりしも、事實然らざりしに、今聽く處亦斯の如し、失望せざるを得ず、されど今更後退すべくもあらねば勇を皷して進む、一本杉と呼ばれたる巨杉の下に少憩して、

なづかしと旅人まつか立よれば木ずゑゝゝあるひともと大杉

午後一時を過ぎ稍飢を感じ携帶せる行厨を開きたれど口熱し舌渇きて嚥下すべくもあらねば橘子一顆を嚙みて綫に渇を醫しぬ、凍雪に苦められ泥濘に艱まされ、寒風に虐げられつゝ行く事又半里程、湯河原分岐點を過ぎて又更に約半里程、始めて鞍掛山の頂點に達しぬ、眼下に蘆の湖の紺碧を觀、點々雪を藏せる二子山、駒が岳等其右に連り、左方重疊せる峯巒上に再富士の雄姿を見る、湖畔は是れ余が曾游の地、快云ふべからず、二時二十分

に箱根驛に達しぬ、里程十國峠より三里十町、途次碧眼赤髯の二珍客に遭ふ、一僕を先頭とし缺舌を弄しつつ我來路に向ふ、熱海へ行くものなるべし。

み雪ふみとつ國人ものぼりけむ箱根の山のながめをかしと

（三）

辛うじて箱根驛に達したる余は、疲困その極に達し一亭に乞ひ爐に倚り憩ふこと多時、一碗の苦茗と一饅の牛乳とに漸く蘇生の思を爲し、例の行厨を喫し了りて頓に勇氣を回復しぬ、亭は驛の南端に在り屋後の原野に牝牛を飼養し牛乳を搾取販賣せり、古めかしき竹自在に鑵子の懸れる柴木の焰吐けるさへ珍らしきに、別室に主人帳を繰り娘子牙籌を動かし戔々計算に從事せる、山中の歳末寔に物靜かなり此處より箱根神社へは猶約八町あり、曾て踏破したるの地、威靈ある社頭瀲灩たる湖面、思慕の情禁ぜざるものありと雖も、歸路程二里三十町を算へ時間亦餘裕多からざるに顧み、余は唯一の忠僕たる膝栗毛を虐使するに忍びず、二時五十分前路を取り歸途に就く、七八町の間杉の林道を蔽へり、後は例の枯生なり、鑿々凍雪を踏み膠々泥濘を歩み、鞍掛山に湖光を惜み匆忙鉛筆を走らして之を寫生帖に收め、再相模灘の碧波に迎へられ、左折河原道に入れば逕俄に窄まり等身の篠竹は枝々路を遮り擦々袖を摩り、凍雪は例の如く杖履に觸れぬ、されど幸に泥濘なく勾配亦夷かにして時々山風の轟々を聽けど叢竹の障を爲すあり冱寒の苦更になし。

いははしる瀧のひゞきとまかへてき峯の杉むらわたるあらしを

溪水音あるは是山麓に達したる標徵、余が風聲を水聲と誤れる、蓋牢裡にある者の赦免の夢を睹ると同一心情なるべし呵々。

約一里程を過ぎ、凍雪に別れ篠竹に離れてより、甚しき急下降となり崎嶇の阪路較もすれば蹉躓顛倒せむとし、さらぬだに疲勞せる足子を行るに懶く、遲緩牛歩も啻ならず、さはれ下降の易きは到底登攀の比に非ず、夕暉全く沒せむとして遙に藤木河上流の韡韡を聽き尋で烟靄模糊の間に浴舍の瓦甍を看店頭の電燈初光を放つ頃館に著く。

一浴後主人特製の蕎麥を晩餐の膳に味ひ、疲脚を伸べ此日過る處の大要を手記し、且曩に投函を遺脱せる賀狀數葉を發し、午後九時高樓の絃歌を聽きつゝ夢寐に入る。

元日天氣清朗、瑞氣山市に滿つ、曈朧たる出日は旭旗に新光を添へ、齒朶を吹く微風は

洋々の歡聲を送る、窓外を一瞥すれば新裝せる野兒村孃等嬉々として校門に向ふ。

偶感一首を記す。

心ゆくいで湯の宿にうるはしき年のはつ日のひかりをぞ見る

今朝館主以下取次に來つて改年祝辭あり、客を遇する鄭重感ずべきも弊衣舊袍昨の如くなる余は尠からず狼狽せるのみならず、一々挨拶するも煩はしく彼の雙岡の法師が『こゝも又浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな』と詠ぜると同じ嗟嘆を漏しぬ、茲に番頭余を何者と推量しけむ、恭く來つて曰屠蘇の銚子に結び付くべき熨斗鶴の折方承りたし、と余は是素朴の一書生何をか識るべき、と一笑すれば、番頭苦笑他を謂ひて辭し去りたるは尤滑稽なりき、斯くて半日を無聊に消したる余は髀肉の嘆に禁へず、徑路を取り伊豆山神社に賽せむとし午後一時館を出づ、三たび落合橋を渡り日金道二丁目にて榜示に從ひ左折し、溪流に沿ひ行く事約五町、一部落を經岐路多きに遭ひ、其一を擇み進む事二町弱にして圃園に入り道全く盡く、問はむにも人無し。

おのも〳〵宿に新どし祝ふらむ野山に立てる里人もなし

回歸して別路を取り溪水を渉り行く事約一町、殆人跡なきに至り止を得ず再度後退し、先に過りたる農家に就き道を問ふ、夫妻出でゝ敎ふること深切なり、乃指示せられたる竹林と山上の一巨松とを目標として進み、偶ま一孤屋に入る、就て復道を問ふ、懇に敎へて曰く客宜しく自ら道を求め行け敢て難事に非らずと略方向を指示す、行いて雜木林に入り道亦窮り進退共に惱む、勇を皷して荆棘を突破し更に迂路を求めむとして再び來路に出で茫然たる事少時、考一考時計を見れば二時を過る事已に四十分なり、而して前途約一里餘と聞くを以て强行の危險なるを思ひ此方途を斷念し、落合橋に返り本道を門川に出で、熱海道を取り輕便鐵道に沿ひ千歳橋を渡る、橋は則豆相の境界なり、官道砥の如く山脚風穩かに、近く洪濤の怒號を聽き、遠く積翠渺漫たる洋中に親昵舊知の感ある初島大島、及余が曩に利島と推定し今行人に問ひて手石島ならむと敎へられたる彼の三角島を望む、而して川奈岬は前に眞鶴崎は後に相對して海洋を扼し、中間碁布の三島は恰も警戒步哨せるが如く、之を十國峠に於て觀たる處と比するに、彼は則艶麗細緻是は則豪壯快濶、素より同日に語るべからず、行く事一里餘青年會樹つる處の標柱に導かれ右折す、或は急或は緩な

る阪路を登り點々人家ある處を得、行く事前後約七町、社域制條の掲示を見る、此處を伊豆山神社一の鳥居とす、磴道數百級又華表あり表面數百歩に社殿を觀る、結構宏壯ならざるに非ざれども稍頽廢の傾あるを免れず、地は即伊豆山の山腹にして前面蒼海を望み後方欝乎たる森林は直に山祇の綠髮に連る。

日は元日なり時は晡を過ぐ、賽客跡絶えて松籟寒く。廣前に羽子玩べる兒女三人纔に寂寞を破る。されど後園の梅花は獨滿枝の春を語れり。

きのふ見し高峯の雪のここちして梅のひかりのさむげなるかな

神前に賽し社務所に就き由來を尋ぬれば老社司余が爲に懇に語る、曰く祭神天忍穗耳尊にして上古伊豆の御山と呼び又走湯の社と稱し兩部習合の說起りてより伊豆權現と號し、明治維新後今の名に改む、人皇五代孝昭天皇の創建に係り、仁德帝其他歷代の御崇敬篤く往昔伊豆國三分の一を社領としたる大社なりしが、中世以降神威陵頹舊日の規模なく現在縣社の班に在り、但有志と興復を計畫し昇格の請願中なり云々と金槐集に『わたつみの中に向ひて出づる湯の伊豆のお山とむべもいひけり』とある即此地を詠ぜるものにして湯は言ふ迄もなく伊豆山温泉なるべく、或は熱海をも併稱したるやも知るべからず、社前に貴顯の手栽に係る某樹等あり。

祠官に謝し石磴を下り、一の鳥居より尙直線に下降すること更に五町、伊豆山停留場に出づ、崖下は即伊豆山温泉場なり、是亦曾遊の地思慕の情なきに非ざるも、探勝の日數限あるを以て樓亭の瓦甍を瞥見しつゝ、輕車に駕し薄暮門川に達し六時旅舍に歸る、途上二首を得。

やゝ〳〵に海はくろみて麗はしき夕榮雲そ空ににほへる

山風をおろす峯よりさす月のほそき影こそ寒けかりけれ

風例の如く强し。

二日　曇、時々微雨、暖氣加はる、早天大倉孫兵衛氏の別莊養生園を觀る、門前自然石を建て『いつとても春風たえぬこのさとに遊びてきみがよはひのぶべし』と題し歡むで觀者を迎ふ、園は藤木、千歲、二溪水合流の地に位置し、山を負ひ丘を抱き遠近の眺望を占む、不老莊の飛瀑は高く白布を垂れ、千尋庵の怪巖には奇橋を架す、溪に沿ひ丘を縈りて

道を造る、左視右顧歩々趣を變ず亭榭あり憩ひて以て耳を激湍に洗ふべく榻牀あり倚りて以て清流を掬すべし、丘上廣濶栽うるに奇草珍木を以てす、觀賞多時雨公の妬む處となり踵を回し別路を下れば老杉蟲々晝猶暗く、細流潺々履下に響き、遠に幽谷に入るが如し、眞に是れ天然の勝に加ふるに人工の妙を以てしたるもの復得難き境と謂ふべし、但即今寒氣凜然風物蕭條たるを免れず、夏秋の交に於ける涼味清趣懷ふべし、例に依り一二畫帳に收む。

午後驟雨沛然として來り、須臾にして急霰を降らし又雨となる、三時雨歇み初めて日光を見る、朝來畫筆に親しみ稍倦怠を覺えたる余は、軒下に嬉遊せる兒童、行歩跚蹣たる醉漢の放歌、さては我と同じ心ならむ浴客の往來に催され、又々附近を散歩す。

相模國八十八箇所靈場一番厄除弘法大師は町の西端より僅々數歩の高所、即再昨過りたる箱根道に在り、本堂の額に左の御詠歌を掲ぐ。

靈山の釋加の御前にめぐりきておほくの罪も消えうせにけり

地狹く堂宇亦壯麗と稱し難きも梵淨の境たるを失はず、堂側に一瀑あり清瀧と名く、高二丈餘轟々雷の如く水勢奔飛巨岩に激し屈曲恰も反『く』の字形を爲し壯觀なり、休所にて甘酒を啜り門を出で隴圃の間を過ぎ崎嶇の山逕を辿り危橋を渡り藤木河の上流を溯り行く事約四丁、道盡き谿窮る處亦一瀑あり、不動瀧と稱す、雌雄二條數丈の絶壁より瀉下する狀、練糸の如く素雪の如し、但水量は多からず、傍に不動尊の小堂あれど卑俗矮陋見るに堪へず、名物醉狂庵蕎麥亭結構稍雅致あり、前刻の急雨にや脅かされけむ、憩はむとするに聞として人無く招牌空しく懸れり、一首を口吟む。

なか〳〵に氷れるよりも寒げなりいはほに咽ぶたきのしら浪

瀑其物は特に賞する價値無きも、谿濶く天空開け、多く觀瀑地に免れざる陰森の氣なきを稱すべく、且地の幽邃なる溪水の清絶なる岩壁の奇峭なる皆欣ぶべし、余は是に於て今更勝地の饒多なるに驚かずむばあらず、幸に谷神の暗に誘ふあり危く逸せむとせし斯の目前の靈境を仔細に探尋するを得たり、歸途對岸數十歩を迂回し田畝中に試掘中の鑛泉坑を觀る。

他に散歩地として湯河原公園あり亦好地なり、鑛泉湯たんぽ及繪葉書等を購ひ黄昏館に

歸る、高樓の絃歌は昨に倍し盛なり。

三日　天氣快晴、朝餐を喫し直に車を僦ひ七時二十分館を謝し、門川に出で再鐵車内の客となり『陰ふかき柚の木ばやしにすきまなくなれる其實の色のゆたけさ』と詠じたる往年の遊を追懷しつゝ小田原に著き、國府津を經午後二時新橋に著き家に歸りぬ。

東奥瞥見記（一）

前日思ひ立ちし水戸遊を俄に東北行に變へ用意もそこそこに城南の僑居を出で電車に搬ばれて上野停車場へ入りたるは二月十日の午後八時二十五分なりき、五番出札口に二圓七拾八錢を投して鹽竈迄の乘車券を購ひ九時發車の最大急行を擇まば別に五拾錢を要すと注意され案内所に到着時を質し、さて急行券を求め少時休憩室に佇立しぬ、例の振鈴響き來れば帽の山なだれ袖の海溢るる中に余は疾く車上に一榻を占めぬ、數分の後に來れる學生らしき四人の少年が座を定むる時列車は轢轆の音を發し倏ち余等を闇黑界へ將て行きぬ、十時我孫子に同二十五分土浦に停車せる迄は彼の少年の談話殊に其中の一人が好んで生硬不熟の洒落を連發するを面白く聽聞しぬ。

水戸を過ぎてより滿室靜まり余もうつら〳〵夢路を辿る、平驛近づきぬ深更にて不便なれど同驛にて下車せんなど例の少年等の喧騒する聲に偶乎目を開けば今し煤煙車窓を襲ひ列車は勿來附近の隧道を通過すと知られぬ再び夢うつゝの境を彷徨へる間に幾驛郵をか過ぎけん孤影瑩々たりし明星も失せて四顧黝暝たる十一日の午前五時十分仙臺に著き倉皇車外に出でたる余は先づ六地の皚々たるに一驚を喫し尋で霏々たる降雪を電燈の光に看俄に奇寒の肌に迫るを覺えぬ。

鹽竈への乘換に少しの時間あれば洋傘に降雪を防ぎ俥夫軍の包圍を衝きて停車場前の廣場に進出しぬ、陸奥ホテル、針久支店、遊佐、おく田、安藤、仙臺ホテル、丹六などの旅館左右軒を列ぬ降雪は思ひしよりも纔なり簌々の雪を屐齒に嚙ませて大道を右に行く電燈輝けるは旅館と飲食店なり、一町許進みたる衝點に政岡豆と大書せる大招牌を掲げ燈光晝を欺へ陳列臺には巨人國の註文とも云ふべき進物包の標本に御年玉と書かれたるは此地方猶舊曆を用ふる者多ければなるべし店は通宵開きあると覺しく店員等の端座せるが硝子戸

越しに看ゆ、必定停車場へ賣子を出せるならむなど推量しぬ、道は左に通じたれど夜色暗澹たれば歸りて待合室に暖爐を擁しぬ。

發車は五時五十分なりき黎明の光景空にほのめく窄き車室内に暖爐の設ある道は寒地なり、客は室の半をも充たさざる中に素朴の婦人ありき石卷へ便船の時間など熱心に隣席の洋裝紳士に問ふ紳士は萬里横行の人ならむ答辯毫も要領を得ざりき、岩切にて夜は全く曉け降雪は既に歇み灰色の空に淡紅薄紫の彩雲をさへ現しぬ、遊士の欣幸喩ふるに物なし。

常磐木のもりを殘して見渡しの田つら眞白に雪はつもれり

六時三十分鹽竈に着く、金華山へ御渡りにや松島御遊覽にや、と旅亭の迎接員等が連呼するに余は松島と應へ導かれて鹽竈ホテルに入り樓上の一室に外套を脱ぎ吊鞄を卸して遽だしく炭火を盛られたる火爐に手を翳しぬ、楣間の油畫の富士は俗物なりしが床頭の海邊鶴の軸は無下に惡からずと看ぬ。

此地には珍しき草花の鉢ありしも理なり主人が頃日出京して求め歸れるなりと得意顔に婢の語る、一茶して緣に出で欄に倚り頭灣の景を手册に收め了る時調じ來りし朝食匆々に喫し鹽竈神社へと急ぎぬ回遊船の解纜八時と聞きたればなり。

（二）

松島丸某丸等余等煙霞の客を收容すべき汽船が他の幾隻の和船と共に惰眠を貪れる小灣に沿ひて路は彎曲せり、一橋を渡りて左し、村役場に傍ひ右すれば、はや數十步に鳥居見ゆ額には一宮鹽竈大明神とあり磴道を登り或は坦路を行く、薄雪解けなむとして路面滑かに枯樹聲なくして寒氣袂に逼る炊煙の低迷せる街巷を瞰つゝ行く事二町許にして又鳥居あり東北鎭護鹽竈神社と嚴かに標石を樹つ、右に奥まりて神苑を設く嗷々の啼鳴樹間に聞ゆ飼養する處鴻雁の類か然らずば鷹鶚の族なるべし、社務所等亦此附近に在り、磴を登り皇族下乘の制札を看又數級を上れば石猊幾雙前後衛護を爲し右に玉垣を透し社宇の側面を看る額殿厩舍及仙臺通寶を以て鑄造せりと云ふ巨釜あり、かくして左に樓門を仰ぎ右に唐門に入る。

此處にて參詣者をして履屐を脱ぎ新淨の草履を穿たしむ、淸き甃道を進みて神前に禮し

ぬ拜殿は丹朱色鮮かに本殿は左右兩宮に別れ片そぎ造神々し右に別宮左に神饌舍並に唐門

に傍へる出札所等輪奐の美を極む、文治の神燈は圓體方基の鑄鐵雨淋風打赭色黝然として七百年の古を語り林子平奉納の日時計は碁盤の如き石面に數線を刻し其上一條の鋼を張る、當年先覺の工夫歴々看るべし、他に伊達氏の献燈及數多の石燈列をなし老杉蔚乎祠後を圍み神威を加ふ賽を了り踵を回し樓門下に立つ磴數百級直下大華表に抵るべく即本道なり余は偏に前路を急ぐ陽光面を射し心氣爽快を覺えぬ、發船場に到りたる時正に午前八時船は未だ出でざるやと叫べば出船は九時なれば悠々休憩あれと云ふ、案に相違

して再び街路を散歩しぬ明治十八年十月建設せる鹽釜港修築記念碑は舟狀を爲せる小園に在り、神代に明神煮鹽の功を遂げ給へる靈釜を奉祀せる御釜神社は人家雜沓の間にあり朱の鳥居高く立つ靈釜は嚴に玉垣を繞らして漫に拜せしめず、不老泉前に湛へ別に水道を利用せる噴水あり清泉淙々寒人に迫る、社地の街角に『村井吉嚴翁小池曲江翁墓是より一丁』と標石あり、陸續たる新裝の兒童に尾して何心なく行く、寄生木ある巨樟を珍しと看人に問へば牛石明神の神木なりと敎ふ、右に小學校を看阪路一丁許登れば甘露山慈惠寺と題せる禪刹らしきがありて門の傍なる地藏菩薩の小祠には香煙微かに靉けり、住僧は靜定にや入りぬらむ本堂も庫裡も鎖されて聲なし墓地は又數歩高く背後は畑に續き凍雪地を埋む佳景には非ざれど清閑なり夫らしき墓碑も見えず隣も梵境なれど往きても見ず前路を下り仙台道を行く二井町といふ處に娼樓めきたる宏屋多く見えしが二戸を除きては尋常の商買なりき、若し此處が往時仙城の壯士をして五里を遠しとせず暮夜徂徠せしめたる鹽竈遊廓ならむには其末路餘りに無殘ならずや、浪花節の講席千鹽館の穢きが眼につく。

八時五十分乘船しぬ、舳部の大半を占めたる船室は玻璃窓に外氣を阻て爐炭の火新に燃

えて褥席春暖かなりき、同乗せるは東京の豪商の主人と店員らしき九人の一團と二人の學生なりき、船は定刻に錨を拔き半圓を畫きて小灣を出で看る〳〵山青水綠の鹽釜灣に浮泛しぬ、岸頭に魔の如き黑煙を吐けるは斯の風光明媚の海濱を俗化せむと努力せる築港の浚渫船なりけり、左に屈曲斗出せる斷崖を看つゝ進めば大小の島嶼は黛色を改めて遠く我を待ち取次に起る素波と碧浪とは風情を凝して來つて我を迎へぬ。

（三）

警笛一聲我船の右舷を掠めて松青き島陰に消え去るは石卷航行の汽船なり、船僮指點して曰ふ舳の右方に斗出せる岬角を多聞山とし、其尖端を隔てゝ淡く反對に傾崎せる嶂巒を寒風宮戸諸島とし其中間雲煙模糊の際に屹立せる峻峰を金華山とし恰も今左舷に近づける一島を雛の島とすと、島形細長岸頭に立てる朱の鳥居殊に鮮麗なり。

翠なる浪と松との上に立つ鳥居のあけのうるはしきかな

船は刻々進轉し左右應接に遑あらず、材木岩は一端洞開して巨大なる石門を形成せり岩其物の奇なるに何すれぞ其名稱の爾く俗なる余は觀瀾洞と呼ばむなど思ひぬ、惜むらくは洞を咫尺に看ざりし事を、裸島は名の如く草木なき巖嶼なり、宮戸島稍明白に露れたる時寒飈浪に吼ゆる邊無數の鳧鴨悠々海潮に泛び交々飛翔を試み征客の眼を懌ばしめぬ。

浪きよく松うるはしき島陰にさもおもしろく遊ぶかもどり

友もあらば嬉しからまし松島のしまわにあそぶ水鳥のごと

彼九人の一團が麥酒を拔き蜜柑を剝ぎ嬉語し笑話し洒落互に競へる傍に例の船僮は繪葉書を賣り繪圖を佈めつゝ去來する山島岬角を說明しぬ、一躍して達すべき近距離に碁布羅列せる群嶼を十二妃島とし右方里餘に横はれる一島を桂島とす島は夏時海水浴に賑ふと云ふ、左に扇谷の青嶂峙てば其麓に要島の赭岩浮ぶ、海面に竹柵を繞らして簀立と呼び魚族を誘致す鯛鰡等の漁利最多く若し望むものあれば客をして自ら手網の類を以て隨意捕獲せしむと、積雪皚々たる牡鹿半島の連山を背景としたる鐙島化粧島鞍懸島兜島等概ね形に依りて號けたるが如く小松島石島七福神島二子島と各景を有し趣を備へたれば余等の眼は此島より彼島と忙しく回る間に船は躇躊なく松島灣に入りぬ、前面に月見崎の高岬現れ松島ホテル觀月樓等旅館の海に枕める蜃氣樓に髣髴たり、右なるは五大堂左は雄島落雁峰彼處

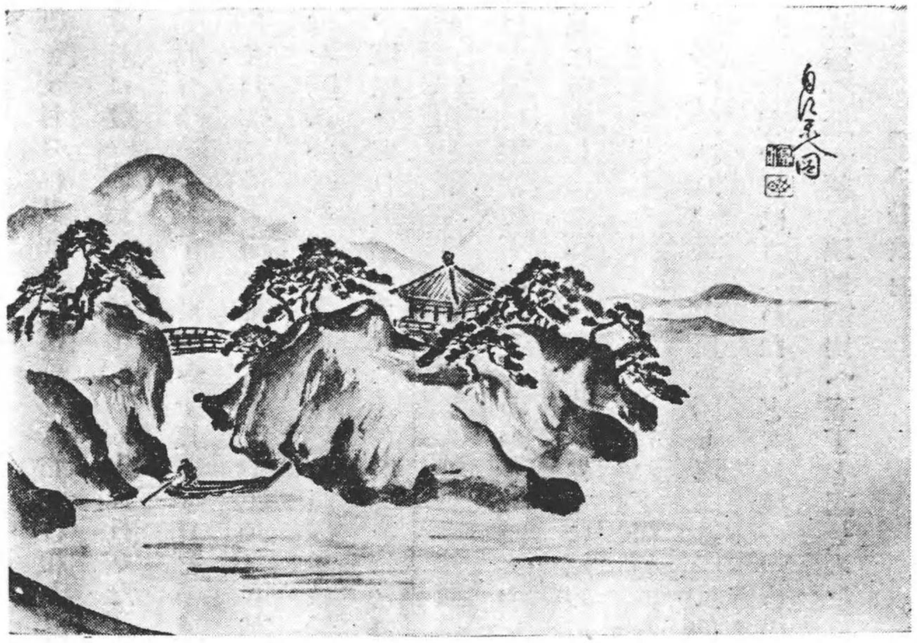
は何此處は何と物馴れたる一人は一々指示しぬ上陸せるは十時三十分許なりけん、五大堂の方に歩み行けば旅館の男らしきが五大堂は今閉鎖しあり觀覽はなり難し瑞巌寺へ案内せんと遮二無二余を導く、然れども寺門を入れば門番所めきたる家あり五十前後の婦人出で來りて丘に傍へる間道に導く劈開せる岩層屏の如く履む處氷雪簌々彼女は幾個とも知られぬ方形の地窖を一々説明しぬ窖は蓋上代家居若くは倉庫の用を爲せしものならむ、壁には又無數の戒名と紋章とを刻し個々方を劃し恰も墓石の平面を見るが如く幾層幾列下地に接し上丈餘の高處に及べり彼女は又一佛一石悉くその由來を語り法身窟に抵りて殊に諄々しく説明しぬ、余は石面に鐫せる吳道子の觀音圖を珍しと看ぬ、中門の額には瑞巌圓福禪寺と題せり縁起など普く人の知る處なれば贅せず、堂廊一見せむとすれば又別に案内を乞へと云ふ余は時間も乏しく記憶も鈍ければ什寶等仔細に見むとも願はずと彼婦人の勸むるを強ひて袂を拂ひ大門を出で海岸を右へ月見岬なる觀瀾亭を埒外より一瞥しぬ亭は古形を存し瀟灑淨清最も地の勝を占む。

（四）

松島ホテルの前を過ぎ道に從つて歩し人家盡る處より雄島の磯を騁望しぬ其景高雅にして幽邃、探勝の念禁ぜざるものあれど獵々たる颷風は酷烈なる寒氣を伴ひ斯好風景到底手冊を披き鉛槧を弄するに堪へず且は半日を平泉の古址一見に割かむ心算あるものから歩を回し五大堂の透し橋を觀望し得風稍穩かなる處に佇立し一寫生を試み岩を傳ひ堂の境地に積雪を踏み一橋を渡り東南を展望しぬ佳景は云ふ迄も無けれど寒風凛烈瞬時も居るべからず、海岸を東し東洋ホテルに投じ午餐を命じぬ樓上より觀る灣の風景亦佳なり、余は館の門前に時間を閲するとき迂濶にも時計の龍頭に懸れる金具を失ひぬ、素より價あるものならねど現に携帶に不便なるものから數回懷中を索り前庭を搜しけるが庭は貝殼白く光りて容易に發見し得ず再三搜索に勞しけるに館の男の容易く尋ね出したる時に取りて嬉しかりき、狂風飄蕩樓も搖がむばかりなれど倚爐安を貪るべくもあらざれば正午少し前館を辭し松島驛に向ひぬ、路は山丘を縈り沼澤に傍ふ枯蘆寒風に鳴り水禽晴空に舞ふ。

春の日はさしわたれども松島の浦わの千鳥聲さむげなり

松島全景一望の地新富山へ五丁と記せるを見き、松島文庫蓬萊亭亦其附近にあり、強風



に外套を翻られつつ河傍の堤道を行く學童の三々五々歸るに逢ふ、家續きの處を高城村本郷と云ふ、駄馬曳ける四十許の女の紺の縁ある編笠戴き背に短胴服樣の蓑蓆を著けたる古畫ならでは見られぬ圖なりと思ひぬ、富山大仰寺道を右に見十二時四十分松島驛に著く道程一里二町と聞く。

驛は觀るべき旅亭もなき僻邑なり北行の發車は一時二十二分なれば待合所の爐邊に地圖など披見しけるが同じく暖を取り居つる一客一籃の鮮魚を小荷物とし汽車に托して次驛鹿島臺へ送らむとし送狀

用紙を交付され其記入に當惑し受付に往復し隣席の某に問ひ更に余に懇請す余も其事に通せざれば逐一驛員に問ひて記入し辛く托送を了れば渠喜ぶ事限なし、他の一人は語る直接驛に托すると運送店を煩はすとは賃金に粗一と三との差ありと。

列車は寥々たる客を載せて雪斑々たる田間圃裡を駛走しぬ、小隧道を經て鹿島臺を過ぐ井字形を爲せる畦畔整然たり松山町を過ぎ成瀬川を渡る遠眺の諸山雪白し、小牛田は鳴子方面と石巻輕便軌道との乘換驛にて稍生氣あり松丘を貫き田野を過ぎり沼澤を望み幾寒郵を經ぬ、石越には挽材工場あり乘客頓に加はる左右丘山近づき地蹙まる、數分を一の關に送り平泉に下車せるは午後三時五十分なりき。

奥羽の鎭城として將た藤原氏三代の治所として繁昌榮華を誇りけむ平泉は思ひしよりも落莫たる寒村なりき、余は東洋ホテルの主人が指定に從ひ此地唯二戸の旅館の一なる高橋屋に入り中尊寺の光堂と衣川の舊跡とを一覽して今夕直に仙臺へ歸り得ざるやと議れば此處は急行車停車驛に非ざれば明朝ならでは上り列車無しと曰ふ然らばとて觀覽の順路里程など質し一青年と要領を得ざる問答を繰返しぬ。

（五）

此時主人始めて現れ一揖して曰ふ、貴客所詮一宿ならば中尊寺の賽を明早朝とし今より往きて五串渓の奇勝を探られよ道は二里許時刻は稍遅けれど案内を付すべければ幸に意を勞せざれと、余が心少しく動く主人切に勸め且曰ふ道路不良にして俥行は却つて艱難なり草鞋を穿ち給へと、余は木履にて險路をも踏破し來りたればと謝すれば、泥濘脛を沒する處もあるべしとて自家の古木履を貸さむと曰ふ、余は主人の親切に感じ且其熱辯に勵まされ遂に探討するに決し乃ち洋傘を捨てて專ら外套に風雪を凌ぐ事とし導者は肩掛を纏ひ提燈を携へぬ、凍雪簌々石礫磧々然らざれば泥濘沓を奪ふ、國衡高衡の館址を道左に看毛越寺の門前より左して漫阪を下り太田河に沿ひ右に勅使館跡と札建てたるを見變化なき一筋道を行く、人にも逢はず降りみ降らずみなりし微雪は此の時全く歇み暮天却つて薄紅を呈しぬ、一里許の處に奇巖かつら岩竝に姫侍瀧あり瀧は太田河の急湍を爲せるものにして平凡なれど傍に暢茂せる栗の大木を雅致ありと見ぬ。

行く事半里、達谷窟に達す華表に古峯山と題せり本尊は毘沙門天なりと曰ふ堂は後半部を巖窟中に沒し蔚然たる古杉前を蔽ひ黝暗陰悽鬼氣人に迫る凍雪に埋もれたる池中には辨才天の小祠寂しげなり本堂に續ける斷岩に彫刻せる巨佛の頭面毀損せるも幽趣あり、清雪を履みて直に本道に出で窟橋を渡り急歩して五串に著きし時日は全く暮れぬ。

五串乂嚴美と書す磐井河の上流にして平泉より二里五丁一の關へ二里六丁なり數戸の民家は道を隔てゝ河に向へり深渓に架せる釣橋を渡りて右し凍氷岩を被ひ積雪跡を藏せる崎嶇嶙峋を下る事數十歩路險にして進む事能はず導者提燈を揭げて嘆息す凝視すれば渓廣濶にして斷岸高く峙ち水は千尺の深底に在るが如くなれども夜色已に至り景朦朧として辨せず唯前面町余の處に素練を垂れたるが如き瀑布と層々奔下する急湍とは猶分明に指點し得らる、佇立霎時恰も弦月薄光を放ち兩岸に壁立せる奇岩怪峭の眞相を粗窺はしめぬ。

水おつる岸べのいはほのぐ〳〵と見えこそわたれ月の光に

雲間もれさしくる月の影はあれど覺束なしや谷のそば道

地は秩父の長諦に似將た木曾の寢覺に類し渓流を夾むで鬼斧神鑿突兀峭立せる堅岩の或は斗出し或は横斜し臥龍の如く嘯虎の如く重疊又磊落形狀の妙を縱にせるに加へ瀑布の偉

觀を添景とせる點に於て彼に勝れるが如くなるも溪流の屈曲變化少きを以て却て遜色あり と云はむ歟、ともあれ仔細に觀覽し得ざるを遺憾とす。

此地又櫻樹を以て著れ仲春花雲爛漫たるに方りては遊人群を爲すと云ふ、探賞未だ竭くさざれども踵を回し故ら行數歩を岐し一店を襲ひて茶を求め洋燈光微なる邊に駄菓を嚙み眼前の飢渴を醫せば頓に疲勞を覺えぬ。

頭邊に吊せる小さき籠の如き物を何なりやと問へば『ゴンビ』なりと答ふ正しくは權兵衛草鞋と稱し尋常草鞋の上に更に是を穿ちて足の前半を被覆し防寒に兼ぬるに防水の効ある前世紀式カバーとは知りぬ、かくて淡月を負ひ牛歩を運ぶ事二時間餘平泉稍近づける時寂寞の天地に洋々合唱する讃美歌の如きが拍手と共に聞えぬ、導者は新春賀宴の謠曲なりと云へり。

（六）

九時に垂むとして旅館に歸れば主人迎へて犒ひ且つ探討能く其勞に値せりや否やと問ふ余莞爾として佳景尤賞すべし行歩の苦の如きは較するに足らず、と答ふれば渠喜色あり、尋いで明早天中尊寺往詣の事を主人と議し型ばかりの入浴と晩餐とを取り十時寢に就きぬ。

十二日　快眠纔に覺むれば時刻は已に可しと促され結束して出でぬ六時半許なりけむ、凝霜を履み寒嵐を吸ひ先づ毛越寺に行く、圓隆寺南大門大泉池等の址を過ぎぬ芭蕉翁『夏草や』の句を石に雕せるが舊苔人の拂ふなく雨打雪蝕に委せり。

本堂も庫裡も未だ銷されあれば訪はず、徑して右に進む、凍雪地を封じて七百年の跡を藏し枯草霜を帶びて馮弔の袖轉た寒し無際の鏡面に清雪を浮べたる舞鶴池に當年佳麗の粉黛を偲べば汀畔に矗立せる老杉は昔ながらの翠を觀しぬ、常行堂の跡法華堂の跡觀自在院の跡と舊跡は隨所にあり『前鎮守府將軍藤原基衡室安倍宗任女墓仁平壬申年四月二十右日』と刻せるがありき、畦畔を過ぎり保勝會修築と記せる阪路を上下する事數町一び鐵道線路に傍ひ街道を行く事更に町餘にして中尊寺の外門なる黑門に達しぬ、橇車入るべからずと制札あれど雪は木履をも埋めず、薄墨櫻と銘打てるがありき、急阪二町許左に辨慶堂を看稍平坦となる一二民戸も見ゆ本坊は右側に在り堂は近年の建造と見ゆれど稱すべき程の結構にはあらず、寺務所を敲き光堂一見を求むれば恰も洒掃に從へる好翁答へて僧衆未だ登

ちず暫時入りて待たれよと曰ふ然らばとて板敷に倚れば重げなる火鉢曳き出して侑むる程もなく僧は來れり直に導れて寶物庫に抵りぬ、平泉の古繪圖を首とし國寶數點並に幾百の珍品を藏せり、辭して金色堂を見る所謂光堂なり中に三尊二天六地藏の諸尊を安置す皆製作の妙と色彩の精とを極めたり、堂の莊嚴美麗なると其由來とは偏く人の知る處現に金光眼を眩しぬ近年椽の一列と戸扉の數枚とを修補せりと聞けど毫も其痕跡を露さず工匠の苦心如何ばかりなりけむ唯鐵棒の支柱を添加せるは保存の爲止むを得ざるに出でけむも堂の品位を損ふ事尠からざるを惜むべしとす、覆堂は北條貞時執權たりし某年の建造に係ると云ふ金色堂の今日ある實に此覆堂の功多きに居る昔人周到の用意思ふべし。

更に經藏辨天堂毘沙門堂と巡覽しぬ藤氏奉納の最勝王經曼荼羅宋版一切經等眼を止むべき物多かりしかど匆々に辭して歸り辨天堂の邊より衣川の古戰場を騁望しぬ、辨慶最期の場所龜井六郎の邸址はた何と導者具に指點しぬ、一山前に聳ゆるを束稻山とし、北上川山を回りて左より流る山は古昔櫻樹の名所にして西行上人が『聞きもせず束稻山の櫻花吉野のほかにかゝるべしとは』と詠じたるもの然れば川を櫻川とも呼びしと云ふ懷古の情轉た切なり。

はたら降れる束稻山の白雪を櫻にかへて見るもなつかし

歸途街道に沿へる猫間淵柳御所伽羅御所等藤原氏一族の館址を看る、古圖に據るに往昔平泉の中樞たりし地は現今の北上川流域にして當時河流は東北に數町を隔てたる山麓にありしが次第に西南に移動せりと知られぬ。

旅亭に歸り熱飯と沸汁とを滿喫し昨來案内の勞を主人に謝し倉皇上り列車に投じ平泉驛を發せるは午前八時四十分なりき。

（七）

雪は例の降りみ降らずみなり山丘田野驛邑と交々送迎すれど景は既に眼に熟せり品非沼には輕舟快く走る沼を隔てゝ巍峨たる嶂嶺の參差として竝列せるが一奇觀なりき地圖を展ずるに七竅峯と記せり沼は原渺々海の如くなりしが先年疏水の功成りしより周圍多く良田となり湖沼今の如く縮少せりと云ふ、忽ち見る一水隧道を出で東に流るるを、叙上の疏水路とは知られたり。

十二時二十分仙臺に著き晝餐を針久支店に取る一皿の天麩羅甚だ美味なりき少憩の後腕車を儆ひて市中巡覽を試みぬ、薄日光日映く粉々たる微雪袂に散る車夫の懸けむとする幌を拒みて我は早くも東北人となり濟しぬ、元來北地の雪は東都のそれと異なり毫も融解浸潤の虞なく縱令衣袖を白盡するとも一振容易く除去し得るを以てなり、然れば雪を拂ひ日射を避け觀光の眼甚忙はし。

躑躅が岡は地稍高く東西一丁南北三丁許平坦なり園内に釋尊の小堂在るを以て土人は釋迦堂と呼べり。老櫻數十百株風流藩公の經營を偲ばしむ。

名には似ね躑躅が岡に白雪のふりし櫻の木ぶりをぞ見る

園の南端に唯一株の楓樹及前の第二師團長後の臺灣總督なる佐久間將軍の碑ありて遂に一株の躑躅も無し古來然なりと云ふ思ふに躑躅が岡は著名の地なるを以て藩祖經營の時其の名を襲ひしか然らざれば此地が眞に古の躑躅が岡なればなるべし、園の東に歩兵第四聯隊の營舍あり原園の一部なりしと云ふ、西側には仙臺第一と稱する旗亭梅林あり門高くして王侯の邸第の如し、余は園を南に出で兵營の背後に宮城野の原野を瞰下しぬ今練兵場なりと聞く車は右に巡り煉瓦造の東北學院を看せ細き雪解道を行きて伽羅先代萩の主人公なる忠婦淺岡の墳墓へと導きぬ淺岡は三澤氏初子といへり伊達氏二世忠宗室德川振子のと刻び瀟灑清淨建營の規模相如く蓋し近世の工なり縷々として絶えざる香烟に萬人追慕の程も知らるれば余も一句を供へぬ。

くゆり立つ香よけてげり春の雪

折柄の粉雪ばかりを手向かな墓地は日蓮宗の本山孝勝寺に屬す、本堂の傍より逆に大門を出づ、行く事數町徒歩の幼女三人一人は花を一人は菓子を一人は位牌を捧げ次に死兒の曠衣と覺しきを以て覆はれたる小棺を力なく老爺の負荷し十數の會葬者を從へ行くに遭ひぬ。地方の葬儀としては備はらざるものならんも儀式の異なれるが哀にも眼を惹きぬ、國分町は東北に通ずる本道の中央に位し豪商巨肆軒を列ぶ、芭蕉辻には仙臺人の誇りとせる古建築を存せり白壁黑瓦城樓に擬ひ龍走り魚跳る瓦磚の製作生氣あり朱碧の美なく金玉の麗なしと雖も恐らくは江湖稀に睹る處此種建造物中尤推賞すべきものならむ。

櫻が岡は市街高地の西端に在り此處も櫻樹に富む戰役に斃れたる軍馬の碑ありき、藥研

の底を流るゝが如き廣瀬川を挾むで青葉城と相對し眺望佳なり唯地の狹少なるを遺憾とす青葉城には第二師團司命部を置けり樓堞多く毀たれて僅かに大手門を存せりと雖も山高く地濶く蔚乎たる森林後を蔽ひ一見兵要の地と知らる、天主閣の跡に征清及征露戰死者の招魂碑を立てたるが分明に看取し得られぬ、山麓は即城の外郭にして往昔諸士の邸宅を構へたる處其處は白石公の彼處は水澤公の其右は松前重光のなど車夫は指點しぬ。

余は又車に身を委ね偕行社伊達安藝舊邸市役所縣廳と巡覽しぬ。

（八）

縣廳は舊時の藩黌養賢堂にして今も伊達氏の有に係り門前宇溜の下三つ引の紋章を鑄出せる銅桶を備ふ、屋宇庭園之に準じ古雅を存す傍に警察本部物産陳列所等ありき、東一番丁は雜沓殷盛の地割烹遊觀場等簷を接す柳暗花明旦暮粹客の喜ぶ處なるべし、活動寫眞の流行は此地も盛なりと覺しく過ぐる程四個所を數へぬ。

青葉神社支倉六右衛門の墓等尚尋ぬべき所多々なれども時間乏しきを以て停車場に歸る大町通に名產埋木細工の商舗ありき。

汽車は午後二時五十八分に發しぬ、廣瀬川を渡りて青葉城に別る名取川も同じ程の流なれど砂磧廣やかなり、末は廣瀬川を合せて海に入るなり、長町增田岩沼など幾驛邑を過ぐ街道は常に右窓に沿へり白石驛は白石川に傍ふ鎌先溫泉へ一里三十丁など記せり、余は白石噺など云ひ馴れたれば『しろ石』と書けるを可笑と思ひぬ、積雪皚々たる列嶂右に近く見ゆ越河の邊山逼り地窄りて谷底を行くが如く雪覆の設數所に及べど積雪はさして深からず、然れど麗日面を射たりし車窓又復微雪を降しぬ宮城と福島との縣界標も見えき。

列車は山腰を駛りぬ右眼前に峯嶺峙ち左遙に連山の項點を望む、積雪漸く著しく景刻々に改まる、丘陵層を爲せる處大條幕を陳ねたるが如く、畦壠相連なる處細線衣縞の如く枯林竹叢蔬園菜圃或は虎彪の文を爲し駿馬の斑を示しはた白地の浴衣の如く草屋根は宛手霜降羅紗に似たり。

一つらに積れるよりも降りのこりあやある雪のおもしろきかな

余が賞翫や天に通じけむ六花頻に舞ひ丘山も田野も看る〳〵皚白と變じ桑折を過ぐる頃は咫尺も辨せざる吹雪となりぬ、伊達驛にて汽車を降りしは五時十分なりき、紛々たる雪

花を浴びて電車の待合所に抵りたれど何時車の來るかも知られず降雪は稍衰へたれど寒氣烈しければ人に問ひて泥濘道二丁許歩み長岡町なる發車場に抵り待つ事十數分漸く身を車中に投じぬ、斯くて我電車は曩の停留場を過ぎ鐵道線路を横ぎり緩徐なる阪路を一直線に快走しぬ、斯く停車場と僅々の距離に軌道の敷設ありて連絡の全からざるは鐵道降車客を眼中に措かざればなりと云ふ、車中には美妓を携へたる粹士もありき、霏々たる風雪は暗澹たる夜色に包まれ飯坂へ達したる時は戸々の電燈燦然たりき。

繁華なる阪路少し行き深溪に架せる釣橋を渡る溪は摺上川なり浴樓櫛比溪に枕む、余は平泉にて指定せられたる赤川旅館を訪はむとすれば此處は湯野なり飯坂ならば彼岸よと教ふ教へらるゝ儘に又橋を渡り川に沿ひて右に行く旅舍とも思へぬ家あり果して妓樓なり凡て九戸若葉町遊廓と稱するもの是なりと云ふ瀧の町は平坦にして商賈軒を列ね縱横道を通せり浴場は云ふ迄もなく隨所にあり、町盡きて尙數百歩風雪に曝されつゝ行き左に阪路一丁許下れば右に逕ありて急阪を爲し浴場らしき一郭を認めぬ、積雪を踏みて溪邊に抵れば浴樓は竝むで彼岸に在り、煌々たる電燈はあれど戸は皆銷されたり、余は橋をも渡らず大音を揚げて赤川屋は何れぞと呼ばはれば内に聲ありて右の詰よと應へぬ、即ち此岸なりき往きて戸を敲き一振鵝傘を捨て鶴氅を脱し直に樓の第二室に導かれ一茶して温泉に浴し心神忽ち爽快を覺えぬ。

（九）

泉質は無臭鹽類泉なり即今閑散季なればなるべし客は多からず浴後長火鉢を擁して晩餐を取る大形の女夫膳炭火上の肉鍋遊士をして漫に家郷に在るの感あらしむ、蔬菜の乏しきにや肉の混和物として氷豆腐を用ゐたり、座に來れる婢の辯舌流暢客を待つに馴れたる何れは京洛の産漂泊の子と知られたるが余が漬菜の硬くして酸味あるを語りたる時そは貯藏の久しき間に起る變化にして當初は毫も東京と異なることなしと說きぬ渠は果して東京人なりき、溪聲を聞きつつ寢に就かむとするの時若からぬ婦人の音聲にて醉舌饒々野卑なる言語を弄するが聽えぬ。

谷水に洗へる耳ぞいとはしききたなきことよ聞えざらなむ

二月十三日　降雪昨の如し拂曉廓に出でて皓々の美景を賞すれば忽地指頭の凝凍を覺え

ぬ、朝食後爐に倚りて少時暖を貪る壁に大雄山雪巖師の賦せる一絶あり曰く。

『山川風景富　此境涌靈湯　來浴四方客　優遊洗病腸　時甲寅七月』と此の半俗半仙の地眞に高僧の遊に適せしや否や。

九時館を發し赤川溪に傍へる捷路を取り歸路に就く釣橋高く架せるは第二師團衛戍病院に通ずるなりと云ふ。雪に阻まれて探勝意の如くならざれば十綱橋の傍にて乘合馬車に駕し福島へ向ひぬ、巷街一町許丘山に傍へる漫阪を下り左に田圃潤けたる坦路に出でぬ源判官の忠臣佐藤氏兄弟の遺物を藏せる醫王寺及大鳥城趾等此附近なりと同乘の鄕紳は敎へぬ刻刻降雪烈しく亂れ撲つ飛蛾に車窓看る〳〵素帛を蔽ひ天地冥濛たるに佐野源左の騎りけむも斯くやと思はるゝ瘦馬を馭者は用捨なく鞭てど積雪道を塞ぎて車の轍動もすれば回轉を輟めむとす、余は車行の斷えむことを憂ふれど春の雪なれば然る懸念なしと皆平然たりき三十町許に上松川橋といふがあり役夫等の除雪に忙はしき霎時を疲れたる老驥は快げに休息せり、雪は次第に衰へぬ又一里許にて福島に著き陣場町萬世町など過ぐ福島座農工銀行など見ゆ警察署前に馬車を舍て停車場へ行く『信夫もじ摺手巾』の看板珍らかなり東京への發車十時五十分と聞きて倉皇乘車しぬ行々安達原舊跡黑塚道等記せるを見き、遠山近岳右に送迎す二本松を過ぎて降雪歇み本宮以南稍暖を感ず巍々たる安達太郎山に睥睨せられつゝ數驛を過ぎ郡山にて再び降雪をみる笹川須賀川鏡石矢吸等到處木材と薪炭と堆積せる中に須賀川は瓦と石材と亦多かりき、日光淸輝にして例の微雪窓に散る時舊觀依然たる白河の城壁を望みぬ白河の關趾は何處ならむ夷然たる山丘枯茅氈の如く靑松紋に似宛然土佐繪を見る心地しぬ、山岳降り竭して布を引けるが如き久慈の淸流を看る積雪全く絶え麗

日和煦氣節俄に春に回る、松林蔚たる豊原茅茨刈らざる黑田原豆粕堆き黑磯皆曠原中の寒驛なり積雪皚々たる那須嶽は嶺頭既く暮雲に鎖さる。

西鄕須野には篠竹木材等山と積まれたり猪苗代のにや東方遙に送電線見ゆ矢板驛活氣あり片岡は石材多し氏家にて乘客俄に加はる斯くて眼眸漸く疲れ暮色亦至り窓外の景觀るに懶く車内調理の晩餐に飽き榻に倚りて茫然たる間に列車は上野に著きぬ七時四十五分なりき（終）（大正五年稿）

外房紀遊（一）

初日　發途より洲の崎まで

外房の周遊に煙霞の清慾を充たさむとし先づ水路館山に抵らむとせるは丙辰の臘末二十八日の初更なりき、輕囊孤傘將に門を出でむとすれば朝來の强風今し烈風と爲り戸牖鳴り沙礫飛び、汽船の發航覺束なく假使發船したりとて航海の平安期すべくもあらずと常住の窩廬に悶々の一夜を送り夢魂既く旅程に上る間に風伯の怒號息み寒雲全く斂まりたる二十九日の曉天は來りぬ、裝を治めて靈岸島なる東京灣汽船會社の發着所に抵りしは午前六時三十分なりき。

殘燈影淡く只今點火せりと見ゆる爐炭は寒風に煽られて靑焰を吐き場内未だ空席多しと看る程もなく乘客充ち滿ちぬ。

船は七時を過ぐる五分に錨を拔けり、爽かなる汽笛は淸朗なる天空に響き麗かなる朝暾は瀲灩たる海波を射る、余は舟行の寒を怖れて乏しき懷中より二等券を購ひたれば型ばかりの火爐は備へあれど窓戸の間隙より潛入する寒風は往々骨を砭す思しぬ、試に舷側に出で凛冽なる瓦寒に脅かされ倉皇室に回り北條町なる菓子舗秋月堂の廣告の人待ち貌なる傍に爐を擁して新聞紙を披ける時三人一連の紳士に訪はれしが次いで船員來りて別室に拉し去りぬ渠が知已なるべし。

我船は幸洋丸と稱す排水量二百噸許、速力九浬半なりと云ふ、進路を申位と申酉の間に取り漸次午未より巳位に轉し眼界亦漸く濶く當初模糊たる三田臺を隔てゝ幾かに嶺頭を現しゝ富嶽は刻々鮮麗を加へて次第に全體を露出する時恰も一客の移り來るに會ひ始めて無

聊を免れぬ。

羽田燈臺下を八時十分に過ぎ幾多長汀曲浦に眼を駛せ些の動搖をも感せずして觀音崎を出でしは十時頃なりき、金谷、加知山、富浦と數度停船する間をうつら〳〵睡魔に襲はれ大武崎を廻る頃起つて舷に出で更に甲板に上り海風の冷と麗日の暖とを併せ享けつゝ咫尺に迭迎する斷岩危礁を觀賞しぬ。

舟形、那古、北條と到處貨客の排出に時間を費して館山に着きしは正に午後零時四十分なりき、折柄の干潮に我艀舟と高低の差甚しき棧橋へ貨物を足掛りに辛く躍り上りたる余が姿勢いかに可笑かりけむ。

館山の市坊は蕭索として年の迫るを知らざるが如く氣候は和暖にして已に春の來れるが如し、沖の島と鷹の島と余を顧眄するが如き菱花灣頭の風光に曾遊の記憶を喚起しつゝ官道數町を歩して松岡樓に入り午餐を命ずれば樓婢遽に戸を排き室を整ふ、されど客の皆無なるにはあらで門に俥を待たせたる豪遊の士も見えぬ、後庭に連れる田圃に小禽の飛舞せる閑にして雅なり。

あたゝけき日影をうけて冬枯を知らぬ岡へに小鳥立ちまふ

二時樓を辭して汐見に向ふ發途先づ數町を迂して館山公園に抵る、地は丘を爲し芝苑數畝を設く金毘羅權現の小祠及古碑碣數基竝に日清役戰死者の碑等あり、唯稱すべきは園の一端よりする鏡浦の眺矚のみ、官道に出で町衒に傍ひ見留橋を渡る軒簷竝ぶこと數町柏區豊津公園など記せるを看き、汐見に至りしは三時頃なりけむ、有名なる臥龍松は官道より數十歩右せる處にあり翠蓋徑十間許老幹古枝縱横起伏し蜿蜒地を匍へり臥龍の名洵に虚からず、又其枝幹蟠欝して一見其根の所在を知り得ざるを以て別に根無松の稱ありと云ふ、傍に臥龍亭あれど客も主人も見えざるは風雲の時機をや待ちぬらむ、境を接せる沙堆に大小幾個墓石の竝立せるが甚しく寂莫の感を與へぬ、本道に還り南して洲の崎に向ふ旅館汐見館其附近にありき、行く事十町許鉈切船越神社は道より一町餘入りたる丘腹に在り祠宇を岩窟内に設く地形狹隘氣味幽陰なり往昔此の海濱に漂着せりと謂ふ獨木舟を寶庫に藏せりと聞けど時刻遲きを以て觀覽するを得ざりき磴の下匠氏の工作中に係る木材の散亂せる間を官道に還り再び南行しぬ、道路凸凹甚しく民戸稀に行人亦尠く時に海色の愛すべきは

あれど夕陽漸く沒せむとし行歩轉た忙はし行く事一里許右に十數戸の一部落を見又十餘町を馳せ黄昏洲の崎に達しぬ、洲の崎は洲の極南に位せる寒村にして洲の崎神社及古刹養老寺あるを以て知らる神社は道より數百歩の丘上に在り北に山を負ひ南は道路と田野とを隔てゝ外洋に面し直前に伊豆の大島を展望す、一息して神門を入る一の宮の標石あり石階約百級隨神門等あれど境地廣からず、賽を了りて門前の亭に就き今宵宿すべき處を問へば此地には旅舍なし布良へは程三里にして山腹と沙濱との二路あれど夜を冒して行き得べくもなし唯汐見へ歸る一途あるのみと曰ふ、幸に上弦の月の出づるあれども獨行の危きを思ひ提燈を購ひ得ずやと問へば僅に自家用の物を備ふるのみにて客に給すべき物なしと曰ふ、余は詮方なく社務所に一宿を乞はむかと諮れば彼の社務所は我か母留守を預り居れば寢具などの事缺かぬを知れど妄に旅人を宿せしむるを得ず、貴客の窮迫は察するに餘あり願はくは管理の當務者たる區長某氏の允許を得られたし其上にて貴需に應せむ某氏の家僅々一町の處に在りと、余は其言に從ひ某氏を訪ひ刺を通じ委さに來意を告ぐ某氏は雜貨を鬻げり顧客相次ぐ霎時にして主翁本館より來り問答數語遂に許諾を與ふ、余は溺者の舟を得たる心地して先の亭に到れば亭己に鎖されぬ乃ち社務所を訪ふ彼の婦欽然たりき、暗燈の下に途上の吟を記す。

夕榮は浪をこそやけ富士のねのゆきのみ顔に雲おほひつゝ

斯くて陶碗に盛れる羹、腰に達せざる湯浴に搗てゝ加へて柴火の煙に咽びながら主人母子の深情ある待遇に快く一夜を眠りぬ。

第二日　洲の崎より白濱まで

三十日快晴　爽に起き神門下に佇みて海洋の觀を壽帖に收めぬ、社は西に向へり正西に屹立せる富嶽の秀麗は言ふも更なり大島は近く未申の間に横はりて鮮かに三原山の噴煙を示し遠く碧波を隔てて豆相の山嶽を展開せる中に天城山の奇峭は崢嶸として他を壓せり、渺漫たる大平洋を馳走する汽船は螻蟻の蠢動するが如く去來の白帆は暗夜の群星に髣髴たり。

大島の烟ますくに立ちのほりにはよき海にしら帆數見ゆ

朝飯を喫し厚く主婦に謝して社務所を辭す主婦送りて養老寺の賽を勸め進むで嚮導を爲

しぬ、寺は西に一町弱の處に在り現今甚しく頽廢せり、主婦は曰ふ洲の崎神社と此寺とを此地六十餘戸の部落にて負擔維持し居るを以て修理意の如くなるを得ず唯海產殊に採藻の利の豊なるあり毎年優に二千金を醵出し得と、境内に觀音堂あり御詠歌を掲ぐ。

觀音へ參りて沖をなかむれはのほりくたりの船そ見えける

と恰も余が曰はむと欲する處を叙せり名高き一本薄は枯莖蠹々寒風の吹過に委す、後方丘山の岩窟には役行者の銅像を安置せり往昔行者大島に謫せられし時海

波の上を歩し來りて土人を教化せりと荒唐笑ふべしと雖も此地大島に最近し風化を享けし事偶然ならざるに似たり、山丘を傳ひ再び洲の崎神社に詣し磴を下りて社務所を過ぎり官道に出で行く事數町人家稍密なる處を川奈と曰ふ、村は西岬に屬す畝間田宅到處疊積せる束藁に大小數個の石塊を弔れり。

吹きみたす濱風を佗ひ稻村に石のおもりをつりやしつらむ

伊戸區八坂神社幟小屋、伊戸青年團と記せるを見數町を行き右に田圃を徑し小阪を下りて海濱に出づ、濱を平沙浦と稱ふ沙濱二里許洶湧たる海波右脚に逼り左方堆沙に接きて丘阜相連る、風浪花を散らす汀渚は幾多曲折ある弧を爲し弧端淡く一抹を拖ける翠巒の突端を布良の海驛とす、首を回せば洲の崎の丘山依稀として我を送り風景鮮奇なり沙濱行く事半途にして顧望再び富峰の麗容を來路の岬角上に看る。

あまたゝひ顧みらるゝ富士のねに歩みおくるゝ磯つたひかな

佳景行人なく遭遇する者漁翁蜑夫の輩のみ。

浦のあまの渚に鱸つる見れは糸もて浪をたゝくなりけり

這好沙濱素と道路ならざるを以て屢小流の横ぎるに會ひ或は辛うじて跳踰し或は裹衣渡渉を餘儀なくせられ頗る狼狽しぬ迂回して木橋を渡れる巴河を川流の最後として沙濱茲に盡きはや布良に來りぬ、漁舟岸に列なり漁莊蜑戸鱗次して丘阜に倚る磯石を縫ひ垣牆に傍ひ行く事數町海水斗入して小港灣を成せる處を合の濱と曰ふ水難救濟會の出張所看ゆ、港内巉岩刪立して鋒刀を樹つるが如く纔かに舟艇の通ずべき一直路を辟く蓋故人の努力尠からざりしならむ、富峰の秀姿は此處に來つて愈其妍を加ふ佇立顧望飢渴を凌ぎて鉛槧を揮ふ時に午を過ぐること三十分なりき。

阪路を登りて官道に出づ土藏造の郵便局、富崎小學校、富崎役場等見ゆ學校には大山元帥揮毫の日露戰役記念碑儼として立てり、餐を吉野屋旅舍に取り樓上より乾位に復富嶽を觀賞しぬ、即今宿客は畫人に限り現に青年畫家數名滯在せりと主婦の語る時三脚と紙布とを携へて渠等畫家は快然出で去りぬ、午後二時再び行を起す市坊二町許磴垣宮宇新なる神祠を布良崎神社とす東國鎭護の四字を社名に冠せり、辻に設けたる凝灰土造の池井壯大なりき、路は山丘に傍ひて蛇行す沙礫歩々行歩に佳ならざれども右方積水の汪洋たる或は怒濤の白雪を碎く或は礁岩の奇峭なる若くは沙洲の清灑なる絶えず眼眸を歡ばしめぬ。

富崎神戸村を經て館山に至る約三里長尾村根本と標せるは岐路ある處なりき、白沙清らかなる鎭守の社地には例の大山侯の題せる日露戰役記念碑立てり、いつしか海岸を離れ眺矚を失ふ、根本小學校其の傍なる歩兵伍長某の碑及尙齒會建つる處の某氏の碑等目に觸れぬ、里落皆瓦を以て屋を蓋ひ殆ど茅簷を見ざるは漁撈の利多くして住民悉く富裕なるにや將た草茅の乏しきにや、道側到る處土産の輭石を以て外側を造り地藏尊を安置せる珍らかなり石造の長尾橋を踰ゆ左に豊房村神余に抵る道あり坦道砥の如く丘山綿々として左眼を蔽ひ海光は里落を隔てゝ右眸に入り來る、四時白濱村に入り野島崎の燈臺を右方數町に看る地廣がり田野開け民口稍繁し旅館は岩目館外一二を數ふ、余は程を貧り行を續けぬ、宏壯新潔なる小學校舍、村衙、漁業組合事務所等眼に入りぬ。

禪刹三峰山杖珠院は官道を左に徑する事約三町の處に在り里見氏中興の祖義質朝臣の開基にして寺號杖珠院は朝臣の法名を取れるなりと、寺境は現今甚しく野化し山門牝牛の嘶を聽くの變態を呈せりと雖も里見氏三代の墳墓は近年有志者に依りて修理せられ鐵柵を以

て圍み擬岩を以て固め等を加へ清淨にせり、中に大半埋沒せるさへある三基の古塔に當年の雄圖を偲び追懷に耽れば住僧來りて余を犒ひ且つ曰ふ此地里見義實の舊跡にして今も館の前と稱ぶ處ありとあはれ人疲れ馬汗せし跡やいづこ丘山古を殘して枯林風寒し、庫裡に憩ひ茗を啜り暮に垂んとして辭して出づ道復海に沿ふ『海岸にてイソメ取るべからず名倉區長』と榜せる邊蜑婦の海藻を採れるを見き、電燈爛たる鎭守祠前を過ぎて岡田屋旅舍に投しぬ、地は白濱に屬し字を乙濱と曰ふ。

旅館は森閑たりき、客夢未だ結ばざる午後十一時俄然警鐘を聽く一點、二點復三點乍ちにして亂點急打馳驅の聲疾呼の音相次ぎ喞筒車の轆轤に消防の出動も知られけるが須臾に沈靜に歸しぬ、失火は南方五町許小戸の根方と云ふ處にて三戸燒けたりとは後に聽きぬ、漁船に裝置せる發動機の音響は終宵斷えず。

第三日　白濱より鴨河まで

三十一日快晴、乘合馬車の笛聲に快眠僅かに覺めたるは午前六時半なりき、八時に館を出づ沃度倉庫郵便局等を主とし民戸斷續せる海岸を進み二濱橋を踰り市街に入る七浦郵便局同小學校、烏山先生誕生地の碑役行者の石像等ありき大山侯の書を刻せる日露戰役記念碑は此處にも見ゆ、奉幣式社、諏訪神社、殉職巡査某、水兵某の碑そこ此處に立てり又明輝堂辭世と題せる『春風や曳く杖輕き法の旅』と云ふ句碑もありき、門松に添へたる椰を異樣に感じて。

椰のはを松に立てそへ年待てるあたりに梅のはやかをるなり

曦町に近き石橋を川口橋と曰ふ、忽戸、平館等皆小字の稱なり商賈櫛比人家稠密、館山を出でゝより此處に來つて始めて市肆の觀あり北條警察署曦分署を置ける邊街路を夾むで一を北朝夷他を千倉とす、俗に概稱して千倉と謂ふ。

余は今宵の旅宿を杞憂して玆に俥を僦ひぬ膝馬必しも病めるにあらず只行の遲れむことを念へばなり、川尻橋を踰えて追分を過ぐ左すれば健田村に至ると云ふ、路面俄に凸凹土沙紛亂黃塵頓に揚る往來寂寥或は松林に間し或は田野に傍へり從來過きし處國道なりしが爰に至つて縣道に入れるなり、到處畜牛盛にして牝牛庭に眠り犢牛垣に遊ぶ聞說く明治の初年官此地に牧馬を試み良果を齎らさずして止みしも之に依つて地方に牧畜の思想を起さ

しめ一轉牝牛を養ふの風を生じ現今好個の副業となり家々爭ひて之を飼ひ富家豪戸亦競うて良種を購ひ之を農業力作の家に託して其利を分ち互に益する事大なりと、農の如きは甘藷百合等を產出すれども元來地味磽确其利多からず纔に魚肥の豊富なるを施用して耕作の勞に酬い得るに過ぎず但近年藺草の產出盛にして獨り水田のみならず火圃にも之を植ゑ其利觀るべきものありと、又聞く陸に生長する藺草は青翠の色澤欣ぶべきあれど耐久の點に於て甚しく劣れりと。

瀨戸川橋を過ぎて千歲村に入れば道稍可となる豊田村を經て北條に出づる路ありき、白子に一刹あり金剛院と曰ふ當國四個寺の一なりと云ふ、古川橋を渡り南三原村松田に區裁判所の出張所下三原に郵便局を見あさひ橋を踰ゆ車行三里弱曦町を過ぎてより海を見ざりしが再び風光明媚の海濱に出でぬ、日色和煦身體舒暢沙汀に犢牛の佇立し或は偃臥せる最雅なり車を舍てゝ沙洲に立ち觀勝に耽る、前面には斗出せる岬角に接して和田町の漁肆現れ願望すれば忽戸、曦の丘陵は碧波を隔てゝ煙靄の間に起伏し一幅の繪畫を描出せり。

勝景に憧れつゝ緩步す、眞浦白渚漁業組合の標を見渚橋及むかふ橋を踰えて和田町に入る、和田銀行の招牌燦たりき、新に成れる磴道の一端に戰捷記念の石標を見探勝の心動き攀ぢて磴を上る平地百步許あり一隅に小魚を乾せり鄕社建設豫定地なりと云ふ、鴨川へ三里十八町七間北條へ四里九町三十一間と標せり、落莫たる村邑を過ぎ殉難兵某の碑蟹田川石渠碑等を看長者橋を渡る、花園部落の邊木材の搬出陸續たり丁々の音山に盛なるべし小橋を踰え上根部落を過ぐ獨行稍倦みたる時須貝川橋を渡り江見村西區に出づ、市坊の體裁を備ふ時に午後一時なりき、一亭を物色して餐を命ぜむとすれば急速辨じ難しと辭す去つて蕎麥店に問へば夕刻に至らではと謝す失望して數步を進み市屋竭くる處に一旅舍を得疲軀を投して憩ふ事半時餘肉鍋と冷飯とに口腹を充たして道途の口吟を手帖に記す。

男の子みな海に行けはかをみならのはたつくるらむ物ひさくらむ

汐風の寒きあしたも蜑の子は浪にひたりてみるめ刈るなり

二時十五分復行を起す行く事一里許濤聲再び耳を洗ひ眺望佳なる邊橋あり名馬橋といふ海岸の疎松殊に觀に富む、源判官義經の乘驥太夫驪を出せりと傳ふる太夫崎は即此地なり田間の阪路を一町許登りたる處に觀音堂あり老松二株景を檀にし兼て道を扼し門を爲す遠

眺の雅なりしに似ず湫陋看るに堪へざる堂宇は閉されて人も無し賛歌に曰く『百八個所の内六十番　駒すさむ昔を今にひきかへて御法の聲に手綱とゝめぬ　頭陀宥性』

堂の側背に不動尊の小堂あり賽者多しと見ゆ、山を負ひ溪に枕む、淙々たる飛泉斷崖に懸り磊塊たる堅岩奇趣を弄す、守堂の老尼に問ひて所謂太夫驪の足趾を觀んと、不動堂の後なる石階を上り粘土岩を穿開せる隧道に入る洞高さ七八尺數歩にして平地に出で又一洞あり前者に比して稍小なり洞盡くる處擂鉢の底の如き小地ありて其奥更に洞窟あり高さ丈餘横徑二丈許内に若干の小窟あり洞前巨岩蟠踞し岩面に馬蹄大の凹窪點在す稱して太夫驪の足趾と云ふ、附會の言笑ふべしと雖も海波の遠眺に兼ぬるに怪岩飛泉の奇景を以てす古跡として傳稱し來れる偶然ならざるなり、風景に頓著なき鋸匠は營々として松材を斷截しつゝあり。

千里ゆく駒もいてけむ海山のなかめえならぬ此谷へより

前路に還り亂礁に雪を散らす波浪を脚下に觀つゝ行く事數町海を離れて活氣なき太海村天面の町を過ぐ人家竭きて復海に沿ふ太海小學校の前面波濤跳躍の觀殊に好し海光を玩び山色を賞し行く事半里みわたの里落を右に岐して仁右衛門島を訪ふ道は邱麓に開け突兀たる斷岩に傍ふ矮陋なる漁家の間を迂曲し行く事一町餘一旅館あり地竭くる處鏡の如き海潮を挾むで仁右衛門島と相對す距離近き處一町に足らず客の往訪せむとする者あれば法螺を鳴らして之を告ぐ。

夕しほのさし來る岸に浦人の貝ふきならし船よはふなり

傍なる葭簀店には老壯の漁夫等群居休憩せり穢き碁盤に向ひて烏鷺戰に餘念なきも見ゆ

櫂の柄も朽ちやしぬらむ舟人の濱のまさごを打ちかこむまに

待つ事二十分許にして舟は來りぬ、岸頭苔滑なればと茶亭の媼が注意せる刹那余は飜然舟に移る、さても體の輕き事よと驚嘆す、危礁右を擁し斷岸左に走り波穏かに潮清く巨口細鱗悉く看取せらる、岸に上り導かれて島主平野仁右衛門氏の邸に抵る阪路を登り磴數級を攀ぢ門に入る邸は島中の最高處を占め四方石壁を以て圍み宛乎小城郭の觀あり、且地域甚狹く建築壯ならずと雖も家屋の用材庭園の泉石等數奇を凝らし逸品を蒐め風流寔に愛すべく古雅眞に掬すべし就中自然の假山を形成せる岩石間に暢茂せる蘇鐵樹と金星石の燈籠

とは導者の得意誇説する處なり、邸は往昔丘麓に在りしが嘗て海嘯の災に遭ひ今の處に移せりと云ふ。

島は堅岩より成れる邱岡にして一見廣袤數町に過ぎざるが如く樹木の繁茂せるものなしと雖も丘腹に數畝の菜園を有し叢々たる枯草岩石を蔽ひ四邊屈曲多く周廻實に一里に達し環海介藻の收利最多く所謂磯根の產は無盡藏なりと云ふ。

採りあくる磯ものいかにおほからむ世にもゆたかにとめる島きみ

ちりの世にかけ離れたる島根には冬枯しらぬ草もありけり

島は又景に富めり神樂岩は北部に聳えたる奇岩にして咫尺に辨天島を望み鴨河方面の風光悉く眼眸に入る、源右府賴朝の潛匿せりと稱する岩窟には福女稻荷の祠を安けり縈回蛇行道竭きず勝景亦極りなし、二碑あり蕉翁の吟『海暮れてほのかに白し鴨の聲』及某氏の詠『いつの世にひらき初けむ仙人のすみかにならふこれの蓬島』南西岸に峙てる怪岩を蛇石と名く對岸なる波太の丘麓に鱗次せる漁村の觀殊に絕妙なり丘の左に巨巖の天を衝て立てるを笥山と曰ふ眸を放てば太夫岬、七浦等渺茫たる碧水の上に連る。

島を辭し寒風に吹かれて急歩す坦路數町を過ぎ漫阪を上下する事五町許にて鴨河に入る毎戸已に燈を點せり一廛に堵の如く人の集り居たるは鮮鱗の潑溂を糴賣せるなりき鴨河橋を踰え繁華の地を過ぎ前原なる旅館相模屋に投じたるは五時四十分なりき。

相模屋は近年の建築なるべし宏壯にして淸灑なり一列同型の十數室佳麗にして雅致あり器什も野ならず、粹客の歌妓を聘せるも見ゆ奥まりたる一房に綠眼金髮なる佳人の一團あり喋々として話する邦語の聲調甚奇異なるを以て廊に在る婢等の捧腹絕倒せるもをかし、窓外除夜の景況もなく平靜常の如し三更幽に濤聲を聞く。

都への市のさわきにたくへつゝ浪のひゞきを濱屋にぞきく

第四日　鴨河より小湊まで

丁巳正月元旦晴天昨の如し、雜煮餅に腹を固め主婦の愛嬌に送られて館を發したるは午前八時頃なりけむ、市坊三町許杉崎橋を踰え東條村に入る天津迄三十町と記せり道に傍ひて樹林多し行く事數町賴朝公旗懸松と銘せる古松ある處稱むで待崎と曰ふ源右府此處に軍し使を千葉廣常に遣はし其報を俟ちし處なりと傳ふ、佛刹福性院亦右府の古跡にして名木

の梅を存せり、欝乎たる松林に間まれる道二町餘左遙に丹朱色鮮なる堂宇を看る掛松寺とは後に知りぬ松林竭くる處に榜あり掛松寺三丁を經て小松原鏡忍寺に至る十二丁と、逆行となるを以て往かざりき、此間年賀の士只一人に遭へり天津橋を踰え天津の市街に入る、洋々たる君が代の歌唱天津小學校に起り征人をして思はず襟を正さしめぬ、左に折れて清澄山に向ふ數十歩にして市塵竭く龍尾橋を踰えて漫阪を登る鳥居橋を過ぎてより漸次急峻となる、三町許行きたる處左側數十級の石階の上に波切不動尊の靈堂あり阪本自性院と號せり、農科大學にて造林の爲近年開設せる坦路は右に岐れ蜿蜒として里落に入れり、第一の茶亭空く鎖し第二亭の傍に松野先生紀念碑といへるが立ち碑邊に松樹を植栽せり、內國樹種見本林外國種見本林等の標は隨所に看ゆ樹名も數多記せり。

かなし子と大山すみのめてまさむまたふたはなる谷のなへ木を

登山の道新道は車馬を通ずと雖も迂餘曲折あり加ふるに石礫磊々到底舊道の捷に如かざるを以て余は躊躇せず舊道を進む余と前後して來れる數士亦余に尾す余は此時隆鼻三千丈の思しぬ、道は一び緩漫なる下降となり前面已に清澄の山肆を望む左右谷深く眼界廣濶神氣爽快を覺ゆ、坦路數百歩にして復急阪を登る事數町道右に岐る直行すれば久留里を經て木更津に抵ると云ふ。

日蓮聖人開宗旭森靈蹟と題せる巨碑は道の右に在り、登行更に數町戸々木匠を業とし鋸の音相交はる峻阪攀ぢ盡して始めて清澄寺の淨境に達す時に午前十一時なりき。

山門二王門鐘樓含漱舍等結構壯麗規模雄大を極む本堂に賽して後普く內外を觀覽す堂の正面に摩尼殿の扁額を掲ぐ三寶珠の紋章と菊花章とは堂にも門にも表現せられぬ。

本堂に安置せる延命地藏尊及大黑天の彫像威容壯麗なりき、客殿の門には千光山と題せり銅鑄の寶篋塔石勒の弘法大師一千年供養塔など美觀を副ふ『吹はらふ月清澄の松かせに濱より沖にたつはしら浪』とは十一面觀音堂に掲げたる誦にして日蓮師崛起の朝日堂は東隅朝日森に在り、域內靈樹天を衝けり其最大なるものを高三十餘間幹の周圍四十四尺全國老樹番附の行司に居ると稱する老杉とし次を周圍二十尺餘の巨欅なりとす。

抑清澄寺は光仁帝の寶龜二年不思議法師の草創にして本尊虛空藏菩薩は日本三體の靈像と稱せられ後仁明天皇の承知三年慈覺大師東國巡化の日中興して殿堂佛閣神祠二十餘宇僧

坊十二舍を建て其後代々京師及鎌倉の尊崇厚く以て今日に及び法華宗の祖日蓮師が得度の初此山に學びしは昔く人の知る處にして今尚ほ離塵隔俗眞淨梵の仙地たり。

一息して堂後の險阪を攀ぢ腕を出したるが如き樹の根を踏み路も見えぬ迄散りぼへる落葉を蹴りて摩尼山の頂點を窮めぬ、喬杉空を蔽ひ幽陰寂莫鬼氣人に逼る絶頂に妙見堂あり建築觀るに足る、惜いかな鳴禽聲幽かに人語全く絶ゆ。

山彦のひゝきたにせよ呼子鳥よふに答ふる人はなくとも

此地房總國境群山主峰の頂點にして海拔一千二百七十餘尺の高處に在りと雖も密林眼を遮り眺矚を妨げ纔に樹間より遠近を透見し得るに過ぎざれば直に前路を降りて寺内の亭に土産の木製小器具を購ひ且憩ひぬ、賣店を澄月堂と稱べり掲示して曰く『庵主不在で賣ります代金差入口□』と、余は此超世間的なる書札が自ら賽客に狡譎の徒なきを證せるを嬉しく感じぬ、店主の媼來りて誨へて曰ふ本堂の彫刻法螺貝は左甚五郎の作にして夙に名あり迂濶に看過すること勿れと、余乃ち再び堂下に抵りて熟視す寔に神韻風動せり、裝を繕ひ去つて門前の旅舍に飯せむとすれば屠蘇機嫌の壯者應ふるに主人在らざるを以てすうべ今日は元日なりけり、歸降十數町一亭に入りて駄菓を嚙み番茶を啜り漸く饑渴を免がれ快歩一時間餘にして天津の三叉路に還り午餐を取りぬ。途上の口吟

まきの立つ清澄山の奥ふかくふきわたりけり年の初風

午後二時三十分行を起し岩井橋を踰え工藤吉隆之舊址明星山日澄寺と標せるを一瞥し海肆を過ぎ圃間に出づ、宮前橋に傍ひて新建の村祠左に在り十數町にして隧道に入る長二町許陰鬼を退けむが爲余が乏しき音聲を張りて古歌を吟誦すれば連續して通過する老婦の一隊も得意の俚謠を唄ひぬ。

洞を出で山に傍ひ左轉して海岸に出づ鏡の如き海面を環れる小湊の市坊前に展けて其終端丘山に連る處微かに誕生寺の樓門を看る、彎曲せる市街を行く事七八町旅館清海屋は海に枕み好位置を占む、右して又海に沿ひ行く事數町日蓮聖人御兩親靈廟妙蓮寺清正堂誕生水誕生堂等の標を看る、比屋盡くる處道路に面して大門あり門内平地數百歩甃道を踏みて進む、山門には金剛力士立ち右に鐘樓含漱場左に銅鑄題目碑釋迦佛等在りき、本堂には本化再生場の扁額を掲ぐ鐵製の雨溜は宮中女官方の奉納に係り聖人の廟所龍王院には水戸黄

門光圀卿寄附の三寶諸尊、里見房州義頼朝臣寄附の琥珀觀世音等海内無雙の靈寶ありと聞く。

朝來清朗なりし天空遽に暗雲深く閉ぢ暮風頓に征衣を飜へし驟雨の至らむ虞さへ見えければ踵を回して門前に向ひつゝ婆々の聲鼓を右方の丘頂に聽き危磴數十級を攀ぢ往いて賽しぬ清正堂なりき、運慶作聖人看經佛を安置せる釋迦堂及聖人胞衣の松相連れり。

即今特殊の行事なく寺境靜閑なれども尚ほ詣者斷えず然れども宗祖大士降誕の靈地として遠近に轟けるに比し頗る振はざる感あるのみならず堂宇も稍頽廢せるの觀あり或は既に修營の計圖中ならむか。

前路に還り海灣の風光を賞しつゝ往來の漁叟に明日の天候を問ひ、降雨あらむ、との答を得逆行して誕生寺の門前に抵り茶亭に就て勝浦への馬車を賃せむとせしが數瞬前に發車し了りて復出るもの無しと聞き一宿と決し復又歩を回しぬ、婦女子の海草を採れるあり小刀もて岩面に附著せるを削る翠碧なるは青海苔なるべし紫黑和布に似たるあり『はゞ』と稱び海苔にも製すと云ふ童子等の蛸壺提げて走るに從ひ行く、此地旅舍の佳なるもの清海屋と菊屋となり内容は知らず外觀は清海菊屋に勝れり余は清海屋に裝を解きて外房には玩らしき穩なる海波に對しぬ。

法の風あまねくかよふ港にはなみもはちすの花と咲くらむ

我罪もうつりやすらむ御佛のはりの鏡とすめるみわたに

み佛の誓の船のこゝちしてかひのひゝきのたのもしき哉

旅亭客尠く潮聲耳に諧ひ客衾温かに新年の夢を結びけるが豫期せし降雨は翌る拂曉の枕を襲ひぬ。

第五日　小湊より歸京

二日　微雨風強し、海には波浪に掀飜せらるゝ漁舟危ふげなり、所期せし鯛の浦の探勝は思ひ止まりぬ。

荒浪の立ちさわく日も一葉舟沖へに海士のこきいたすなり

隣室に小孃の泣き叫ぶを父母なる人交々慰め賺し果は館の婢來りて戸外に誘ひ遊ばしめぬ、小さき胸の旅愁察ひやらる。

打ちよする浪の響におとろきてたひのをさな子あはれわめくか

朝食纔に終れば乘合馬車は早我を待つ、狹き車上も苦しき迄客を載せず細雨霏々たれど眺矚の障たらず、湊橋を踰えおせんころがしの邊と聞きつゝ隧道六個許通過して淸海村に出づ右は滄海に沿ひ左は絶壁相連る海は渺々として際なく崕は崔嵬として峻し道路縈回屈折景亦た從て變し眼眸を勞すべき處尠からざれども馬は駸々として進み車は轣轆として回り十時に勝浦に著き同二十五分汽車に駕る、東京は昨日來降雪ありと話する壯者あれば實に此寒氣尋常ならずと和する老人あり果然雪を積みたる列車に邂逅す、正午の時辰を茂原に看荻生徂徠母之墓と標せるを本納に瞥見し大網の分岐點に抵りて始めて降雪に遭ひ斑々たる素白を田畔圃畦に見蘇我驛を過ぎて少時其影を絶ちしが稻毛にて又再び飛雪を見中山を過ぎてより滿目皚々たり兩國に著きしは午後二時半なりき。（終）

刀水遊航記（一）

成東と銚子

八月二十一日雅友聰文素秋二氏と俄に銚子行を約し翌二十二日未明に城南の僑居を出づ夜の暮尙街巷を蔽ひ市に蔬菜を搬ぶ車の音轣轆として闇に鳴る、銀座を過る時玉屋の時計に四時三十五分なりと知り逓二丁目にて天全く曉け魚川岸の市早くも立ち入津の舟唄賑はし、長橋を馳る電車の響に心も急がしく歩を速めて兩國停車場に抵れば聰氏已に在り秋氏も尋いで來り五時十分を以て汽車は發しぬ。

市觀乍ち竭き畦畔十里稻田靑々時々丘陵の眠を遮るあるのみ離落に點々たる百日紅の朱を何ならむなど曰ひて興じぬ。

八時五十八分成東にて下車しぬ驛の直前なる茂林蓊鬱たる丘岡に甍を示せるは余等の賽せむとする波切不動尊の堂宇なりけり程六丁許往來人少く今し閑なりと見ゆる割烹の亭に若き女の赤き褌して草花咲ける垣根の小流に厨具洗へる艶に嬌めかし。

くれなゐの色なる浪にうつりたるほの三日月の眉もなつかし

繭扱へる店警察分署など眼に著きぬ。

不動尊の堂は京の淸水堂を縮めたるが如く高さ四丈許近頃塗換へたりと覺しく朱の光き

は〳〵し、堂よりの眺望佳ならざるに非ざれど青氈を敷けるが如き稻田と蒼々たる樹林とのみにて山水の景備はらねば特に云ふべき程のものにてはなし、見晴臺は丘の頂點に在り眼界少し廣し、鑛泉館は丘下に在り閑靜なれは養痾等に好適なるべし、日本二石の一と銘打てるがありき籠岩など名くべき形狀なれど凡眼には何の點が價値あるにや更に識られず

再び汽車中の人となる、黑雲俄に天を蔽ひ驟雨沛然として降り煙靄模糊眺矚頓に改まる

藕の葉に滴る雨の雫水晶の如清らかなり。

見るだにもすゞしかりけりはちす葉に玉ほとばしる夕立の雨

正午過ぎ銚子に著きぬ、直に遊覽列車に轉乘して犬吠迄至らずやと深切なる驛長の注意も行程の詮議と甚しき空腹とに心を奪はれたる我等が耳には入らざりき、遽たゞしく構外に出で泥濘るとまでにはあらぬ雨後の道路五町許行き銚子汽船會社の發著所に發船の時刻と回航の順路とを質し滿足なる回答を得て濱手へと歩しぬ、兩國驛にて交付されたる乘船案内の不明瞭なるを難ずれど今は詮なし。

納屋高く場廣く構へたるは斯地名物の一なる醬油醸造家なりけり、田町と云ふ處にてあやしの旗亭に飯しぬ刺身酢の物など調味惡からず樓上より見渡せば淡雲尙ほ蔽へる利根の河口は渺漫海の如く煙波の上に漂へる常陸の鹿島郡の突端は離れ小島かと疑はれ去來の帆影は宛然白鷗の遊べるが如く蠣殼屋根は夏日の雪と光りぬ。

亭を謝して飯沼觀世音に詣でぬ阪東二十七番の札所にして堂塔宏壯寰者絡繹たりき、歩を東北に運び淺間山の頂に立ちて四方を瞰下すれば今來りし觀音堂先づ眸に入りきぬ例の醬油醸造場の煙突の遠近亂立せる外は湫陋なる屋甍もて充たさる唯東南一帶は丘陵連亘し丘上松樹蒼々たりき、此時天全く晴れ烈日熏赫暑熱燬くが如くなれば稚松の間を下り同じ方面を進みぬ到所導標あるは嬉し。

田畝に沿へる惡路を行き川口神社と誤りて不動尊に詣でしも淺からぬ佛緣ならむかし。

川口神社は松青き沙丘に鎭座し鳥居は海に向ひて立ち其處より女夫嶋の奇岩打寄する大浪小浪さては瑠璃一碧の海洋はた淡く曳ける常の洲端など眺矚鮮かなり、滴る汗拭ひもあへず秋氏に促され岬の方へ沙原二町許行き千人冢を過ぎ波打際を右へと佳景を賞玩しぬ、激浪玉を碎き狂瀾雪を吐き龍神怒り海若咆ゆる邊に或は立ち或は臥せる幾多の怪岩奇石は

其位地を保持して己の力を誇りげなる中に帆懸岩形尤奇し悠々綸を垂るゝ漁夫は見ゆれど獨清の三閭大夫は在るべくもなし。

眼路一線を進むれば碧波搖々たる海洋より大江指して矢よりも疾く馳せ來る無數の漁舟の滿帆に風を孕めるさま近きは大鵬の翼を張るが如く遠きは晨星の光を放つが如く眺望飽くまで佳なれど貝殼雜りの沙濱暑熱堪へ難く歩行も亦艱まし。

鐵柱一個高く天を摩し條線幾十蛛網の如きは問ふまでもなく無線電信局なりけり、沙濱踏み盡して少しく海に離れぬ海風防かむとにや畦畔高く造りあるは柴垣結ひ周らし池めきたる火圃隨所に在り捗々しく物實らむとも見えず。

海は斷えず左咫尺にあり林を隔てゝ大吠岬の燈臺を幽かに見、水もなき小川を渉る瓦匠の庭に生瓦乾せる竈より黑煙吐けるなど見るから暑苦し材料の粘土なるべし傍にて掘採り彼方の流近くにて水簸せり。

夕立をさそふ雲かと思ひしは瓦やくやの煙なりけり

再び磯道に出でぬ『黑生海水浴』の牓あり皓波躍る處岩礁の形狀怪奇なるが多し鳶岩と

聞ゆるも其中の一なるべし、足場矢倉組みて地底深く鑿れるは此邊に石炭層ありとて炭礦會社にて試掘作業に從へるなりと云ふ。

さても同行三人の間に問題こそ起りたれ、時間に餘裕なければ海鹿島停車場に出で直に銚子へ歸るべしとする軟說と急行して犬吠探勝の素志を遂げむとする硬論と互に自說を主張しぬ、數の上より言へば軟派二人に對し硬論は一人なれど硬論の秋氏確く執て下らず舌戰何時果つべしとも見えず聰氏と余と歸京の期を愆たむ事を惧れ强て秋氏を說き海鹿島停車場へ向ひぬ、小松林伐り開きて新築せる一屋を物色し得て道を問へば主人先に立ち一町許導き其處々々と指し示す厚意謝するに詞なし彼の孤莊は避暑客に室を供へむ爲建てたりと聞くさては情は他人の爲ならぬ類にや。

（二）

利根の溯流と佐原の一夜

松林三町餘夷かなる阪路登り盡せば朱欄白壁紫瓦紅柱翠帳綾く垂れ龍宮の繪に髣髴たる一館あり松風亭と號す、去にし東京博覽會の呼物なりし臺灣館を移し來り此處に麥酒ホー

ルを營めるものにして即ち海鹿島停車場に附屬せり、軒前に配置されたる支那風の榻に倚り聰氏と共に氷を嚥み兼て凉を取る、秋氏快々として獨プラットホームに在り余往いて氏を慰む氏曰ふ場の掲示を看るに尙一の下り列車あり夫に乘りて犬吠に至り一瞥直に其車に駕し來らむと之を傍人に詢れば優に其時間ありと云ふ余と聰氏と之に從ひ乘車券を購はんとし近者乘客少きを以て其一列車を廢せりと謝せられ痛く失望しぬ、然も秋氏未だ犬吠行の素志を擲たず落伍者たるを甘むじて猶且行かむと曰ふ、明夜を期して必ず歸京せむと主張せる氏としては稍矛盾の感あれど鹿島行もと氏の本意に非ざるを以て之を放棄するを意とせざるに似たり、聰氏頻に銚子驛へ歸還を勸めて止まず余は曰ふ秋君獨往け余等先づ歸り今宵旅宿にて會せむと聰氏曰く不可なり會合の不能なること明けしと、余又曰ふ各其欲する處に從ひ自由行動を執りては如何と、聰氏懌ばず切に秋氏を勸めて共に歸らしめぬ。

銚子驛迄は一里に充たねど停車場數個所あり固より回遊車なるを以て途中下車隨意なり余等始に是に乘らざりしを千悔萬恨しぬ、乘船場へ著きしは五時少し過なりき發船は六時なれば今更無聊なれど既に一巡觀了りしことゝて附近散歩の勇氣も出でず、船中にての用意に菓子など購ひぬ。

船は定刻五分を過ぎて錨を拔きぬ相應に乘客多き室の一隅には薦包の貨物をさへ積めり大江の景は溶々蕩々河か海かと疑はる河幅狹き處にて二十町廣き處は一里に餘れりと云ふ或時は汀渚遙に見え或時は茫々際涯を見ず波上に浮泛せる哀れなる陸地は河伯の隻手に容易く掀飜せられむかに見えぬ、松岸には遊廓あり而も樓唯一戸にして日々萬客を迎へ繁昌比なしと云ふ。

同舟に畫伯二氏あり座を舷側に移して寫生に餘念なし、秋氏は出でゝ眺矚に耽る聰氏と余とは無爲に船室に在りしが薄暮に及むで余も亦手冊を出して鉛槧を揮ひぬ。

夜色漸く來り天空も樹林も次第に黯黑となり獨り水光の皓を殘し室には早光微かなる船燈を挑げられぬ、雜談少時汪洋たる江流に銀龍の跳躍するよと看れば皎月已に天に澄めり我船の間斷なき針路の變轉に幾度か余が視界を去來隱顯する彼玉輪と濛々として晴空に騰り茫乎として無際に消ゆる我船の黑煙とは夜氣沈々たる此時此際轉た征客をして愁緒切ならしめぬ。

旅人の心も知らで月夜よし夜よしすゞしといひはやすなり

或は南岸にあるは北岸に船は幾度か進航を停めて客と貨物とを呑吐しつれど地名等一も記憶せず、津の宮近づきし頃渚の蘆の葉摩らむばかりに南岸に傍ひて行く近頃浚渫せし處なりと云ふ。

津の宮には香取神宮の一の鳥居立てり彼の畫客は其處に上陸しぬ、十時二十分佐原に著く、戸々既に寢に就きけむ房肆皆鎖し街頭寂として人なきに輕舟を河流に委して月下玉笛を吹奏せるは風流青年が業餘の好樂なるべし。

余等と共に船を出でたる某氏は商用にて平素往復し土地案内者なりとて深切にも余等を導き停車場など指し示し捷道して豫て聞ける旅館木内樓に抵らしめぬ。

樓は旗亭を兼ぬ建築壯にして房室什器等清洒なり余等は奥まりたる一室に入りしが壁に懸けたる美人畫の餘りに拙劣なりしには興醒めぬ、隣室には粹紳士在りき羅袖紅裳あわだしく立ちて障を閉ぢぬ粹士は齡知命をや過ぎつらむ淺酌低唱興酣なり妓容貌は見えず三絃の音締はさして好ならず粹士の端唄の緩急曲折全然常軌を逸せるにはさすがの妓も當惑しけむ『そこをお上げなさりませぬとゝゝ此前伺ひました時はお上げなされてゝゝ』彼女の苦心察するに餘あり。

食膳は運ばれぬ聰氏は飯肉の快喫のみに滿足せざりき麥酒三罎席を移して飲み二更に至れりと。

隣室は思ひしよりも早く靜まり粹士は愛妓に別を惜まれつゝ去れり但其間の眞消息に至りては余等の窺知し得べきに非ず、煩熱纔に去り客夢將に結ばむとする時忽ち又隣房に婦女の漫罵聞え程なく四十男の音聲にて婢らしきに勤務ぶり何くれと懇に諭し且つ慰むれば若き女の、旦暮朋輩に困められ有らぬ浮名さへ立てられ口惜しく艱しとは思へど母の切なる倚頼もあれば忍びて辛抱する覺悟なり一夜客などに關係し若し姙娠などして物笑に爲らざる樣慎み居れり然るを兎や角と噂さるゝは殘念なり妾は露後暗き所なしされば縱令纒頭は得られずとも今一年程手堅く勤め前借を濟して自由の身とならむと心懸け居れり云々と涙ながら辨疏せるが聞えぬ、意外なる愁嘆を聽くものかなと。

思ひきや一夜夜ばかりとうかれきてかゝるなげきの陰に寢むとは

眠られねば電燈消し二時を過ぎて漸く夢路に入りぬ。

（三）

香取神社參拜と横利根の舟行

翌朝は五時半に覺めぬ餐を了りしは七時近かりき天候快晴にて早くも溽著を感じぬ、樓を出でゝ四五町許は繁華にして店舗の裝飾など東京めきたり香取迄二十二町道砥の如く路樹の櫻陰涼し阪路一町餘を登りぬ左右の田面稻青々と伸び遠近の丘阜樹欝々と茂り民家ある處草花垣に笑む。

朝顏の糸瓜と睦ぶ垣根かな

旅館二三戸を數へ神宮の社頭に抵る、巨杉亭々天日を蔽ひて塵寰の煩擾を容れず片そぎ造の本殿の莊嚴は云ふも恐にて舞殿攝社等何れも淸淨端麗神威を副へざるはなし、神前の拜を了り後苑を行く事一町餘神境盡さむとして茶亭あり潮來十六島を眼前に睹眺望佳好なれど利根の江水の森林に遮蔽せられたるを遺憾と思ひぬ。

昨同船せし畫伯は既く亭に在りしが余等の憩へる間に出で去りぬ。

一茶して進む神域數百步靑苔地に敷き櫻樹翠老い喬木陰深し碑碣幾基讀まれ貌なれど熟視する遑もなし裏門を出で阪路を下りたる處に神水井ありき、杉茂る丘を左に稻田を右にして坦道を行く炎帝の威は昨に倍して逞しけれど涼風衣袂を拂ひて劇暑もさまで苦しからず津の宮迄十五町なり汽笛に驚かされ走りて棧橋に至りぬ、津の宮には旅亭唯一戸見ゆ例の畫伯は悠々輕舟に乘れり、八時十分汽船は復佐原へ著く、傍に浚渫船横はる十分許を荷役に費し錨を拔きて中流に出でけるが又復停船しぬ此時上流より一汽船來りて我船間近に停り舷をすり寄せて干早く北浦方面への客を我方に移し了り互に推進器を動かし東西へ別れぬと見る程に我船は三度停船して何時進まむ氣色もなく艀を卸して遺失せし手荷物を取り來る僥倖者さへありき。

乘客皆焦慮し頻に水夫を責むれど利根河改修工事の爲其筋にて測量中なれば詮方なしと空嘯く視れば條線を引き小舟を浮べありて大船の通航は自ら遮斷せられぬ十五分許にて關門は開かれ船は横利根に入る、河幅三十間許岸には蘆荻生ひ茂る、船速平素のよりは疾しなど語れるを聽く、煉瓦夥しく積み土工今最中にて既に煉瓦壁築き了れる處も見ゆこは是

改修工事の一部にて此處に閘門を造り洪水の霞浦北浦沿岸一帶に氾濫するを防止する設計なりと云ふ専門家の立案素より間然する處なかるべきも斯くして大利根流域に新なる災害を惹起さゞれば幸なり、自然を無視したる餘裕なき算數的施設は往々東隅に得て桑楡に失ふの悔あるを以てなり、次第に狹まる岸邊の葦蘆の湛々たる浪に搖らめく中を狸の土舟ならぬ土砂運搬船の幾隻も連りて汽艇に曳かれ行くが得意貌なりき。

余は左岸を睹行きぬ霞浦僅に其一端を現して直に森林に隱れ遠汀近浦雲水濃淡變化曲折ある風景に憧れしめつゝ船は牛堀に停り北濱への客を下しぬ云ふ迄もなく霞浦通ひのに轉乘せしむる爲なり、潮來の淺間山稻荷山など馴れたる客の敎ふる軈て潮來へ著きぬ正午頃なりけむ、名高き加藤洲十二橋の一なる小木橋は右岸に看えぬ。

潮來は彼の『潮來出島の眞菰』の俚謠にて聞えたる花柳鄕なれど近年所在私娼の跋扈に連れ甚しく衰頽して僅に妓館二三を殘すのみなりと打見たる處落莫たる寒邑にして啼花戲蝶の夫らしき士女も看えず抑是風俗向上の徵なるか將墮落の證なるか余之を知らず。

船は北利根に入り江流の幅員愈狹まり僅に十間許西岸は家居點々斷えず東岸は洲渚其儘の稻田際涯を見ず上陸後時間の乏しきを豫期して空かぬ腹に無味の辨當を喫しぬ船僮が二回迄湯を注したる茶瓶は右隅より左端へ引手許多なる中に渺漫たる北浦に出でけるが煙霞深く罩め遠景空しきことを喞つ程もなく船は一直線に大船渡に著きぬ、鹿島神宮の一の鳥居は笠木の中央なる下部に幣束を立てたるが特色と見ゆ。

（四）

鹿島祠の賽と歸航

大船渡には旅亭の外商戸も見ゆ鹿島神宮迄十八町と聞けるに二十二町と札立てたるは如何なる心にや俥々と勸むるを謝して脚行しぬ道は坦々たり但一町許の阪路は此處にも在りき神宮の森嚴崇高なる巨杉の亭立せる後苑樹林の幽邃なる寔に香取に似たりと申すべし唯地稍僻にして旅店など見劣る樣思ひぬ、祠後の林二町餘過ぎり急阪を下りて御手洗池を看る池は古林欝葱たる丘を以て半圍繞せられ晝尙暗く常磐木の濃綠を映して藍をなせる波面は底の見え透きながら蒼龍も潛まむかと怪しまる、試に一掬して手巾を浸す冷なる事冰の如し、浪の上に鳥居さへ立ちいと神々しきに岸を劃れる煉瓦壁なくもがなと看ぬ、無心の

村童の垢離に熱中せるは何の祈願にや、傍なる亭にて頻に茶を侑むれど憩ふべき時間もなければ踵を旋して元來し林の中程より左へ二丁許徑して有名なる要石を一見し繪葉書由來記など求むる聰氏を促し少憩をも爲さずして大船渡に歸り走つて船に投じぬ、發船せるは二時四十分なりき、密雨復霏々とそゝぐ。

湖のなみ〳〵ならぬおもむきを糸より細き雨ぞ見せける

船は良久しく北浦を南航して右に舵を轉じ兩岸近づくかと看れば又忽ち大湖に出づ浪逆浦を駛れると聞く思ふに船體大に過ぎ北利根の支流に入る能はずして此迂路を取るなるべし、銚子以來數次邂逅せし兩書伯中の一氏は又復船室に在り快濶能く語る曰く文部省展覽會出品畫構圖の資料を索り兼ねて水鄕の景趣に親まむが爲莫逆の友某氏と來遊せり乃ち老樹蓊鬱たる神苑の氣分浩蕩たる海洋の氣分漫々たる大江の氣分等を味はゝむが爲にして殊に某氏は伊勢大廟の靈杉を圖せむとする腹案あるを以て到處の巨杉に注目したりしが鹿島祠畔の氣分に憧憬して歸るを肯せず遂に淹留せり云々、と語る處皆氣分說く處悉く氣分なり、假に氣分先生の號を奉らむ哉、他の某々は余等と同じく昨木内樓に宿せしが竟夜喧噪に困めりとて其不平を話す曰く、三絃太鼓のドンチャン騷ぎに二時過迄眠られず眠られねば何か物欲しく自然亭への注文も增す道理なるべければ客をして眠らしめざる旅館の商略と察せらる婢等も物凄き手腕なり少し調子付けば命ずるをも待たず酒、肴、麥酒と續々持ち來る斯かる魔窟に滯留せば財布は忽ち底をはたかむと匆々辭し來れり云々水國の旅館は元來娼樓に異らざるなり。

話柄漸く竭きて扇聲耳に滿ち船僮の供する澁茶のみ驩迎せらるゝ時船は北利根に入り水波の盪搖は兩岸の青蘆を戰がして無限の淸凉を味はゝしめぬ、潮來を過ぎりしは四時なりけむ微雨尙歇まず横利根に入りて一句を得。

秋の水舷に子の尿せり

こは少女の嬰兒抱きて平然舷側に立てるを危みてなりき。

定刻に少し後れて佐原に著く、雨は幸に霽れぬ、或は棹を握り或は畚を提げ老たる又は若き婦女等の一舟に山積されたるを可笑と見つゝ昨過ぎし河沿道を急行し停車場の入口に到れば驛員麾きて疾く々々と促す彼の畫伯と余等と四人倉皇駛走し辛うじて體を車内に投

ずる瞬間に汽笛鳴り列車は直に進行を開始しぬ、流汗幾滴扇を用ゐむとすれども亡し先の狼狽裡に失ひしなり、車上復畫伯と話し成田山頂の喬杉と印旛湖上の風荷とを右に左に觀賞し點燈後我孫子線に移乘し上野に著き九時に家に歸りぬ。

汗漫二日頼に天候の余等煙霞の友を憐むあり驟雨暴雨はた細雨皆船車中に經過したるのみならず犬吠岬の探勝を果さゞりし遺憾はあれど短時日を以て豫定地を巡回し了りしは寔に欣幸といふべし唯時間に餘裕なく徐に奇景を賞し土風を問ふ底の快なかりしは素如何ともする能はざる處なり。終（大正四年稿）

日光湯元の旅（上）

忙中の閑談いつしか眞面目の計畫と成り同じ廳に立走れる同好四人の晃山遊行は忽ち實現し、折柄の好天氣に豫定の宅、田、島三氏と余との外に島氏の室の妍かなるさへ加はり汽車にて上野驛を發したるは七月三十日の午前七時なりき。

車内の雜沓に大宮を過ぐる迄は座席をも得ずして立ち呻きたれど白蓮の楚々たる稻田の青々たるなど窓外の景は見るもすが〳〵しかりき。

宇都宮にて奥羽行のと引分れてよりは車室いと裕なりき右窓に聳ゆる高峯こそ余等が目指す日光山なめりなど語りあふ程もなく街道の杉の老樹の見えみ隱れみするに、はや今市驛の近づけるも知らる。

二荒山とふ道すからあふき見ぬ又たくひなき杉のなみ木を

十一時五分に日光に著き直に電車に搭じぬ、神橋へ到る間の混雜は帝都の電車にも過ぎたり、正午を二十分過ぎて馬返に著き大阪屋といふ亭に晝餐したゝめ、田氏と宅氏とは草鞋に島氏の室は草履に足を固め一同結束して一時頃行を起しぬ。

登降者は絡繹識るが如く客を呼ぶ亭婢等の叫は林の蟬よりも喧し、一昨年來りし時良好比なかりし阪路のいつの洪水に崩壞したりけむ、今しも修築最中なるが沙を篩ひ石を搬ぶ役夫等の中に立交れる女子の多きを見るにも勞働者の不足の啻に都會のみならぬが知られぬ、岩石の間を縫ひ沙磧を蹈みて本道に出づる折からはら〳〵と降りそゝぐ驟雨に心急きつゝ幸橋を渡る、此あたり石壁に傍ひ深溪に枕み行く手に二荒山の風穴を臨み頗る佳景な

り同じさまなる桀橋と深澤橋とは橋桁中央より折れさけたれば溪流近く架けたる假橋を渡り行く本道とは異りて又趣ありき、雨は程なくやむ。

地藏堂のある處九折の阪路にかゝりて宅氏と田氏とは懸け離れて先んじぬ、島氏夫妻と余とは木の根を踏み岩ほを攀ぢて舊道の捷徑を行く方等、般若の二瀑は何れか兄やらむ弟やらむ求塚の故事に似たらむ奇話も起りぬべし青葉遠く霞みて溪の眺望廣やかなり。

後れたる三氏を待ち一たび會して復あと前になる阿含の瀑の茶亭に小憩して又險路を攀ぢぬ例の二氏は新道の坦路を擇めり、華嚴への岐路ある大平に抵りたるは二時十五分なりき、茶亭に二氏を待ち合せつゝ白樺の林の幽情を覺束なくも帖に寫しぬ、思ふまゝ憩ひ五人打連れて瀧道を下り耳を聾する白雲瀑の音響と共に雨霰と散りくる飛沫を浴びつゝ鵲の橋を踰え五郎兵衛茶屋に巨瀑の偉觀を賞しぬ島氏詠あり。

魔の神が呪ふ聲かも百ひろの高きゆ落る華嚴大瀧

元來し路を歸れば白雲瀑の景又更に奇なるを覺ゆ、島氏過ぎかねてしはしと鉛筆を動かし且吟す。

いく千筋おちてはたきつ瀧つせのけに白くもと名にはおふらむ

余も狹き崖路に立ちて帖開きつれと心のみせきて佳景寫し得べくもなければそこ〳〵に筆を收め瀑の上の方を廻りて中禪寺の湖畔に出でぬみち〳〵口號

瀧おつるたにの熊笹露しげし浪のしぶきはかゝりこねとも

鳴神はおとろ〳〵と聞えきて山のかたそは雲立ちまよふ

中禪寺の町は思の外寂し碧眼氏の往來少なく湖水に浮べる短艇も一二隻に過ぎず外客を待つ爲に建てたらむと見ゆる屋館おほむね人けはひなし、旅店の番頭等の宿泊を慫むるを耳にも止めず二荒神社の賽をも明日にし湖光の秀麗に眼を駛せつゝ只管湯元へといそぎぬ さはいへ窃に用意せる水筒の醴泉をみち〳〵酌みかはし携へ來れる行厨の滋味に舌を慰めはた途に求めたる麵麭に腹を膨らますなど興さま〴〵なりき。

黑髮山の麓に傍ひ茂樹蓊蔚たる湖畔路坦かに清爽の氣中秋にひとし。

汗にあえし袂さなから氷るかとおもほゆるまて風のさむけし

蛇行一里許湖に別るゝ邊を菖蒲が濱といふ民戸一二帝室林野管理局出張所、西澤金山會

社事務所、同じ社の發電所など見ゆ右に林間の漫阪五六町許登り一廛に入る廛婢迎へて余等を道の向側なる丘に導き風流なる亭に請じぬ、亭は急湍に枕めり相對せる丘山に繁茂せる翠樹の間より二條の素練襞を疊み垂れて清流に入る、兩布左右にめぐり中間の巨巖楓葉翠滴らむとし淙々の響は蕭仙の曲秘に通ひ清白の光は平林に灑く花絮かと疑はれ飛泉玉を飛ばし深潭藍を湛ふ、こはこれ龍頭の瀑なりけり斯かる勝地に牓示を爲さゞるは抑何の心ぞや危くも知らで過ぐべかりけりと且喜び且つぶやく。

（中）

瀑の上流に傍ひ草深き徑路を登り復本道に出で樹林の間を行く事數町にして廣やかなる平野に出でぬ名高き戰場原なるは云ふ迄もなし、見渡せば峯巒四方を繞りて世間の夏を隔て九夏風爽かにして征衣袖冷かに、春花秋草一時に芬芳を發ち紫紅の彩を檀にすれど去來の雲霧に咽ぶ山鶯の聲悲しく行客をしてうたゝ愁懷に堪へざらしめ遠近點在せる落葉松も友ほし顏にぞ見えにける。

春秋のくさの花こそ咲きにけれうくひすうたひ紅葉にほふ野邊

あき萩もすゝきも見えすめつらしき花のくさ〳〵さきて匂へと

又ある處にて

ひとつ家のさひしからむ旅人をむかへかほにもなける猫まは

原は一名赤沼か原と稱ふ中央三本松の傍に孤屋ありて其處に西山金山に至る道あり猶行く事半里許道の傍に畜牛の小舍ありき原野盡くる處の小流を逆川と曰ふ橋を踰えて數町佗しげなる茅屋の人在りとも見えぬ軒に勝道上人一口水の標ありたれど其水いづくに在るにや、阪路急ならむとして左に湯の瀧道に入る徑路狹窄靑蕪地を蔽ひ小竹脛を刺し白露袂を沾す緩かなる下降四町許にして雅致ある小地に達し直に飛泉の淙々を聞きぬ、形勝を古めたる亭榭のあたら霧露の浸濕に委せるを惜しと思ひぬ。

瀑は華嚴、般若等と形狀を異にし龍頭瀑に較ぶるも尙且温和にして傾斜六七十度の粗平面を成せる堅岩上を滑走、舞踊し來る飛流絮の如く雪の如し。

高峯よりなたれて落つるみ雪かと見えこそわたれ瀧のしら浪

少憩の間に島氏一碑を物色し得て之を閲讀す文は大槻文彥氏の撰に係り明治八年北越三